

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第107集

東大阪市所在

# 瓜生堂遺跡 2

寝屋川南部地下河川若江立坑建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004年2月

財団法人 大阪府文化財センター



方形周溝墓1（上）とその埋葬主体（下）

## 序 文

弥生時代の河内湖に面していた瓜生堂遺跡は、30年以上もの調査の歴史をもつ著名な遺跡です。とりわけ、この遺跡における弥生時代中期後半に作られた多数の方形周溝墓群の検出は、弥生文化研究に大きな貢献をしてきました。これまで、隣接する巨摩遺跡も含めると70基を超える数の方形周溝墓が検出されたこととなります。

今回の調査でも、さらに弥生時代中期後葉の2基の方形周溝墓が見つかりました。そのうち1基は、墓道とも考えられる境状の高まりが墳丘にとりつく状態で検出されました。約2000年前の葬礼の様子がうかがわれる興味深い資料です。また、今回の調査地点は、約30年前の第二寝屋川改修時に確認された木棺や土器棺墓群にも隣接しています。新たにみつかった方形周溝墓と過去の調査成果を合わせると、瓜生堂遺跡南部から巨摩遺跡にかけてつくられた弥生時代中期における一つの墓域の広がりがほぼわかるようになってきました。個別の墓のあり方への注目から、遺跡・集落全体のなかでの墓地のあり様へと、瓜生堂遺跡の調査のもたらす成果の質も変わってきています。そういった変化の積み重ねが、弥生文化に対する見方の変化へとつながっていくでしょう。

また、今回の調査で、弥生時代だけでなく奈良時代から平安時代にかけての建物群や多量の遺物が検出されたことも注目されます。中河内地域における古代の施設群の一端が明らかになってきたことは、8～9世紀の地域史を考える上でも重要です。皇朝鏡を5枚納めた甕が出土したことも注目されます。古代の祭祀の一端が垣間見える成果です。

このように、長い調査歴をもつ瓜生堂遺跡のテーマは、少しずつ変わってきています。この度、確認できた成果や新たに浮上した問題などを示すため、本書を上梓いたしました。本書に記した成果をより多くの方々にご活用頂ければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたってご助力やご支援を賜った関係諸機関・地元関係各位に深く謝意を表したいと思います。なお、今後とも当センターの調査・研究事業に、ご理解とご指導を賜れば幸いです。

2004年2月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野 正好

# 例 言

1. 本書は、大阪府東大阪市若江西新町二丁目に所在する瓜生堂遺跡の発掘調査報告書である。
2. 大阪府寝屋川水系改修工営所から財団法人大阪府文化財センターが平成14年4月1日～平成15年2月28日の間委託を受けて発掘調査を、平成15年4月1日～平成16年2月27日まで委託を受けて遺物整理作業を行い、平成16年2月27日の本書刊行を以て完了した。
3. 調査・遺物整理は以下の体制で実施した。  
調査部長（玉井功）、中部事務所所長（藤田憲司〔平成14年度〕・小野久隆〔平成15年度〕）、調査第5係長（辻本武〔平成14年度〕）、調査第2係長（金光正裕〔平成15年度〕）、主査（片山彰一）〔写真〕、技師（若林邦彦）、非常勤専門調査員（宮田佳代〔平成14年度〕）
4. 木器・金属器などの保存処理については中部調査事務所主査山口誠治が行った。
5. 調査の実施にあたっては、東大阪市教育委員会・若江西新町自治会・大阪府教育委員会をはじめとし、下記の方々にご指導、ご協力を賜った。記して謝意を表したい。

## 【調査指導】（五十音順・敬称略）

池田保信（組織文化財天理教調査団）・池峯龍彦（堺市教育委員会）・大庭重信（（財）大阪市文化財協会）・川上洋一（奈良県立橿原考古学研究所）・菅葉太郎（武庫川女子大学）・鍋島隆宏（太子町教育委員会）・濱田延充（寝屋川市教育委員会）・堀永信雄（東大阪市教育委員会）・藤井整（（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）・別所秀高（（財）東大阪市文化財協会）・溝口孝司（九州大学大学院）・和田晴吾（立命館大学）

6. 調査の実施にあたっては、自然分野からの分析をとして、珪藻・花粉・植物珪酸体分析を古環境研究所に委託した。また、出土した弥生時代中期人骨の鑑定を、大阪市立大学大学院医学研究科助手安部みき子氏に依頼した。それらの成果については、本書第7章に掲載した。
7. 本書の作成にあたっては、各担当者がそれぞれ寄稿し、執筆分担は下記の通りである。  
第1章—辻本武、第2章—杉山拓己（同志社大学文学部4回生）・若林邦彦、第3・4章—若林邦彦、第5章—宮田佳代・若林邦彦、第6章—河森一浩（同志社大学大学院文学研究科博士課程後期）・若林邦彦、第7章第1節—若林邦彦、第8章—若林邦彦
8. 本書の編集は、若林邦彦が行った。
9. 本調査に関わる写真・実測図などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。



# 凡 例

1. 遺構実測図・土層断面図などに表記した標高は、東京湾平均海水面（T.P.）を基準とし、mを主要な単位として用いた。
2. 遺構平面図には、原則として国土座標ラインを明示した。国土座標の基軸方向およびその数値には、世界測地系における測量値を記載した。記載時の単位としてはmを用いた。
3. 遺構平面図に付した方位針は、すべて座標北を示している。
4. 現地調査および遺物整理は、基本的に「遺跡調査基本マニュアル」（財）大阪府文化財センター2003）に準拠して行った。
5. 土層断面図における土色は、小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』（通産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究色票監修）を用いて表現した。土色記載の際には、原則として色名・記号・土質名の順に記した。
6. 各遺構の番号は原則として、溝・土坑・柱穴などの種類を問わず通し番号を付すこととしている。その際、遺構番号—遺構種類（例「32—溝」）という表記方法をとる。ただし、掘立柱建物・方形周溝墓など、複数の遺構の集合体として認識される遺構については別に番号を付した。その際には、遺構種類の後ろに番号を記載する方法（例「方形周溝墓1」）を用いて、先の遺構名と区別した。
7. 各遺構面における、調査区全体図については縮尺を1/200に統一した。また、土器実測図も縮尺を1/4に統一した。それ以外については、各図にそれぞれ縮尺を示した。
8. 木製品については、断面図に木取りがわかるように年輪形成形態を略図で示した。
9. 写真図版に掲載した遺物については、縮尺を統一していない。

# 目 次

巻頭カラー図版・・・・・・・・弥生時代中期後葉方形周溝墓群全景

同 主体部検出状況  
同 周溝供献土器出土状況

序文

例言

凡例

第1章 調査に至る経緯と経過 ..... (辻本) 1

第2章 既往の調査成果 ..... (杉山・若林) 3

第3章 発掘調査の方法 ..... (若林) 7

第4章 基本層序 ..... (若林) 9

第5章 近世～古代の遺構・遺物 ..... (宮田・若林) 13

第6章 古墳時代～弥生時代の遺構・遺物 ..... (河森・若林) 37

第7章 基礎分析

第1節 方形周溝墓埋葬人骨の分析 ..... (安部) 79

第2節 瓜生堂遺跡02-1 調査区の自然化学分析 ..... (古環境研究所) 81

第8章 調査成果のまとめ ..... (若林) 83

写真図版

# 挿 図 ・ 表 ・ 写 真 目 次

## 第 1 章

図1.01 調査地点と周囲の道跡 ..... 1

図1.02 調査区の位置 ..... 2

## 第 2 章

図2.01 瓜生堂遺跡における古代遺構の分布 ..... 4

図2.02 瓜生堂遺跡における弥生時代中期遺構の分布 ..... 6

## 第 3 章

図3.01 調査区と地区割 ..... 7

## 第 4 章

図4.01 基本層序模式図 ..... 9

図4.02 02-1調査区西側土層断面図 ..... 11

## 第 5 章

図5.01 第1a遺構面平面図 ..... 13

図5.02 第1b遺構面平面図 ..... 14

図5.03 第2遺構面平面図 ..... 16

表5.01 第2遺構面検出遺構 ..... 17~18

図5.04 121-井戸平・断面図 ..... 19

図5.05 124-井戸平・断面図・出土土器 ..... 20

図5.06 掘立柱建物1平・断面図 ..... 21

図5.07 掘立柱建物1柱穴出土土器 ..... 21

図5.08 掘立柱建物2平・断面図 ..... 22

図5.09 掘立柱建物2柱穴出土土器 ..... 22

図5.10 掘立柱建物3平・断面図 ..... 22

図5.11 52-井戸平・断面図 ..... 25

図5.12 52-井戸出土土器 ..... 26

写真5.01 52-井戸上層遺物出土状況 ..... 26

写真5.02 52-井戸最下層遺物出土状況 ..... 26

図5.13 52-井戸最下層出土鉄製品・木製品・ガラス玉 ..... 27

図5.14 52-井戸西割板 ..... 27

図5.15 52-井戸北割板 ..... 28

図5.16 52-井戸東割板 ..... 28

図5.17 52-井戸南割板 ..... 29

図5.18 52-井戸井戸枠裏込め板 ..... 29

写真5.03 52-井戸平載状況 ..... 29

図5.19 74-土坑土器出土状況 ..... 30

図5.20 74-土坑出土土器 ..... 30

図5.21 63-堀杭遺構平・断面図・出土土器 ..... 31

図5.22 12-井戸平・断面図 ..... 33

図5.23 12-井戸出土土器 ..... 33

図5.24 2面検出遺構出土土器 ..... 33

図5.25 2層出土土器 ..... 35

## 第 6 章

図6.01 第3遺構面平面図 ..... 37

図6.02 153-堰平・断面図 ..... 38

図6.03 3層出土土器 (1) ..... 40

図6.04 3層出土土器 (2) ..... 41

図6.05 3層出土土器 (3) ..... 42

図6.06 第4遺構面平面図 ..... 44

図6.07 4層出土土器 ..... 45

図6.08 第5a遺構面平面図 ..... 46

図6.09 方形周溝墓1・2土層断面図 ..... 47

図6.10 堤状遺構1土層断面図 ..... 48

図6.11 第5b遺構面および墳丘盛土内遺構面平面図 ..... 49

図6.12 方形周溝墓1と関連遺構面平面図 ..... 50

図6.13 方形周溝墓1主体部1平・断面図 ..... 51~52

図6.14 方形周溝墓1主体部2平・断面図・出土土器 ..... 53~54

図6.15 方形周溝墓1主体部3平・断面図 ..... 56

図6.16 方形周溝墓1主体部4平・断面図 ..... 57

図6.17 方形周溝墓1北周溝 (156-溝) 遺物出土状況 (1) ..... 58

図6.18 方形周溝墓1北周溝 (156-溝) 遺物出土状況 (2) ..... 59

図6.19 方形周溝墓1墳丘上・北周溝 (156-溝) 出土土器・石器 ..... 60

図6.20 方形周溝墓1西周溝 (155-溝)・南周溝 (155-溝) 出土土器・石器 ..... 62

図6.21 方形周溝墓1西周溝 (155-溝) 下層出土土器 ..... 63

図6.22 方形周溝墓2関連遺構と供献土器出土地点 ..... 65

図6.23 墓坑状遺構平・断面図 ..... 66

図6.24 方形周溝墓2墳丘上・周溝 (154-溝) 遺物出土状況 (1) ..... 67

図6.25 方形周溝墓2墳丘上・周溝 (154-溝) 遺物出土状況 (2) ..... 67

図6.26 方形周溝墓2墳丘上・周溝 (154-溝) 遺物出土状況 (3) ..... 67

図6.27 方形周溝墓2墳丘上・周溝 (154-溝) 遺物出土状況 (4) ..... 68

図6.28 方形周溝墓2墳丘上・周溝 (154-溝) 遺物出土状況 (5) ..... 69

図6.29 方形周溝墓2墳丘上・周溝 (154-溝) 出土土器 (1) ..... 70

図6.30 方形周溝墓2墳丘上・周溝 (154-溝) 出土土器 (2) ..... 71

図6.31 方形周溝墓2墳丘上・周溝 (154-溝) 出土土器 (3) ..... 72

図6.32 方形周溝墓2墳丘上・周溝 (154-溝) 出土土器 (4) ..... 73

図6.33 方形周溝墓2墳丘上・周溝 (154-溝) 出土土器 (5) ..... 74

図6.34	方形周溝墓2盛土下層出土土器	74
図6.35	堤状遺構1とその周辺出土土器	75
図6.36	方形周溝墓周溝遺物	75
図6.37	第6遺構面平面図	76
図6.38	6-2層出土木製扉・6-3層出土土器	77
第7章		
表7.1	下顎歯の出土表	79
表7.2	下顎歯の計測値	79
図7.01	方形周溝墓1主体部2・4人骨残存部位	80
表7.3	瓜生堂遺跡における花粉分析結果	83
図7.02	瓜生堂遺跡における花粉ダイアグラム	84
表7.3	瓜生堂遺跡における珪藻分析結果	87～88
図7.03	瓜生堂遺跡における主要珪藻ダイアグラム	89

## 第1章 調査に至る経緯と経過

大阪府下の中河内地域である寝屋川の周辺流域は、もともと低平地となっているために浸水被害を受けやすい自然的特性を持っている。それだけでなく、ここは近年の急速な都市化の進展によって保水・遊水機能が低下し、あるいは雨水の流出形態が変化したりしたために、大雨による浸水被害が発生しやすい状況にある。

大阪府ではこのような浸水被害の解消を図るため、総合的な治水対策を進めてきた。その一環として、



図 1.01 調査地点と周囲の道跡

道路等の公共用地の地下空間を有効に利用した「地下河川」の建設が計画された。寝屋川南部地域では、東大阪市若江西新町を起点として、大阪市西区の木津川に至る総延長約13km、内径7～10mの施設を地下15～35mの深さに築造する計画である。

地下河川の起点は発進立坑を建設することとなるが、そこは瓜生堂遺跡という全国的に著名な弥生時代の遺跡にある。これまでの調査で大規模な方形周溝墓群が検出されており、今回の立坑予定部分も遺構が良好に残存している可能性の高い場所である。

工事を計画した寝屋川水系改修工営所は大阪府教育委員会と協議を重ね、大阪府文化財センターに発掘調査を委託することとした。

当センターは現地結所の設営等の準備を待って、平成14年5月より現地における発掘を開始した。

調査の進捗に伴い、古代の掘立柱建物や井戸を発見し、銭貨の入った壺といった遺物が出土した。また弥生時代の良好な方形周溝墓群を検出し、当初の予想通りに貴重な遺構・遺物を確認することができた。そこで同年9月15日に地元自治会や住民向けに遺跡の現地説明会を開催し、130名の見学者が来場していただいた。その後も調査は順調に進展し、翌15年2月までに現地調査とそれに伴う整理・検証作業を終えた。引き続き報告書作成に向けて内業整理作業を行ない、同年9月にすべての作業を終了して、その後印刷作業を行った。

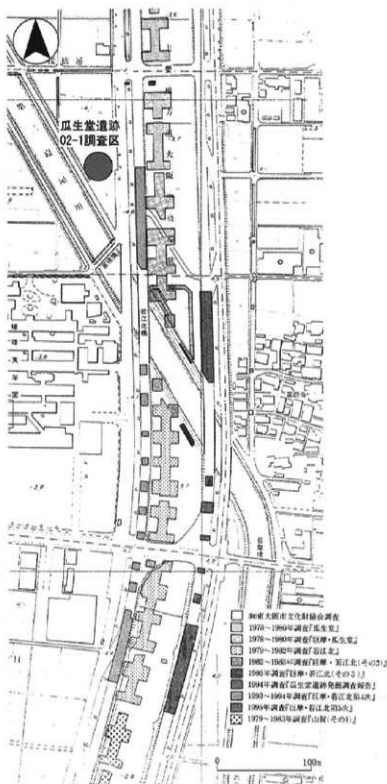


図1.02 調査区的位置

## 第2章 既往の調査成果

瓜生堂遺跡においては、これまで約30年もの間に多数の調査が行われてきた。本章では、既往の調査成果について述べるが、当調査区での主要遺構面との関係を明らかにするために、弥生時代と古代の二つの時期についてとりまとめた。また、必要に応じて巨摩遺跡をはじめとする周辺の事例についても言及することとしたい。なお、文中で「○次調査」としているものはすべて東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会による調査で、その名称は既刊の報告書に対応している。それ以外の機関による調査は報告書名によって調査名称を示している。

古代については、包含層自体は遺跡のうち広範囲に検出されているものの、遺構形成が明確な領域は限定されている。ここでは、遺跡の西部から大まかな地区ごとに述べていく。

遺跡西部では調査自体が少ない。24次では、掘立柱建物5棟以上、井戸2基、焼土坑が検出されている。曲物杵を使用した9世紀前半の井戸SE01からは土器のほか銅銭9枚、木製の櫛1点が出土し、遺構以外でも銅銭、土馬が出土している。これに隣接する32次でも同時期と考えられる溝やピットが検出されている。

古くから調査が集中している遺跡中央部では、当該期の資料も比較的豊富ではあるが、遺構の検出例は僅かであり、包含層中に見られる遺物としての報告例が大半である。『瓜生堂』および『巨摩・瓜生堂』ではB地区で掘立柱建物7棟をはじめ溝、土坑、ピットが、C地区で溝、ピットのほか8世紀中葉を中心とした土器を多量に含んだ落込が検出された。このほかにB地区で平安時代の土坑、H地区で土坑、溝が検出されている。また、遺物はC地区で瓦が、F地区で製塩土器が見られる。周辺の小規模な調査では、40次で8世紀の溝、35次で井戸状遺構、落込が見られ、9次では溝、ピット、落込が、20・21次では溝、ピットが検出されたほか、包含層から土馬が出土している。38次では皿を蓋とした完形に近い8世紀後半の土師器の壺が出土しており、報文では蔵骨器もしくは腹衣壺である可能性が指摘されている。また遺物では28次で石製の鈎帯巡方が、37次(巨摩遺跡第5次)で灰釉陶器、瓦、製塩土器が見られる。巨摩遺跡の範囲内を見ると6次で井戸、溝が検出されている。この遺構群の広がりには瓜生堂遺跡の南端部が含まれる可能性もある。

遺跡南東部においては48次で8世紀の溝、土坑、ピットが検出され、獸脚円面硯、土師、製塩土器が出土している。また31次でも小規模な調査区ではあるが8世紀の井戸や9～10世紀の溝、土坑といった遺構が確認されており、南東部にも遺構の集中する地区が存在するようである。

遺跡北東部では45次の資料が顕著である。掘立柱建物2棟、井戸6基や、土坑、溝などの9～10世紀の遺構が検出されている。遺物を見ても灰釉陶器、緑釉陶器、円面硯、瓦、金銅製帯金具、銅銭、木製櫛、土錘、製塩土器と豊富である。東に隣接する47-2次では当該期の遺構は見られず、包含層出土物の内容から見ても遺構群の西側への展開はないようである。

以上を見ると瓜生堂遺跡の範囲内では、24次地点を中心とした遺跡西部、『瓜生堂』B地区を中心とした遺跡中央北部、31次・48次地点を中心とした南東部、45次地点を中心とした北東部のそれぞれ4カ所において当該期の遺構のまとまりがみとめられる。時期では金村浩一氏がまとめているように中央北部は8世紀が中心であると見られる一方、西部および北東部の中心は9世紀にある。南東部と巨摩遺跡6次については遺構群形成の中心となる時期を決定するには情報が不足する。以上から、古代において瓜生堂遺跡では小規模な集落が一定期間を経て移動していたという状況が考えられよう。

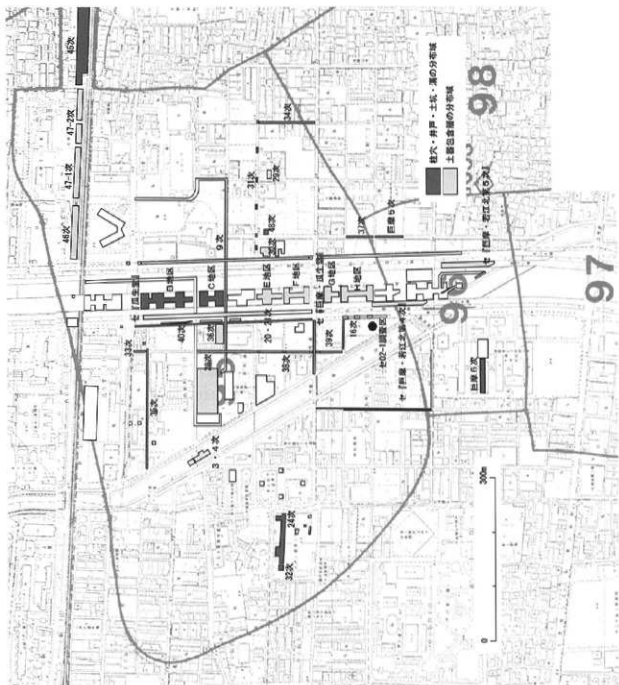


図 2.01 瓜生堂遺跡における古代遺構の分布



今回の調査区でも、後述するように奈良時代～平安時代前半の遺構・遺物が検出された。これは当遺跡でいままでも集落痕跡の部分で建物群を検出したことになり貴重な成果といえる。

弥生時代については、前期～後期初頭の遺構・遺物が検出されている。前期は3・4次、45次、47次調査において遺構が確認されているほかは土器が少量見られるのみである。南方の若江北遺跡（『巨摩・若江北第5次』）では近畿地方最古段階の遠賀川式土器を伴う集落跡が発見されている。

中期では遺存状況の良好な方形周溝墓群の検出がつとに知られるところであるが、その事例は現在でもなお増加中である。遺跡北西部の42次、西部の8・12・17・28次、中央北部の『瓜生堂』、中央南部の『巨摩・瓜生堂』、北東部の45・47次等で検出されており、それぞれ独立した墓群が複数存在していた状況が捉えられる。なお、当調査区に近接する2次地点で確認されている木棺、土器棺も方形周溝墓の埋葬施設と考えられる。一方、集落域と考えられる遺構群では、西部の27・28次、中央北部の『瓜生堂』、36次、北東部の26・46次といったまとまりがそれぞれ見られ、墓群との対応が想定されている（若林2001）。

なお、中期の特筆すべき遺物としては47次で鉄斧、『瓜生堂』で大阪湾型銅戈や銚型片、『巨摩・瓜生堂』で有鉤銅劍が見られるほか、1965年に発見された武器形青銅器の破片がある。

後期初頭になると巨摩遺跡（『巨摩・瓜生堂』、『巨摩・若江北第4次』）において引き続き方形周溝墓の造営が認められるが、埋葬施設からの装身具の出土は中期の事例には見られない現象である。また貨幣、銅鏝等の金属製品、瀬戸内系やいわゆる近江系といった外系土器の出土が目される。47次では中期末～後期初頭の配石遺構が検出され、後期の包含層の形成も見られるものの、瓜生堂遺跡内全体を見れば後期は遺構、遺物ともに希薄であると言えよう。

今回の調査区は、巨摩遺跡に隣接する領域に位置している。弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構形成が調査前から予測されたが、結果として弥生時代中期後葉の遺構・遺物のみを確認することとなった。

（杉山・若林）

金村浩一 1999 「瓜生堂遺跡の古代集落について」『瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告』財団法人東大阪市文化財協会 pp.199-201

若林邦彦 2001 「弥生時代大規模集落の評価」『日本考古学』第12号 日本考古学協会

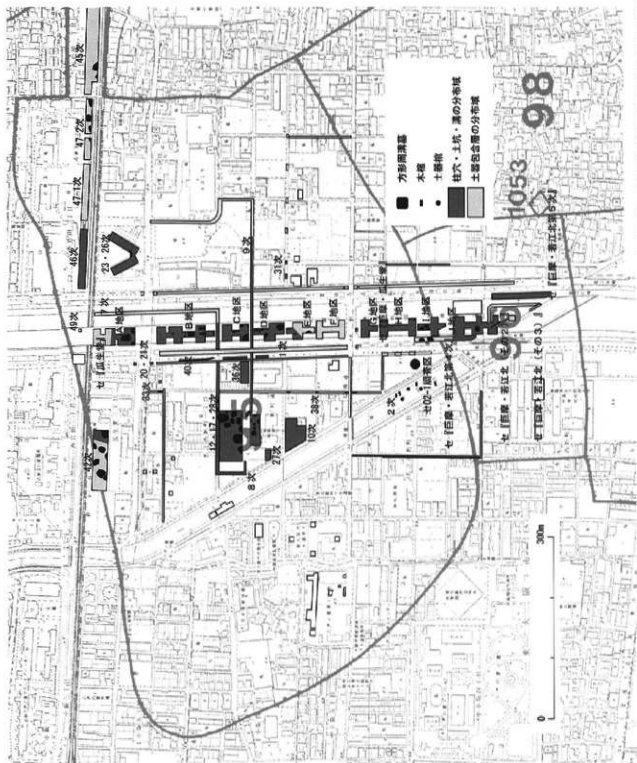


図2.02 瓜生堂遺跡における弥生時代中期遺構の分布

## 第3章 発掘調査の方法

【地区割】 今回の調査が行われた2002年は、国土座標の測量体系が、日本測地系から世界測地系へと移行した初年にあたる。いわば、移行期間ともいえる年であり、本調査では航空測量に関しては新測地系に則って調査データを作成した。しかし、当センターで採用されてきたI～V区画までの地区割り体系は、日本測地系に則っている。新測地系が導入された今回の調査区に同じ名称体系の地区割りを導入すれば、調査データは混乱する。そこで、最終的な遺構図の調査データや、本書での位置データに関する記述は新測地系を導入するもの、調査時には全く別の地区割りをを用いた。

今回の調査区は、径30mの円形かつ変則的な平面形態であるため、その円の中心地点（世界測地系で $X=-148727.966\text{m}$   $Y=-36872.096\text{m}$ ）から東西南北に5m方眼に区分を行う形で地区割りを行って作業を進めた。基準となる基軸線方向には、旧測地系（日本測地系）の南北方向基準線を用いた。新・旧の測地系はその座標値が異なるだけでなく、地点によっては基準方向にもずれがある。しかし、当調査区は最大幅が30mなので、実際には新測地系との方向角のずれがもたらす平面方向での基準点のずれは、数mmしか発生していなかった。通常調査で作成する1/10以下の縮尺図を作成するレベルにおいては、新・旧測地系の基準方向のずれは、本調査においては、ほとんど影響与えていない。

具体的な地区割り名称としては、円の中心点を0-0とし、北へ5mの地点をN5-0、10mの地点をN10-0と5m単位で基準点を設定した。その各基準点を北当角にもつ5m方眼の各単位にそれぞれその基準点名を冠した地区名を配した。その具体的な配置図は図3.1のとおりである。なお、この地区割りは主に包含層出土物の取り上げの位置情報として利用した。

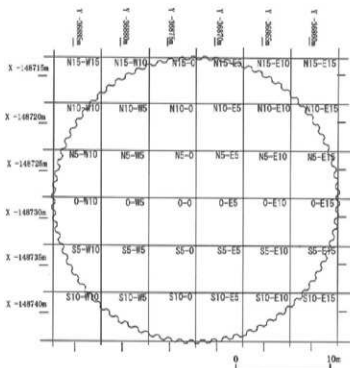


図3.01 調査区と地区割（ $S=1/400$ ）

【水準】 標高値は、東京湾平均海水準面を基準とした数値（T.P.）を用いた。

【測量】 主要な遺構面については、空中写真を用いて縮尺1/50の全体遺構平面図を作成した。今回の調査では、第2・3・5a・5b・6面という五つの遺構面において写真測量を行った。それ以外の遺構面については、調査区全体の遺構分布図は平板測量もしくは先述の5mメッシュの基準点を用いた実測作業によって作成した。個別の遺構については、基準点を使って1/10の遺構平・断面図や遺物出土状況図などを作成した。

【遺構名称】 すべての遺構に通し番号をつけて登録を行い、遺構名の標記方法は、「数字-遺構種類」という形態をした。これは、遺構番号の重複を避けて調査・遺物整理時の混乱を避けるための方法である。結果として、溝・土坑・柱穴などの遺構の種類に関係なく遺構番号が付与されていることになる。ただし、掘立柱建物や方形周溝墓などのように複数の遺構の複合物として認識できる遺構に関しては、遺構種類ごとに順に番号を付与し、「遺構種類-番号」という表現方法をとることによって、個別遺構の名称との差異がわかるようにした。

## 第4章 基本層序

今回の調査では、T.P.4.2～2.8mに形成されていた現代耕土・盛土層を機械掘削で除去し、T.P.2.8～～1.5mにわたる堆積土については、人力掘削を行って調査した。後者は弥生前期～近世の期間に形成されたと考えられる。

最上部のT.P.2.8～2.6mの範囲に0.1～0.2m程度の厚さで形成された1層（暗灰黄色中粒砂まじりシルト）は、中～近世に機能した耕土層と考えられる。層中には多数の古代土器片とともに瓦器や近世磁器類などが含まれていた。出土土器の混在状況に加え、中粒砂～シルトが均質に混在した暗色層であることも考慮すると、先行して形成された古代土器包含層を耕起・攪拌して形成されたと想定できる。1層内はさらに細分が可能で2面の遺構面（1a・1b面）が確認できた。第1a面では上面幅約18mの南北方向に展開する島畠が検出された。第1b面では上面幅約3.5mのものと、約7mのものの2条の南北方向の島畠が検出された。いずれの遺構面でも、南半部は現代の攪乱により削平されており、島畠の正確な形状・規模は不明である。

2層は1層の直下厚さ約0.1m程度にわたり形成されたオリーブ黒色細粒砂まじりシルト層で、奈良時代後半～平安時代前半を中心とした時期の土器片が多数出土している。しかし、少数ながら飛鳥・藤原京期の須恵器も出土することから、層の形成には一定程度の時期幅を考慮する必要がある。この2層の

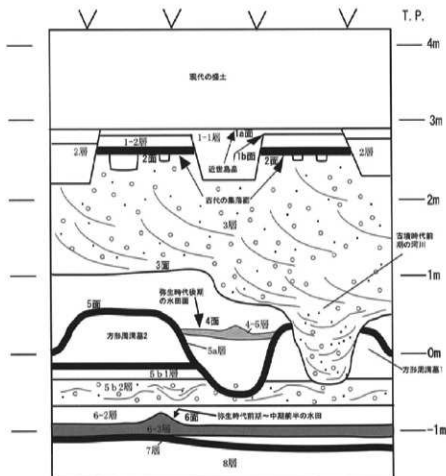


図4.01 基本層序模式図

下面(第2面)では、土坑・井戸に加え、多数の柱穴が検出された。掘立柱建物を中心とする古代の建物群が形成されていたものと考えられる。この層の暗色化が顕著で細粒砂～シルトが均質に混在する層相であるのは、地表化や居住関連遺構形成に伴う攪拌などが頻繁に行われた結果と考えられる。上部は中～近世の耕作により攪乱を受けて耕土(1層)となったと考えられ、本来ならもっと厚く形成された土器包含層だったと想定される。

3層は2層の直下、T.P.2.5m～1.0mの範囲に1.5m以上の厚さにわたって堆積している粗粒砂～シルト層である。粗粒砂中にシルト・植物ラミナ層がみられ、トラフ状斜行業理を形成していることから河道内堆積物層と想定できる。地点によっては下層の4層上面をさらに1m以上も侵食して堆積している箇所もあり、これは河道の中心部分と想定できる。3層中～最下部からは庄内式～布留式前半期の完形土器が数点出土し、最上部の薄い粘土層からのみ古墳時代中期中葉の須恵器が出土した。このことから3層を形成した河道が当調査地点に形成されたのは古墳時代前期を中心とした時期であったと想定され、河道堆積の最終段階の水溜り状況が古墳時代中期まで継続していたと考えられる。なお、この河川における初期の主要流路の形状が3層下面である第3面で検出されている。

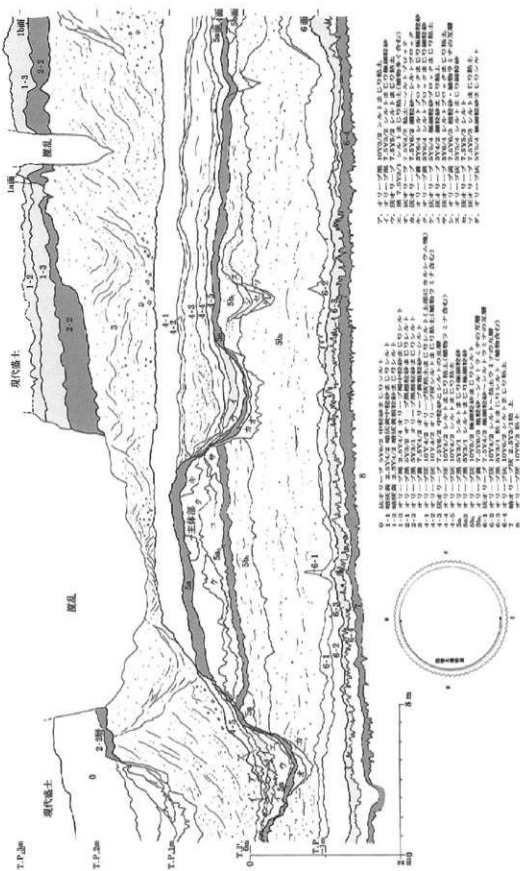
4層は3層の直下、T.P.1.0～0.4mの範囲に厚さ約0.5～0.7mにわたって堆積している暗灰色シルト～粘土層である。4層は層中の植物遺体の包含状況などから4-1～4-5層に細分することができるが、そのうち4-5層上面(第4面)では水田畦畔が検出された。この遺構面では、水田畦畔が下層に形成された方形周溝墓を基盤とする隆起部分にとりつく形状で水田区画が形成されている。耕土と考えられる4-5層からは、少数ながら弥生時代後期の土器片が出土している。

5層は4層の直下、T.P.0.5～0.7mの範囲に形成されていた。このうち上部約厚さ約10cmの5a層は黒色細粒砂～シルト質で構成され、弥生時代中期後葉の土器を含む土壌化層である。人的活動によって暗色化・土壌化した5a層は、その上面の最大標高がT.P.0.6m、最低標高がT.P.-0.5mと、凹凸が顕著な状況であった。調査の結果、隆起部は盛土によって形成された方形周溝墓に相当することがわかった。5a層上面(第5a面)では方形周溝墓は2基検出され、いずれも5a層中に含まれた土器の年代から弥生時代中期後葉の所産と推定される。また、5a層直下の5b層は、上部(5b<sub>1</sub>層)が青灰色極細粒砂～シルト、下部(5b<sub>2</sub>層)が粗粒砂～中粒砂を主体とし、植物・シルトラミナの発達した流水堆積層で、弥生時代中期後葉の地表化や人的活動による攪乱を受けなかった部分と考えられる。形成されたラミナ構造の形状から、5b層は河川内堆積物ではなく周辺河道からの越流堆積物層と想定される。

この5層の直下には、暗灰色シルト～粘土を主体とする6層がT.P.-0.7～-1.2mにわたって形成されている。植物遺体を多く含む6-3層の上面では南北方向の主要水田畦畔が一条検出された。調査区北端部では畦畔の途切れた状況から水口が確認され、調査区中央西よりには東西方向に枝分かれた小畦畔も検出された。この水田プランの耕土と考えられる6-3～6-4層からは少量ながら弥生時代前期土器片が出土し、耕作の上限時期を示している。耕作の下限時期は6-2層～5b層からの土器の出土が皆無なため判断できないが、およそ弥生中期前葉には水田が廃絶していたものと考えられる。

6層の直下には厚さ約0.05～0.1m程度の黒色粘土層である7層が堆積している。その直下の青灰色粘土層である8層との層理面から下方にむけては、植物根痕跡と思われる貫入痕跡が多く見られる。7層からは遺物の出土は確認できなかったが弥生時代前期～縄文時代晩期に相当すると考えられ、この時代には幸頼の繁茂する環境にあったことが推定される。

图 4.02 02—1 調查区西盤土層断面图



## 第5章 近世～古代の遺構・遺物

## 1. 第1a遺構面（近世）

先章に記した通り、第1a遺構面は1-1層上面に形成されていた。南半部は近～現代の削平によって破壊されているものの、調査区の中央に南北方向に直線的に伸びる隆起部が検出された。幅約18m、高さ約0.3mの規模である。1-1層自体が、古代～近世にわたる土器包含層であること、シルト～中粒砂が均質に交じり合う土質であることなどから、古代土器包含層が耕作により攪拌されて形成された土層と考

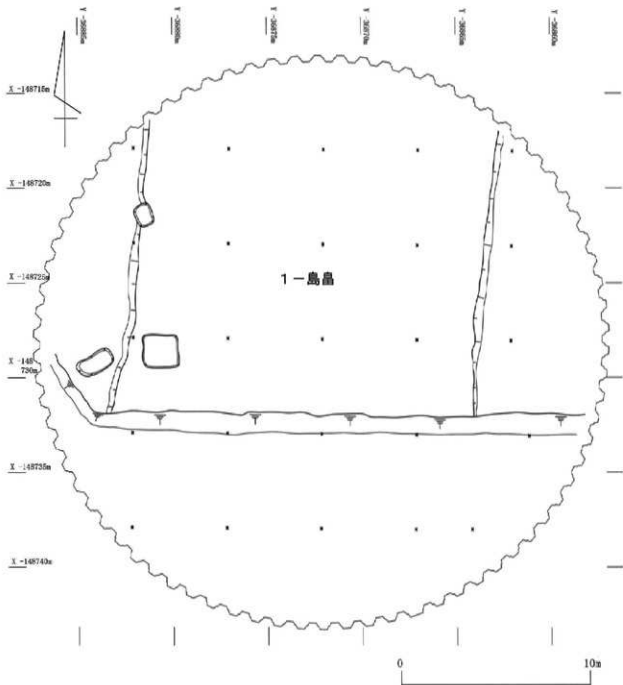


図5.01 第1a遺構面平面図 (S=1/200)



えられる。このことから、隆起部は鳥居として機能していたと推定され、遺構名を1-鳥居とした。検出状況では、1-鳥居の上面はほぼ水平であったが、これは近代以後の削平によるものと思われる。これを考慮すると、1-鳥居は単一の鳥居ではなく、機能時にはその内側にさらに凹地部が形成されていた可能性もある。つまり、1-鳥居は鳥居の集合体だったとも考えられ、その平面規模をそのまま機能時のものと考えることは必ずしも妥当ではない。

また、上面が削平されている上に、鳥居を覆うのは現代盛土であり、その埋没時期を性格に推定することは難しい。1-1層に包含されていた近世遺物はすべて細片であり、詳細な耕作時期を決めることも難しい。あえて、機能時期を類推すれば、近世の後半と想定する以上の分析は不可能であった。

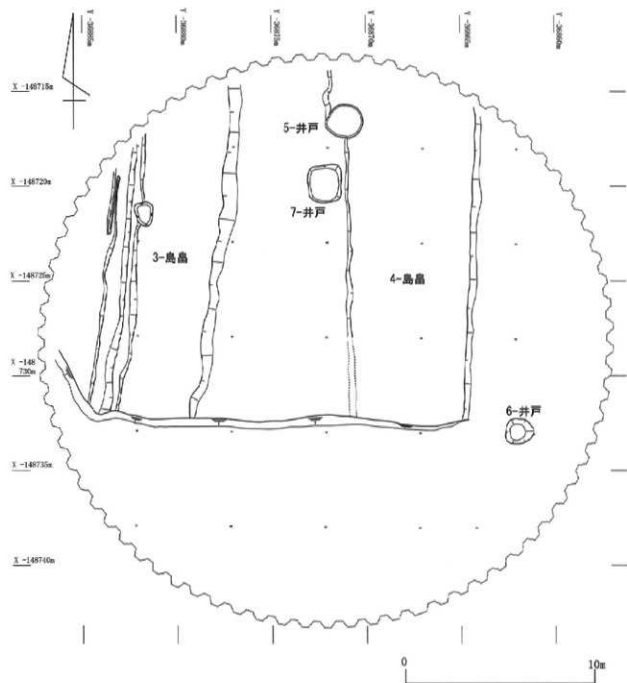


図 5.02 第 1b 遺構面平面図 (S=1/200)

## 2. 第1b遺構面（近世）

当遺構面は1-2層上面に相当する。調査区南部1/3程度の範囲は、近～現代の削平により遺構面は消失している。中央から北部で検出された遺構は、鳥島と考えられる平面長方形の南北方向の高まりが二条（3-鳥島・4-鳥島）と井戸3基（5-井戸・6-井戸・7-井戸）である。鳥島の耕作土（1-2層）や各井戸の埋土からはいずれも近世の土器片が少量ながら出土している。いずれも近世に形成・機能した遺構と考えられる。

3-鳥島は、上面幅が約4m、高さ約0.2mの規模であった。その西側斜面には二段の平坦面が形成されていた。これは、鳥島の西斜面が幾度も開鑿にあった痕跡と考えられる。幅約6m高さ約20cm規模の4-鳥島には、そのような痕跡はみとめられず、3-鳥島も当初は4-鳥島と同様な平面規模であったが開鑿によってその平面幅が減じたものと考えられる。

いずれの鳥島上にも畝溝などは検出されなかった。中粒砂まじりシルトという耕土の質からみて、この高まり部が水田として機能したとは考えがたいが、連続的に耕作を受けた結果、鳥島上面の詳細な遺構については、検出不能な状況になったと思われる。また、当遺構面で検出された2つの鳥島が同時に機能していたか否かの確認が難しい。2つの鳥島の方向軸は並行でなく僅かにずれている、同時に機能していたのではなく、時期を違えて耕作されていた可能性も考慮する必要がある。

三基の井戸はいずれも4-鳥島の端もしくは周囲で検出されている。いずれも平面幅（径）が1.6m程度と類似した規模だが、平面形態は不整形のもの（5-井戸・6-井戸）と隅丸方形のもの（7-井戸）の二種類がある。鳥島の周囲に形成されていることから、農業用井戸として作られたものと思われる。

## 3. 第2遺構面

当遺構面は、古代土器包含層である2層の下面、古墳時代前～中期に形成された3層上面に相当する。近世の鳥島開鑿により中央と東西両端が南北方向に削平されていて、遺構面が消失している。鳥状に残った部分に多数の柱穴群や土坑・井戸などが検出されている。その大半が、古代遺構と考えられるが、井戸二基（121-井戸・124井戸）だけは、中世遺構と考えられる。おそらく2層より上層から掘削されたものが、当遺構面で検出されたと推定できる。その他にも、当遺構面では耕作溝などが検出されたがこれも中世以後の所産と考えられる。遺構図からは割愛した。

柱穴は多数検出されたが、明確に建物としてのまとまりを確認できたのは掘立柱建物1・2・3だけであった。いずれも南北方向を長軸とする竪柱建物である。掘立柱建物3の南側にも、柱穴の密集域があり建物の存在が想定されるが、検出遺構の配置では、まとまりは明確ではなかった。何度か建替えが行われた結果、明確な配置が確認できない状況になったと考えられる。むしろ、はっきりとしたプランは確認できないものの、継続的に建物が形成された地点とも想像できる。

もちろん、中央・東・西側の削平部にも連続的に柱穴群が形成されていたと考えられ、掘削深度の深い柱穴が少数、削平部にも検出されている。本来なら調査区全面に建物群が展開していたと想定できよう。

建物以外の遺構では、奈良時代後半～平安時代前半の井戸が2基（52-井戸・12-井戸）が確認されたほか、土師器甕に蓋をして埋納した遺構（63-埋納遺構）が検出され中から皇朝銭5枚が出土した。

これらの検出遺構・遺物のあり方は、奈良時代後半～平安時代初めに当調査区域が集落もしくはなんらかの施設群として機能していたことを示している。さらに、74-土坑などからは飛鳥・藤原京期の土器が出土している。7世紀にも少数ながら遺構形成が行われた可能性を示唆している。

これら主要遺構の詳細な検出状況や推定される時期などは、以下の通りである。また、詳細な説明文・図を示さない遺構の内容については、表5.1に概略を示した。機能時期の推定は、埋土質・出土土器を基に行った。

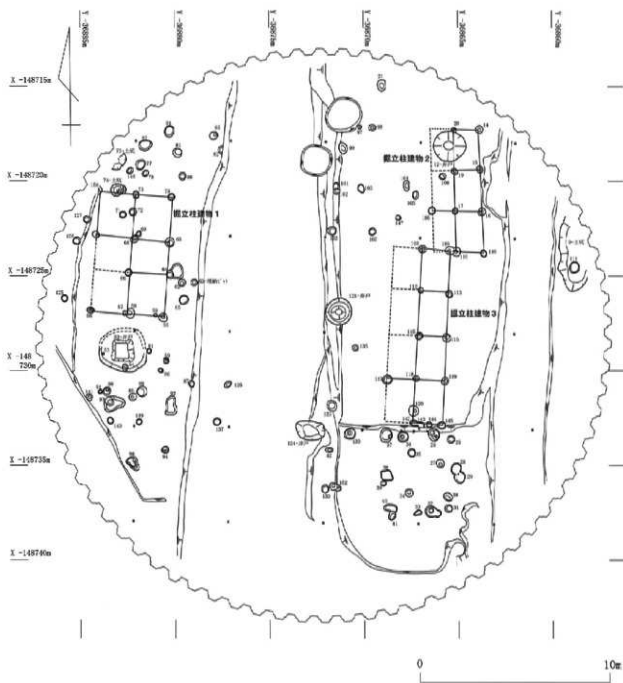


図 5.03 第2遺構面平面図 (S=1/200)

表5.01 第2遺構面検出遺構

遺構番号	遺跡種類	地区	縦長(尺)	横長(cm)	高さ(cm)	層土	時期	備考
9	土坑	30-F11	140		25	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
12	土井	30-F19 30-F20	160	175	44	2・01/4褐色黄色粗砂まじりシルト	奈良時代前半	
14	柱穴	30-F19	42	40	25	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	奈良時代後半～平安時代初期	独立柱建物2の柱穴
15	柱穴	30-F19	33	40	24	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
16	柱穴	30-F19	40	40	40	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
17	柱穴	30-F19	30	35	18	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	奈良時代後半～平安時代初期	独立柱建物2の柱穴
18	柱穴	30-F19	30	35	2	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
19	柱穴	30-F19	30	40	18	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	奈良時代後半～平安時代初期	独立柱建物2の柱穴
20	柱穴	30-F19	30	30	11	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	奈良時代後半～平安時代初期	独立柱建物2の柱穴
21	柱穴	30-F19	60	65	13	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト(黄まじ)	古代(奈良後半～平安前期)	
22	柱穴	30-F19	45	60	7	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
23	柱穴	30-F19	60	60	3	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
25	柱穴	30-F19	60	60	36	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
26	柱穴	30-F11 30-F11C	60	70	28	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
27	柱穴	30-F19	40	45	37	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
28	柱穴	30-F19	50	50	4	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
29	柱穴	30-F19	60	50	15	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
30	柱穴	30-F19	40	50	34	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
31	柱穴	30-F19	40	40	41	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
32	柱穴	30-F19	60	60	12	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
33	柱穴	30-F19	29	45	7	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
34	柱穴	30-F19	29	29	5	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
35	柱穴	30-F19	40	45	7	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
36	柱穴	30-F19	55	55	31	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
37	柱穴	30-F19	60	75	38	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
38	柱穴	30-F19	55	60	6	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
39	柱穴	30-F19	20	20	11	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
40	柱穴	30-F19	40	70	20	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
41	柱穴	30-F19	25	60	24	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
50	柱穴	3-F16	20	20	16	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
51	柱穴	3-F16	25	25	10	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
52	土井	3-F10	110		81		奈良時代前半～平安時代初期	
53	柱穴	3-F10	15	15	6	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
54	柱穴	3-F10	35	40	27	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
56	柱穴	30-F10	20	40	22	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	独立柱建物1の柱穴
57	柱穴	30-F10	25	30	22	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	独立柱建物1の柱穴
58	柱穴	30-F10	50	50	41	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	独立柱建物1の柱穴
59	柱穴	30-F10	20	25	5	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
60	柱穴	30-F10	45	50	38	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	独立柱建物1の柱穴
61	柱穴	30-F10	50	55	8	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
62	柱穴	30-F10	40	40	25	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
63	遺跡不明	30-F15	33	35	3	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	5枚の銅貨遺跡
64	柱穴	30-F15	60	70	11	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	独立柱建物1の柱穴
65	柱穴	30-F15	40	50	25	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	独立柱建物1の柱穴
66	柱穴	30-F10	42	40	8	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	独立柱建物1の柱穴
68	柱穴	30-F10 30-F15	40	45	41	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	独立柱建物1の柱穴
69	柱穴	30-F15	33	35	8	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
79	柱穴	30-F15 30-F10	40	40	37	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	独立柱建物1の柱穴
71	柱穴	30-F10	25	35	16	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
72	柱穴	30-F10	40	40	21	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	奈良・藤原初期	
73	柱穴	30-F10 30-F10	35	40	13	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	独立柱建物1の柱穴
74	土坑	30-F10	65	70	39	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	奈良・藤原初期	
75	溝	30-F10 30-F10 30-F10	1.0	980	26	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
76	土坑	30-F10	40	105	35	埋骨灰白色土	古代(奈良後半～平安前期)	
77	柱穴	30-F10	30	60	8	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
79	柱穴	30-F15	30	40	14	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
79	柱穴	30-F15	40	40	13	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	独立柱建物1の柱穴
80	柱穴	30-F15	40	40	11	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
81	柱穴	30-F15	65	50	16	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
83	柱穴	30-F15	50	70	13	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
84	柱穴	30-F15	60	60	20	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
85	柱穴	30-F15	40	45	23	03/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	

遺構番号	遺構種類	地区	掘削長(幅)(cm)	長径(cm)	深さ(cm)	出土	時期	備考
86	柱穴	6-45	25	30	7	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
87	柱穴	6-46	25	35	15	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
88	柱穴	6-48	55	55	46	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
89	柱穴	6-45 6-410	40	40	20	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
90	柱穴	6-410	40	50	20	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
91	柱穴	6-410	25	25	13	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
92	柱穴	6-46	80	105	31	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
93	柱穴	6-410	75	115	45	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
94	柱穴	55-45	25	40	26	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
95	柱穴	55-45	40	60	20	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
96	柱穴	54-45	20	40	20	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
97	柱穴	N13-E8	20	25	23	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
98	柱穴	N13-E8	40	45	27	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
99	柱穴	N13-E8	45	60	24	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
100	柱穴	N13-E10	40	50	6	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
101	柱穴	N13-E8	20	40	19	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
102	柱穴	N13-E8	25	35	14	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
103	柱穴	N13-E8	25	50	5	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	奈良時代前半～平安時代初期	
104	柱穴	N13-E8	45	95	18	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	奈良時代前半～平安前期	
105	柱穴	N13-E8	45	80	7	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
106	柱穴	N13-E10	25	30	5	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	奈良時代後半～平安時代初期	竪立柱建物2の柱穴
107	柱穴	N13-E8	25	80	9	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
108	柱穴	N5-E10	40	80	23	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	竪立柱建物3の柱穴
109	柱穴	N5-E10	45	45	31	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	竪立柱建物3の柱穴
110	柱穴	N5-E10	30	50	17	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	奈良時代後半～平安時代初期	竪立柱建物2の柱穴
111	柱穴	N5-E10	36	80	9	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
112	柱穴	N5-E10	36	30	21	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	竪立柱建物3の柱穴
113	柱穴	N5-E10	40	40	24	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	竪立柱建物3の柱穴
114	柱穴	N5-E8 M-E10	45	45	20	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
115	柱穴	6-45 6-410	40	40	11	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	竪立柱建物3の柱穴
116	柱穴	6-410	45	50	22	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	竪立柱建物3の柱穴
117	柱穴	6-45	36	50	11	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	竪立柱建物3の柱穴
118	柱穴	6-45	30	30	25	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	竪立柱建物3の柱穴
119	柱穴	6-410	40	40	14	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	竪立柱建物3の柱穴
120	柱穴	6-45	55	60	42	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
121	井戸	N5-E8	140	140	77	52/1黒細砂混じりシルト	中世	
122	柱穴	N10-E5	20	50	45	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
123	柱穴	6-45	50	60	31	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
124	井戸	6-0 55-9	100	100	44	52/1黒細砂混じりシルト	中世	
125	柱穴	55-410	40	45	7	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
126	柱穴	N10-E10	40	40	12	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
127	柱穴	55-E5	60	60	40	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
128	柱穴	55-E5	40	60	40	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
129	柱穴	55-E5	35	45	29	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
130	柱穴	6-45	30	25	27	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
131	柱穴	6-9 6-45	30	45	9	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
132	柱穴	6-45	40	40	9	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
133	柱穴	6-45	30	35	6	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
134	柱穴	6-410	25	40	2	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
135	柱穴	6-410	25	25	18	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
136	柱穴	6-45	30	40	4	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	竪立柱建物3の柱穴
137	柱穴	6-45 6-410	30	40	0	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
138	柱穴	6-410	30	30	3	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	古代(奈良後半～平安前期)	
139	柱穴	6-410	30	45	10	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	竪立柱建物3の柱穴
140	柱穴	N5-E10	25	40	12	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	奈良時代前半～平安時代初期	竪立柱建物2の柱穴
141	柱穴	N10-E10	45	45	46	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	縄文・弥生前期	
142	柱穴	N10-E5	40	40	12	52/1オリーブ黒中粗砂まじりシルト	平安時代前半?	竪立柱建物1の柱穴

## 【121-井戸】(図5.04)

調査区の中央部で検出された遺構である。検出面では、直径約140cmの不整円形を呈していた。断面形状をみると、深さ60cm程度の部位に平坦面が形成され、中央部だけ径40cm程度の円形にさらに深く掘り下げられていた。その中央部には曲物の井戸側が、凹み部の側面に密着した状態で検出された。土層断面を観察すると、曲物の直上に粘性の強い黒色粘土が堆積しており、その周囲にシルト質の埋土が確認された。前者が井筒内の埋土、後者が井筒外側の掘り方充填土と考えられる。この井筒内埋土は、調査時における遺構掘削の際の所見で曲物の直上に円筒状に堆積していたことがわかった。このため、井戸側は機能停止後に抜き取られたのではなく、井戸側が上部まで残存した状態で井筒内部が埋積したと推定される。つまり、最下段の曲物だけが腐蝕を免れて残存したと推定できる。上部に展開していた井戸側も円筒状の形状から、同様な曲げ物であった可能性が高い。

当遺構内からは、土師器類を中心に約60片ほどの土器片が出土した。いずれも細片で時期の特定が困難なもののばかりであったが、中には、2層包含土器の主体である奈良時代後半～平安時代前半期とも考えられる土師器片も含まれていた。ただし、極めて類似した遺構形態を示す124-井戸が12世紀の所産と考えられることから、古代末～中世に当遺構が形成された可能性が高い。

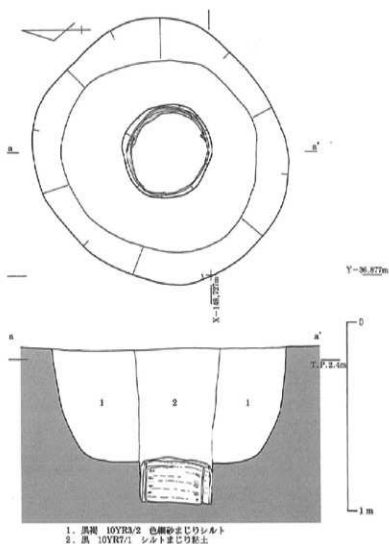


図5.04 121-井戸平・断面図 (S=1/80)

【124-井戸】(図5.05)

調査区の中央南寄りで見出された。検出面の形状は、長軸約140cm、短軸約110cm規模の不整形円形であった。断面形態は、深さ約40cm程度の部分に平坦面をもち、中央部で平面径約50cmの範囲が凹んで、そこに曲物が据えられていた。曲物は、井戸側として埋置されたと考えられる。上層には、人頭大の礫が4～5点出土しており、当遺構の最終埋没時に投棄されたものと考えられる。121-井戸とは異なり、井筒部分をそのまま反映した土層堆積構造は確認できず、曲物の上部には、やや中央が凹んだ形状に水平堆積層が確認できるだけであった。これは、井筒部分を構成していた井戸側が撤去された跡に、当遺構が埋まったことを示している。しかも、上層に礫が複数投棄されていることから、採集段階では人為的に埋められた可能性が高い。

中層・上層からは約70片ほどの土器片が出土している。中には奈良時代～平安時代の土師器・須恵器片も多く含まれていた。しかし、最下層の曲物の内側からは、瓦器椀(5.05-1)が出土している。内外面とも密な暗文状のヘラミガキ調整で仕上げられていて、12世紀の所産と推定される。このことから、当遺構の機能時期は12世紀と考えられる。出土したその他の古代土器に関しては、井戸設営時の掘り方埋土中土器が混入したか、周囲の古代土器包含層(2層)の土を用いて井戸を埋めたために多量に混入したと推定される。また、最上層の人頭大の礫に関しても、2層中に含まれていた古代の遺物の可能性が高い。実際に、当遺構面検出の古代柱穴のいくつかからは全く同じ大きさの礫が礎石として機能した状態で出土している。古代の礎石が開鑿によって掘り起こされ、井戸廃絶時に投棄されたとも考えられよう。

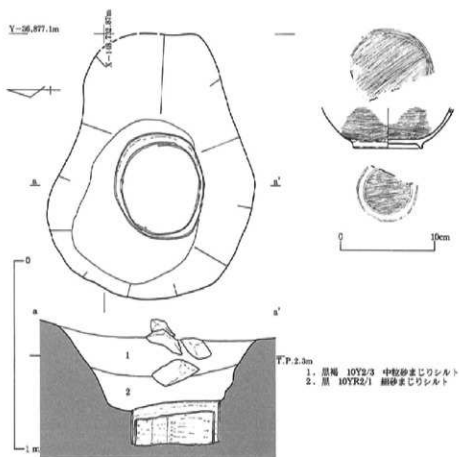


図5.05 124-井戸平・断面図(S=1/80)・出土土器(S=1/4)

## 【掘立柱建物1】(図5.06・5.07)

調査区の北西部で検出された、推定2×3間規模の掘立柱建物である。56・57・58・60・64・66・65・68・70・73・79・150-柱穴により構成される。70-柱穴と56-柱穴の間の柱穴が検出できなかったが、これは柱穴深度が浅かったためと考えられる。実際南から二列目の短軸方向の柱列はすべて浅い柱穴である。棟持の柱列が残存していることから総柱建物と想定され、床構造を持っていた可能性がある。また、58-柱穴と57-柱穴は近接・重複しているが、柱の建替えにより二つの柱穴は重複する結果となったか、57-柱穴が58-柱穴の補助的役割を果たす部材の痕跡だった可能性もある。

建物の平面規模は、長軸方向が約650cm、短軸方向が約400cmであった。長軸方向の柱間が150～220cmとばらつきが大きく、短軸方向の柱間隔は200cm前後ではほぼ一定している。柱穴深度は40cm以下と全体に浅いが、検出面は土壌層である2層完全に取った面であり、実際の建物機能時の生活面よりは検出面より20cm程度上位にあったと推定できる。実際の柱穴深度は60センチ程度あったと考えるのが妥当であろう。

また、各柱穴からは、古代の土師器・須恵器片が多数出土しているが細片が多かった。65-柱穴と64-柱穴から、それぞれ固化する土器が出土した。

図5.07-1は65-柱穴出土の須恵器杯身で、外底面がヘラケズリで仕上げられている。高台はみられず、口縁部が開き気味の形態をとることから、9世紀後半の所産と考えられる。また、図5.07-2は土師質の土釜である。口縁部が外反することから、8世紀後半～9世紀前半の所産と推定できる。この2点の土器から想定すると、当掘立柱建物は9世紀、平安時代前半期を中心とした時期に機能したと考えるのが妥当であろう。

## 【掘立柱建物2】(図5.08・5.09)

調査区の北東部で検出された、2×3間規模と推定される掘立柱建物である。20・14・19・15・10・6・17・16・110・146-柱穴により構成される。西側の柱列では柱穴1基しか検出できなかった。遺構図には示さなかったものの、実際には第2遺構面では、当建物と重複して2層を擁する耕作溝が形成されていた。このため西側柱列は削平を受けて消失したと考えられる。棟持の柱列が残存していることから総柱建物と想定され、床構造があった可能性がある。

建物の平面規模は、長軸が約650cm、短軸が約280cmであった。柱間隔は、長軸方向が220cm前後、短軸方向が約140cmと規則正しく配列されている。柱穴深度は40cm以下と全体に浅いが、検

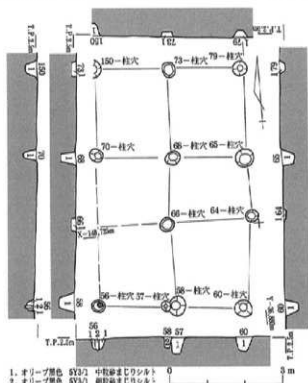


図5.06 掘立柱建物1 平・断面図 (S=1/80)

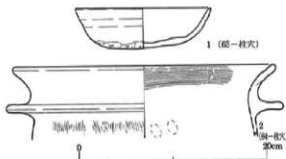


図5.07 掘立柱建物1 柱穴出土土器 (S=1/4)



出面は土壌層である2層を完全に取り去った面であり、実際の建物機能時の生活面は検出面より20cm程度上位にあったと推定できる。実際の柱穴深度は60cm程度あったと考えるのが妥当であろう。

なお、20-柱穴は12-土坑の埋土を掘りこんで形成されている。後述するように、当建物が12-井戸廃絶後に形成されたことを示している。図5.09に示すように、16-柱穴からは内面にのみ暗文を施す土師器皿(5.09-2)、110-柱穴からは口縁部が明確に屈曲して外反して胴部外面にユビオサエ痕の発達した土師器甕(5.09-3)が出土している。いずれも、奈良時代後半～平安時代初頭(8世紀後半)の特徴を示す土器であり、12-土坑からは奈良時代前半の土器が出土していることと矛盾しない。当建物は12-井戸の廃絶直後に建設された可能性がある。

さらに、110-柱穴は後述する掘立柱建物3を構成する109-柱穴に削平されている。このため、当建物は掘立柱建物3に先行して機能していたと考えられる。

### 【掘立柱建物3】(図5.10)

調査区東半部中央付近で検出された2×4間規模と推定される立柱建物である。108・109・112・113・115・116・117・118・119・142・145-柱穴により構成される。西側の柱列では柱穴一基しか検出できな

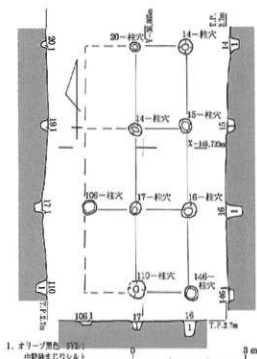


図 5.08 掘立柱建物 2 平・断面図 (S=1/80)

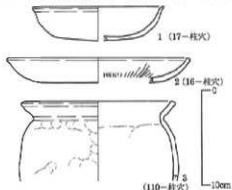


図 5.09 掘立柱建物 2 柱穴出土土器 (S=1/4)

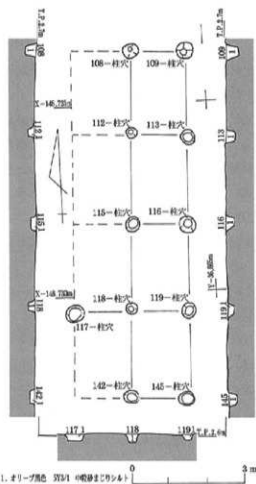


図 5.10 掘立柱建物 3 平・断面図 (S=1/80)

かった。遺構図には示さなかったものの、実際には第2遺構面では、当建物と重複して2層を攪拌する耕作溝が形成されていた。このため西側柱列は削平を受けて消失したと考えられる。棟持の柱列が残存していることから竪柱建物と想定され、床構造があった可能性がある。

平面規模は、長軸が約930cm、短軸が約300cmであった。柱間隔は、長軸方向が220～240cm前後、短軸方向が約150cmと規則正しく配列されている。柱穴深度は40cm以下と全体に浅いが、検出面は土壌層である2層を完全に取った面であり、実際の建物機能時の生活面は検出面より20cm程度上位にあったと推定できる。実際の柱穴深度は60cm程度あったと考えるのが妥当であろう。

当建物の柱穴群からは、古代の所産と考えられる土師器・須恵器類が出土するものの、いずれも細片で図化や時期の特定は難しい。ただ、先述のように、当建物を構成する109-柱穴は、掘立柱建物2を構成する110-柱穴を削平している。当建物は掘立柱建物2に後出すると考えられる。掘立柱建物2の機能時期が奈良時代後半～平安時代初頭と推定されることから、当建物は奈良時代末～平安時代前半に機能していた可能性が高い。

#### 【52-井戸】(図5.11～18・写真5.1・5.2・5.3)

調査区の西半部中央付近で検出された、平面規模が径280cm程度の不整形を呈する井戸である。中央やや西よりには板を方形に組んだ一辺約80cm程度の井戸側が検出された。井戸側は、板材を蒸籠籠に重ねて作られていた。いずれの辺でも4段につき重ねられている状況で検出されたが、最上段は板の劣化が著しく、良好残存なのは下から3段までの部材(図5.14～17)だけであった。本来は更に上段に板組みが設置されていた可能性が高いが、上部の板材は井戸廃絶時に抜き取られたとも考えられる。

注目されるのは、各板材には長端辺の中央付近に3cm×1cm程度の方形孔を穿ち、その部分に小さな接木を詰め込んで組み合わせて上下の板を接合している点である。接木による上下板の結合は、四辺すべての板組みに対して施されている。また、この井戸側の最下段の四周には幅10～15cm、厚さ約1cmの小型の板材が縦に貼りつくように出土した。そのうち1点については、最下段の井戸側板に下に潜り込んで屈曲している状態であった。このことから、これらの小縦板は先行して井筒部の最下段の側面に立てかけられ、その内部に方形の蒸籠籠板組みを滑り込ませて井戸側を設置したことがわかる。井戸側板材・裏込め板はいずれもスギを用いて作られていた。

当遺構の上層断面を見ると、掘り方部には基盤層である3層を構成する中粒砂～シルトを基調とする土壌が充填され、井戸側に接する部分にのみより粒度の小さい粘土質土壌(図5.11のf, f'層)が堆積していることがわかる。掘削時に掘り返した基盤層の土で掘り方を粗く掘め、井戸側を設置した後に別の土壌を裏込めに充填したと考えられる。

井筒内の堆積土は、残存していた井戸側板の上端部付近にU字状に堆積した硬い有機質層(図5.11の6～7層)の上下で大きく異なっている。これより上位は粗粒砂～細粒砂を多く含む土壌が堆積し、出土する土器は細片がほとんどである。これらの堆積層を当遺構の上層と呼ぶ。上層からは、6層(図5.11)上面でのみ層面に貼りついた状態で須恵器杯や土師器碗・杯が検出された(写真5.1・図5.12-1～5)。中層を形成する6・7層(図5.11)は、カルシウム質の小粒を多く含む褐色がかかった有機物層で図5.12-6～8に掲載した土器が出土した。それより下位にはオリブ黒色の粘土土壌である10層(図5.11)が厚さ40cmにわたって堆積している。10層(図5.11)の上部からは、完形土器が僅かに出土し、図5.12-9～11に図示した。これを下層出土土器とする。さらに10層の下部～底面にかけては多数の完形土器(図5.12-12～22)をはじめ鉄製鋤先・ガラス玉・斎串(図5.13-1～4)が出土した。

井戸側内出土遺物：当遺構から出土した土器類のうち図化可能なものは、図5.12に掲載した。

須恵器では杯（図5.12-1・2・3・6・7・12）や壺（図5.12-13・14・15）が出土している。須恵器杯では高台のつく杯Bといわれるもの（図5.12-6・7・12）と、高台の無い杯Aと呼ばれるもの（図5.12-2・3）がある。図5.12-12の外底面にはハート形の記号が墨書されていた。どの須恵器杯も、側面形態は直線的に斜め外方に立ちあがる類似した形態である。また、杯Bの高台は、いずれも個体でも底面の外縁部に低いものが取り付く形態で類似している。上・中・下・最下層出土品を分けて図示したが、型式上の差異はほとんど見受けられない。壺類では口縁部の外反する壺Hの小型品が1点出土している。頸部長に比して胴部が扁平な形状である。底面に焼成後穿孔が行われている。口縁部が欠損しているのは、同様に意図的な打ち欠かれたためかもしれない。いずれにしても祭祀行為との関連がうかがわれる。図5.12-14は壺Gの小型品の底部片である。図5.12-15は壺Lと呼ばれる形式の小型品であるが、頸部以上が欠損している。これら須恵器壺類はいずれも最下層から出土している。

土師器では、椀が1点（図5.12-5）と、杯が4点（図5.12-9・10・18・19）、皿が3点（図5.12-4・20・21・22）、煮沸具が4点（図5.12-8・11・16・17）出土している。杯はいずれも下層・最下層から出土している。このうち、図5.12-9の外底面には円に短い線を2条付加した記号が墨書されている。皿は上層から破片が1点（図5.12-4）出土した他は、3点（図5.12-20・21・22）がほぼ完形の状態で出土している。これら椀・杯・皿は、図5.12-22の一点を除いていずれも暗文をもたず、内外面ともナデ調整で仕上げられている。煮沸具では、中層から大型甕、下層から羽釜がそれぞれ破片の状態ですべて出土している。最下層からは外面にユビオサエ痕をもつ小型甕（図5.12-16）が破片で出土しているが、もう1点の外面ハケ仕上げの球形甕（図5.12-17）は、口縁部が全面欠失しているものの体部は完形である。口縁部は意図的に打ち欠かれた可能性が高い。

須恵器杯が直線的に側面が立ち上がる形態で、高台はいずれも外底面の外縁につくこと、須恵器壺Hの胴部が扁平なこと、土師器椀・杯・皿の立ち上がり部の傾斜が顕著でなくその大半に暗文が見られないことから、これらはいわゆる平城宮VI期／平安京I期中段階に層属する土器群と言えよう。また、同一形式・器種が複数あるものについては形態・手法にばらつきが見られないことは、当遺構廃棄土器群に大きな時期差がないことを示している。井戸下層・最下層への遺物廃棄奈良時代末～平安時代初頭のいわゆる長岡京期に行われ、直後の井戸廃絶にともなって間を置かずさらに土器群が廃棄されたと考えられる。

また、最下層からは土器以外の遺物も出土した。井戸側南辺に立てかけるように鉄製の鑄先（図5.13-1）が出土している。一部が欠損・折損しているものの廃棄時は完形状態だったと考えられる。幅約24cm、長さ約29cm、厚さ約0.4cmの大きさである。全体に薄く錆が付着しているものの、遺存状態は良好である。それ以外にも斎串が2点（図5.13-2・3）が出土している。幅約1.0cm、長さ約15.9cm、厚さ0.3cmで上下端が山形に加工されている。いずれもヒノキを用いて作られている。さらに最下層土壌を洗浄したところ、直径0.7センチ、厚さ約0.4cmのガラス玉1点（図5.13-4）も出土した。これらの遺物は、通常の井戸機能とは直接関係ないもののため、何らかの祭祀行為にともなって機能時の井戸に投棄されたものと思われる。前述の土器にみられる焼成後穿孔や口縁部の打ち欠き、記号の墨書なども一連の祭祀行為の帰結として土器群が廃棄されたことを示している。井戸機能時の行為と考えられるため、水にまつわる祭祀の可能性が考えられる。

井戸側板材：井戸側板は南辺で4段その他は3段残存していたが、上部二段はいずれも劣化が進行して

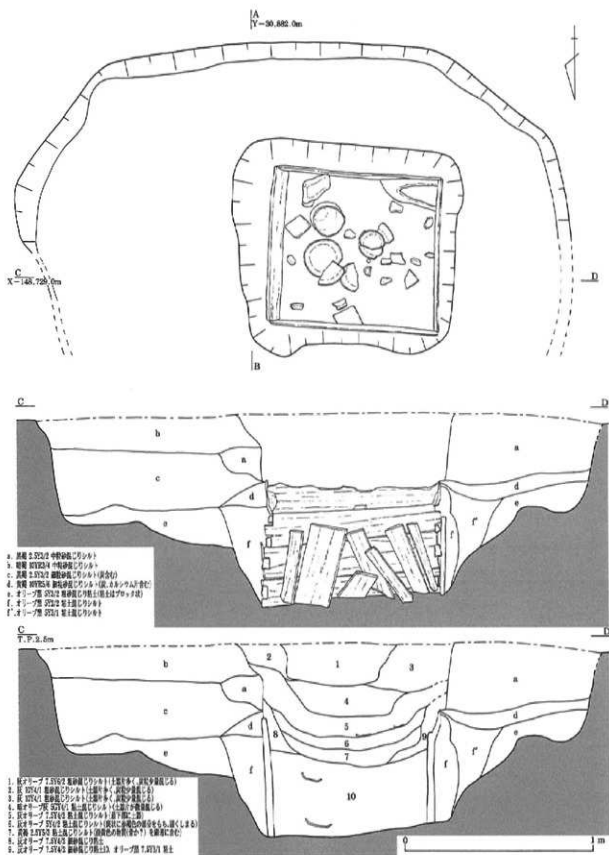


図 5.11 52-井戸平・断面図 (S=1/20)

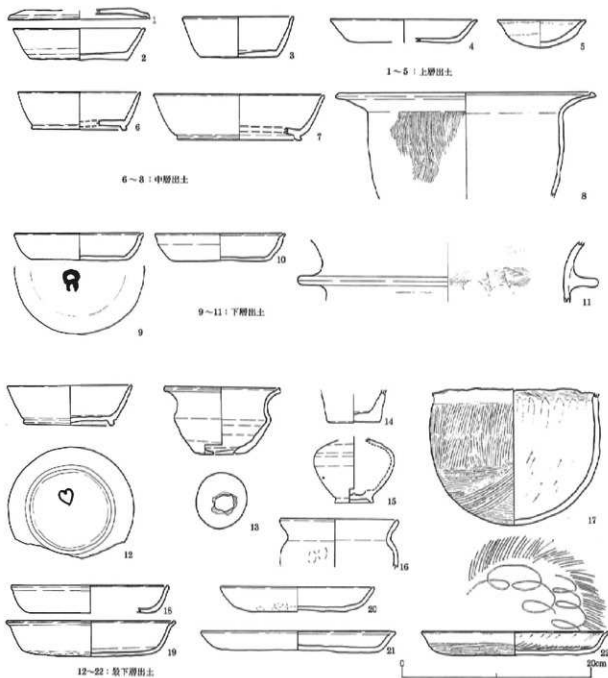


图 5.12 52-井戸出土土器



写真 5.01 52-井戸上層遺物出土状況



写真 5.02 52-井戸最下層遺物出土状況

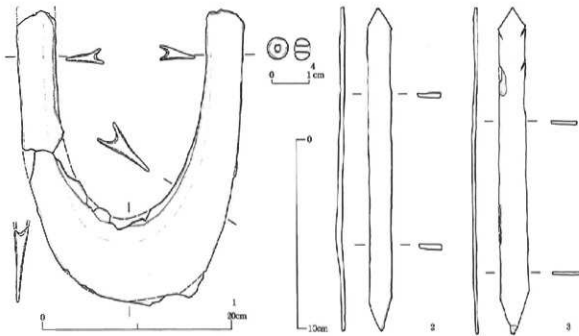


図5.13 52-井戸最下層出土鉄製品・木製品・ガラス玉

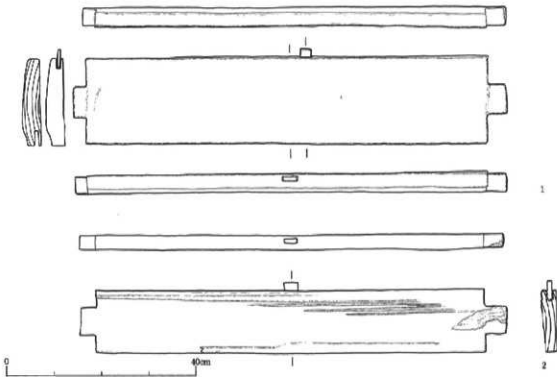


図5.14 52-井戸西側板

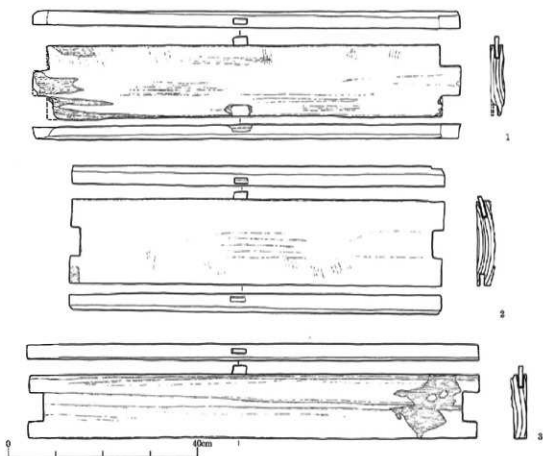


图 5.15 52-井戸北側板

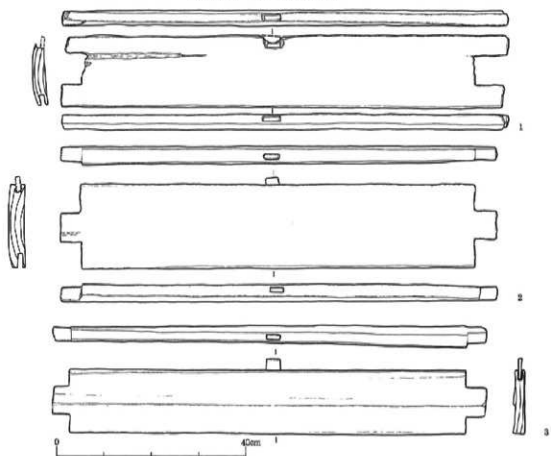


图 5.16 52-井戸東側板

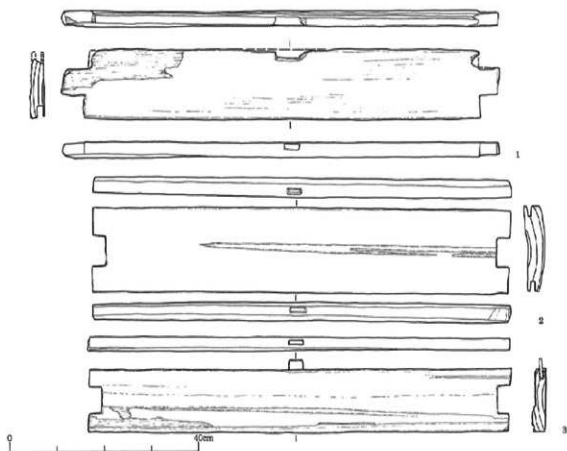


図 5.17 52-井戸南側板

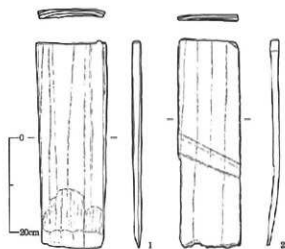


図 5.18 52-井戸井戸枠裏込め板



写真 5.03 52-井戸半載状況

いた。図5.14～17にはその板材を掲載した。いずれも、両端を凸状あるいは凹状に加工した幅20cm・厚さ4cm程度の板材である。先述のように測辺中央部に方形孔を穿ち、上下の板を組み合わせるための接木が差込んであった。各図版には西・北・東・南の方向毎に側板を掲載し、上中下段と実際の出土位置どおりに掲載した。どの側辺でも下から三段目の板材が、下二段のものと同端部の凹凸の加工が逆になっていることがわかる。最下段とその直上とは異なる方法で三段目以上には、板が組まれていたと分かる。裏込め板も含めて井戸側を構成するいずれの板材もスギを用いて作られていた。木取りは、いずれも板目材を用いていた。



【74-土坑】(図5.19・20)

調査区の北西部、掘立柱建物1の北端で検出された土坑。平面規模は、長軸約70cm、短軸約60cmの不整形円形を呈する。深さは約30cmである。土坑の埋土はオリブ黒色粗粒砂まじりシルトで、周囲の柱穴群と同質であった。ただし、平面規模が大きく、中央部に柱痕跡と考えられる土層が確認できないことから、柱穴とは考えられず、土坑と考えたい。機能としては、土器などの生活残滓の廃棄が想定され、実際に約50片ほどの土師器・須恵器片が出土している。そのうち図化可能な個体は5点(図5.20-1~5)であった。

図5.20-1は須恵器杯蓋で、口径約10cmと小型品である。頂部の狭い範囲だけに回転ヘラケズリ痕跡が看取された他は、内外面とも回転ナデ調整で仕上げられている。法量・形態・技法から、7世紀前半の所産と考えられる。図5.20-2は、須恵器横瓶の破片と考えられる。外面には回転ヘラケズリ・カキメなどがうかがわれるが最終的にはユビナデによって、カキメが消されている。注目されるのは縦方向の3条。横方向2条の線刻が見られることである。図5.20-3は土師器高杯脚部であるが、裾径が約6cmと極めて小型で、脚外面には縦方向のナデ痕跡が顕著である。手づくね土器と考えられ、実用品とは考えがたい。図5.20-4は、土師器瓶の裾部と考えられる。外面はハケ調整、内面はハケ後ヘラケズリ調整で仕上げられている。裾部はヨコナデ調整で仕上げられている。瓶裾にしては、直立する形態でありやや不自然であることから、移動式甕の裾部の可能性もある。図5.20-5は土師器皿である。器面荒れが顕著なため器面調整は不明である。口縁部は外側に僅かに開く形態である。

このように、図5.20-1以外は明確な型式上の根拠は見つからないものの、すべての個体が7世紀の所

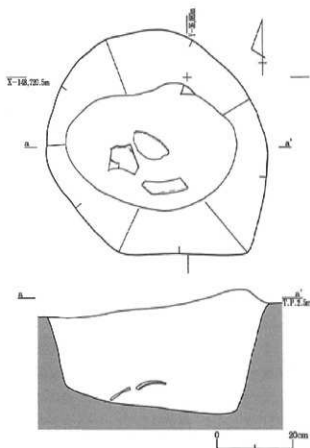


図5.19 74-土坑土器出土状況 (S=1/10)

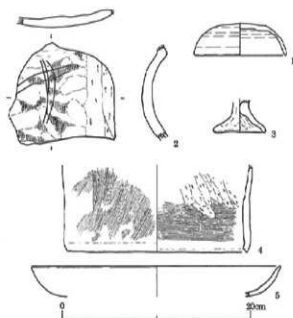


図5.20 74-土坑出土土器 (S=1/4)

産である可能性は否定できない。埋土の状況から、廃棄の状況に大きな時間差を想定することはできず、当遺構の埋没は短期間に進行したと考えられよう。このことから、当遺構は飛鳥・藤原京期に機能した可能性が高い。

#### 【63-埋納遺構】(図5.21)

調査区北西部、掘立柱建物1に東接して検出された遺構である。完形の土師器甕が土師器椀・杯によって二重に蓋がされた状態で検出され、周囲には浅い柱穴状の凹みが検出された。実際にはもっと高位の生活面から掘りこまれたと考えられるが、2層除去面で遺構検出を行ったため、甕より上位の遺構の状況を確認することができなかった。注目されるのは、この甕の内底面に五枚の銅銭が貼りついた状態で検出されたことである。

出土時には、甕の内部下半が粘質土により充填されていたため銅銭の存在には気付かず、出土状況図作成・写真撮影の後にそのまま取り上げた。持ち帰り、洗浄を行ったところ、甕内部の底に5枚の銅銭が貼り付いていることが判明した。銅銭は何れも劣化が著しく、器面からは取り外せない状態であった。そのため、銅銭が付着したまま土器のX線撮影を行い、保存処理を施すこととなった。

X線写真から、五枚の銅銭のうち二枚は表面の文字の一部が判読可能で、それぞれ発行年が延暦十五年(796)の「隆平永寶」と発行年が「貞観十二年」(870年)の「貞観永寶」とされる皇朝銭であることが判明した。

五枚の銅銭が検出された土器は土師器甕であるが、先述のようにその甕には、土師器杯・椀2枚によって蓋がなされていた。銅銭を埋納していた土器の特徴は以下の通りである。

図5.21-1の土師器甕は、口径13.5cm、高さ11.0cm。口縁部は、短く外反する形態で、ヨコナア調整で

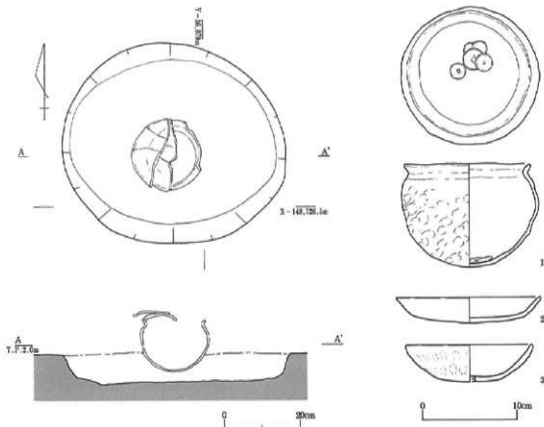


図5.21 63-埋納遺構平・断面図・出土土器

仕上げられている。胴～底部外面にはユビオサエ痕が多数みうけられる。近隣遺跡の類例としては、福永信雄の福年（福永1996）によって9世紀後半～10世紀初頭の基準資料とされた東大阪市西ノ辻遺跡溝1（(財)東大阪市文化財協会1991）出土土器群が挙げられる。また胴部内面には約4cm幅の帯状に漆状の有機物が薄く付着している。

図5.21-2の土師器杯は、口径15.2cm、高さ2.6cm。口縁部がヨコナデによって仕上げられている。平安京Ⅱ期古～中段階（古代の土器研究会編1992・1993・1994）の皿・杯などに類似資料がみられ、9世紀後半を中心とした層属年代が考えられる。

図5.21-3の土師器椀は、口径13.4cm、高さ3.9cm。口縁周辺はヨコナデを施し、他はユビオサエの跡がみうけられる。平安京Ⅱ期古～新段階（古代の土器研究会編1992・1993・1994）などに類似資料がみられ、9世紀後半～10世紀初頭を中心とした層属年代が考えられる。

共伴した出土銭貨で発行年が判明しているもののうち、最も新しいものが貞観十二年（870）発行とされる貞観水寶である。上述の埋納容器としての土器の型式学的年代と出土銭貨の年代は、ほぼ一致することとなる。

古代において土器に銭貨を埋納する行為については、陸衣壺（水野1984・1995）・地鎮具（森1979・1998）といった性格などを想定することができる。ここでは、いずれの可能性も考えることができ、どちらの目的をもって埋納されたかを特定することは難しい。

ただ、解釈の鍵を握るのは、近接して検出された掘立柱建物1との関係であろう。先述のように掘立柱建物1が機能していたのは平安時代前半期であったと考えられ、63-埋納遺構と同時に存在していた可能性は高い。両遺構が同時存在していれば、63-埋納遺構が掘立柱建物1の出入口付近に設置されたことも想定できる。ただし、解釈をめぐる決定的な要素とはならず、埋納銭研究の一層の進展がみられない限り本資料の解釈を限定することは難しい。

#### 【12-土坑】（図5.22・5.23）

調査区北東部で検出された土坑。平面が径約160cmの不整形形を呈し、深さ約45cm程度である。断面形態は底面が小さい形状であった。南側斜面からは数点の須恵器・土師器片が廃棄されていた。埋土は暗灰黄色粗粒砂まじりシルトで細別はできず、一度に人為的に埋められた可能性がある。

出土した土器のうち図化可能な7点（図5.23-1～7）は、すべて土師器である。図5.23-1・2は小型の土師器杯で、側辺がやや凹んで口縁部が小さく外反する形態である。いずれも外面に横走する暗文が施されている。図5.23-3・4は口径の大きな土師器杯である。いずれも外面下半部をヘラケズリ後に横走する暗文を施し、内面にも放射状の暗文を施している。

図5.23-6・7は長胴甕の胴上半～口縁部片であ

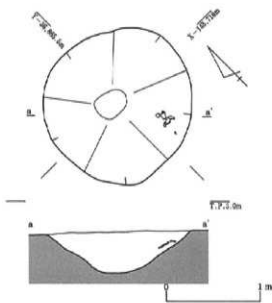


図5.22 12-井戸平・断面図

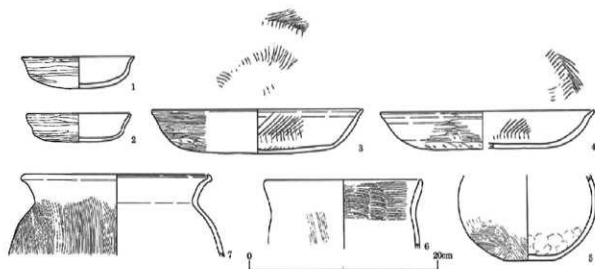


図5.23 12 - 井戸出土土器

図5.23-6は口縁部が僅かに外反するだけだが、図5.23-7は明瞭に屈曲して外反する口縁形態である。図5.23-5は、胴部が球形の小型甕である。内底面にユビオサエ痕、外底面にハケメがみられる。

これら土器器類のうち、甕類については奈良時代の所産であることしかわからないが、杯については平城宮Ⅱ～Ⅲ期（8世紀前半）の特徴がうかがえる。廃棄の同時性が高いとすれば、奈良時代前半期に当遺構が埋積したと考えるのが妥当であろう。

#### 【2面検出遺構出土土器】（図5.24）

図5.24には、その他の2面検出遺構から出土した土器のうち図化可能なものを掲載した。図5.24-1・2はともに103-柱穴から出土した土器器皿である。いずれも内外面はナデ調整で仕上げられていて、暗文は施されていない。奈良時代後半～平安時代初頭の所産と考えられる。図5.24-4は76-土坑から出土した須恵器杯身である。底面が平坦で、器高の低い形態である。奈良時代末～平安時代初頭の所産と考えられる。図5.24-3は11-溝出土の土器器高杯である。椀状の半球形の杯部形態で、内面には放射状の暗文が施されている。古墳時代後期末～飛鳥・藤原京期の所産と考えられる。図5.24-5は、148-柱穴から出土した細頸の須恵器壺類の胴部である。稜を持たない胴部には2条の沈線が2帯巡っている。欠損しているものの脚部が付帯していることが分かる。古墳時代後期末～飛鳥・藤原京期の所産と考えられる。

#### 【2層出土土器】（図5.25）

2層出土土器のうち、図化可能な個体を22点掲載した。

図5.25-1は須恵器杯蓋で、口径約10.5cmと小型品である。頂部の狭い範囲だけに回転ヘラケズリ痕跡が

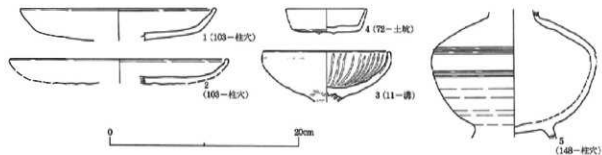


図5.24 2面検出遺構出土土器

看取された他は、内外面とも回転ナデ調整で仕上げられている。法量・形態・技法から、飛鳥Ⅰ～Ⅱ期の土器で、7世紀前半の所産と考えられる。図5.25-2は須恵器杯身で、口縁内面に小さな返り部がある。外底面の狭い範囲だけに回転ヘラケズリ痕跡が看取される他は、内外面とも回転ナデ調整で仕上げられている。口径約9.6cmと小型品である。法量・形態・技法から、飛鳥Ⅰ～Ⅱ期（7世紀前半）に帰属すると考えられる。図5.25-3は、須恵器甗である。頸～口縁部が欠損して全体形態は不明だが、丸底で頸部が細くしまる形態などからTK209型式～飛鳥Ⅰ～Ⅱ期（6世紀末～7世紀前半）に帰属すると考えられる。

図5.25-4は須恵器杯蓋で、口径約14cmである。かなり扁平ながらも宝珠形つまみ部を有し、なだらかに湾曲する全体形態で、口縁部の摘み上げも顕著ではない。法量・形態・技法から、平安京Ⅰ～Ⅳ期（8世紀前～中葉）に帰属すると考えられる。図5.25-5・6は須恵器杯身である。図5.25-5は、口径約13.2cm、器高約4.0cmで外底面の側縁部に低い高台がつく。図5.25-6は、口径約14.7cm・器高約4.3cmで、高台はない。いずれも底面が平坦で側面が直線的な形態である。法量・形態・技法から、平城宮Ⅵ期／平安京Ⅰ期中段階（8世紀末～9世紀初頭）に帰属すると考えられる。図5.25-7は、肩部に稜をもち口縁部が短く立ちあがるタイプの須恵器甗である。形態から、平城宮Ⅰ～Ⅲ期（8世紀前半）に帰属すると考えられる。図5.25-8・9は須恵器平瓶である。図5.25-8は胴部径約14.0cmで、底部に丸みのある形態である。飛鳥Ⅳ期～平城宮Ⅰ期（7世紀後半～8世紀初頭）に帰属すると考えられる。図5.25-9は、胴部径約19.6cmで平底形態である。形態から平城宮Ⅱ～Ⅳ期（8世紀前半）に帰属すると考えられる。

図5.25-10・11は、土師器杯である。図5.25-10は、口径約17.5cm、器高約3.2cmで、内面に放射状の暗文が施されている他は、ナデ調整で仕上げられている。口縁端部を僅かにつまみ出す形態である。法量・形態・技法から、平城宮Ⅲ～Ⅳ期（8世紀中葉）に帰属すると考えられる。図5.25-11は、口径約19.5cm、器高約3.3cmで、外底面がヘラケズリ調整で仕上げられているほかは、ナデ調整で仕上げられている。口縁は、外反して端部を僅かにつまみ出す形態である。法量・形態・技法から、平城宮Ⅴ期（8世紀後半）に帰属すると考えられる。

図5.25-12・13は、土師器皿である。図5.25-12は、口径約17.7cm、器高約2.9cmで、内外面ともナデ調整で仕上げられている。法量・形態・技法から、平安京Ⅰ期中段階（9世紀後半）に帰属すると考えられる。図5.25-13は、口径約9.5cm、器高約1.3cmで、内外面ともナデ調整で仕上げられている。口縁部は外反して端部を摘み上げる形態のいわゆる「ㄗ」字形を呈する。法量・形態・技法から、平安京Ⅲ期中段階（10世紀後半）に帰属すると考えられる。図5.25-14は、土師器椀である。口径約14.5cm、器高約4.4cmで、高台のつく形態である。体部は大きく開き、口縁部にヨコナデ、体部外面下半にユビオサエ痕が残る。法量・形態・技法から、平安京Ⅲ期中段階（10世紀後半）に帰属すると考えられる。

図5.25-15は、高杯の小型品でいわゆる手捏ね土器である。外面にユビオサエ痕が研著である。古代の所産であろうが詳細な帰属時期は不明である。図5.25-16・17の2点は、製塩土器と考えられる。2点とも碗形の器形で内外面に粘土帯接合痕が研著にうかがわれる。図5.25-16の外面には、墨書にも似た状況で外面の一部が黒色化している。紀淡地域の製塩土器で、8～9世紀の所産と考えられる。

図5.25-18は、土師器羽釜で、角閃石・長石・石英を多量に含むいわゆる生駒西麓産胎土で作られている。口縁部が弱く外反する形状であることから、8世紀の所産と考えられる。図5.25-19は、土師質の大型品の破片である。直立する形態と明確に面を形成する端部形状から、移動式甕の裾部と推定される。

外面はハケ調整、内面はヘラケズリ調整で仕上げられている。

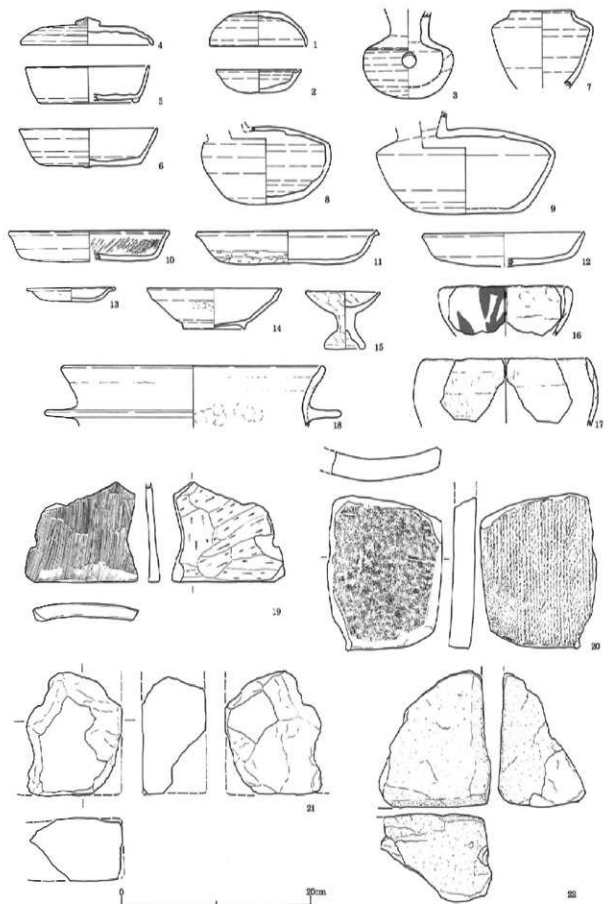


図 5.25 2層出土土器

図5.25-20は、平瓦片である。外面には縄圧痕、内面には布痕がみられる。詳細な時期は不詳だが古代の所産と考えられる。図5.25-21は、直方体の土製品の破片で埴と考えられる。全体の大きさは不明だが、厚さ約6.9cmである。破断面も含めて全体に赤化しているのは被熱したせいであろうか。図5.25-22は直方体の石製品で、石材は凝灰岩である。全体形態は不明だが、厚さ約9.3cmである。埴もしくは基段裝飾用の地覆石であった可能性が高い。

以上のように、2層出土品のうち土器類の主体は、8世紀～9世紀前半のものである。しかし、一部には7世紀の前半のものもある。これは、先述の遺構出土土器の傾向と一致している。当調査区は、飛鳥時代に一時的に集落域となったものの持続せず、奈良時代～平安時代前半にかけて建物群が形成されたものと考えられる。遺物量の多寡からみて、奈良時代後半～平安時代初頭が遺構形成のピークであった可能性が高い。出土遺物の中には、埴や地覆石など寺院施設に関係するものも出土しているが断片的である。また、包含層出土瓦片は10点程度と僅少で、検出された掘立柱建物群が瓦葺きであった可能性は低い。近隣に、官衙ないしは地域拠点となる施設群がありそこから断片的にもたらされた品々と考えたい。

## 第6章 古墳時代中期～弥生時代の遺構・遺物

## 1. 第3遺構面（古墳時代前～中期）

第4章に述べたとおり、第3遺構面は河川内堆積物層と考えられる3層を除去した面、すなわち4-1層上面に相当する。当遺構面では、調査区北半部を中心に無数の足跡痕跡が検出された。すべて人の足跡で、左右足跡が交互に列状に検出されているものもみられることから、歩行痕跡と考えられる。また、3層堆積物をもたらした水流によって4層が侵食された結果形成された凹みが、北東部に1箇所、南半部に東西方向に帯状に検出された。前者を152-河道、後者を151-河道と呼ぶ。151-河道内には3層形成

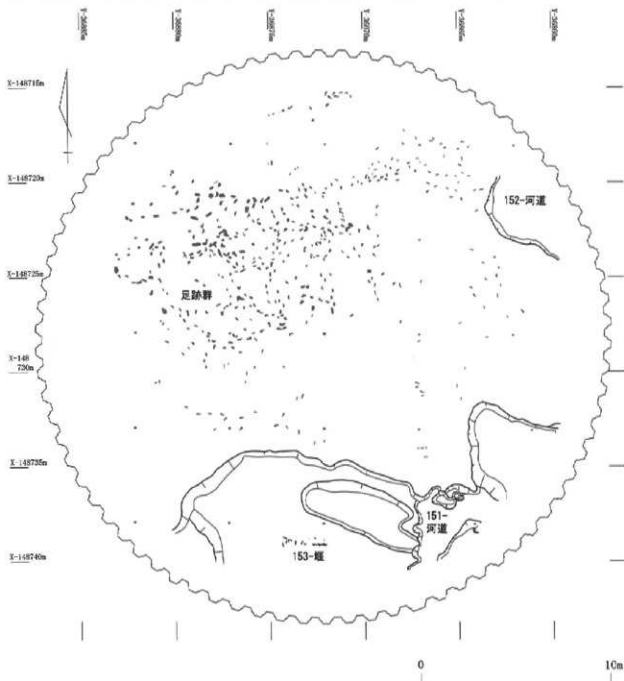


図6.01 第3遺構面平面図（S=1/200）



途中で形成された杭列が検出されており、堰として機能していたと想定される（153-堰）。

これら、4-1層上面で検出された遺構を覆う3層からは、後に示すように古墳時代前期を中心とする土器が出土している。僅少ながら出土している古墳時代中期土器は、すべて3層の上部から検出されたもので、3層形成の最末期は古墳時代中期にかかるものの、主体時期は古墳時代前期と考えられる。よって、第3遺構面で検出された足跡・河道・堰の形成時期は古墳時代前期とするのが妥当だろう。

【151-河道・152-河道】（図6.01）

調査区南半部を横走する151-河道は、最大深長が約140cm前後にもなり、下層の4層のみならず、5層や下層の弥生時代中期方形周溝墓墳丘の一部も侵食している。河道肩部の平面形態は不定形で、底面の凹凸は著しい。このことから、恒常的に流れていた河道の形状を示すというよりは、断続的に強まる流水により何度も4層が侵食をうけて形成されたものと考えられる。151-河道を充填する3層の地積構造を観察しても、流水方向は明確に確認できず、複雑に変化しているようにみえた。当調査区で検出された151-河道は、蛇行する河川の湾曲部外縁における水流攻撃面に相当する可能性が高い。河道内部に杭列が検出され、堰として機能していた（153-堰）と考えられる。

152-河道は、調査区北東部で検出された。深さ約60cm程度で、底面は水平である。河道断面はほぼ垂直になっていることから、検出した部分については3層を形成した水流の攻撃面に相当すると考えら

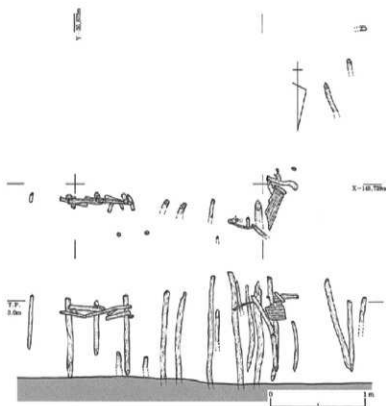


図6.02 153-堰平・断面図（S=1/30）

れる。

#### 【153-堰】(図6.02)

151-河道内で検出された杭列。東西方向の列が約250cm程度検出され、 $X=-148379$ 、 $Y=-36874$ mの地点で北東-南西方向に向きを変えた杭列が約210cmにわたって検出されている。杭の長さは約70～140cm程度とばらつきがある。径7～8cm程度の丸太材を素材としている。長いものは4層の粘土層にまで突き刺さっているが、短いものは3層の砂層内に収まっている。このことから、151-河道内底面が、粗粒砂層によってある程度埋積された後に、杭列が設置された可能性が高い。数点のサンプルを分析したところ、杭素材はすべてアカマツであった。確定できないものの、すべての杭がアカマツ材であった可能性が高い。

杭間の北面あるいは北西面には、横方向に径10cm程度の丸太や木皮と考えられる植物繊維束が残存している。また、杭列自体が直立するのではなく、上部が両側あるいは南東側に傾く状態で検出された。これらのことから、杭列は北→南方向または北西→南東方向の水流に対して設置されたことが分かる。横木などで水流に対する抵抗を増す構造が作られていることから、河道内で局所的に水位を上げるための施設、つまり堰として機能していたと想定できる。

当遺構の周囲においては、河道に取りつく水路・水田畦畔などは検出されていないが、その側方へと引水するための施設と考えるのが自然であろう。当河道の南側などの未調査域に同時期の水田面が形成されていた可能性を示唆している。また、3層下部から古墳時代初頭～前期土器が出土していること、杭列の下部に絡まって図6.05-5に掲載した庄内式を前後する土器が検出されたことから、古墳時代初頭を中心とした時期に当遺構が形成されたと考えられる。

#### 【3層出土遺物】(図6.03～6.05)

図6.03・04・05は、主に3層出土の土器である。図6.03-17・05-7が151-河道、図6.05-5が153-堰から出土したほかは、遺構外の出土である。

図6.03-1～3は、3層上部出土の一群である。図6.03-1は須恵器の無蓋高杯である。図6.03-2は土師器の高杯蓋である。つまみ部を有し、須恵器有蓋高杯の蓋の模倣品かと思われる。図6.03-3は土師器の甕である。底部を欠損するが、胴部下半に最大径を持つ。口縁は直線的にやや外傾し、口縁端部は丸くおさめられる。外面にハケ、内面にヘラケズリが施される。これらは、古墳時代中期に位置付けられると思われる。

図6.03-4～17は、3層中～下部出土の土器で古墳時代に属するものである。図6.03-4～8は小型丸底壺である。図6.03-4は手捏ねによって成形され、口縁部は短く外反する。また底部は平底状を呈する。図6.03-5は胴部高に比べ口縁部がやや長く、全体的に寸詰まりな印象を与える。器壁は厚く、外面・内面ともナデが施される。図6.03-6は口縁部に比べ胴部高がやや高い。また器壁が薄く、典型的な小型丸底壺である。外面・内面とも丁寧なミガキが施される。図6.03-7は口縁部を欠損する。外面にはナデ、内面にはヘラケズリが施されるが、外面の中段にはハケが残存する。図6.03-8は外面にナデ、内面は胴部上半にヘラケズリがみられる。

図6.03-9・10は高杯である。図6.03-9は脚部が欠損する。外面にはハケがみられる。図6.03-10は杯部を欠損する。外面には丁寧なヘラミガキが施される。破片のため判断は困難であるが、脚柱部には3ないし4方向からの穿孔がみられる。

図6.03-11・12は小型器台である。図6.03-11は杯部を欠損する。外面・内面ともナデが施される。

また破片のため判断は困難であるが、脚部には3ないし4方向からの穿孔がみられる。図6.03-12は器壁の風化が顕著であるが、外面に丁寧なヘラミガキが、内面にはナデが施される。また脚部には3方

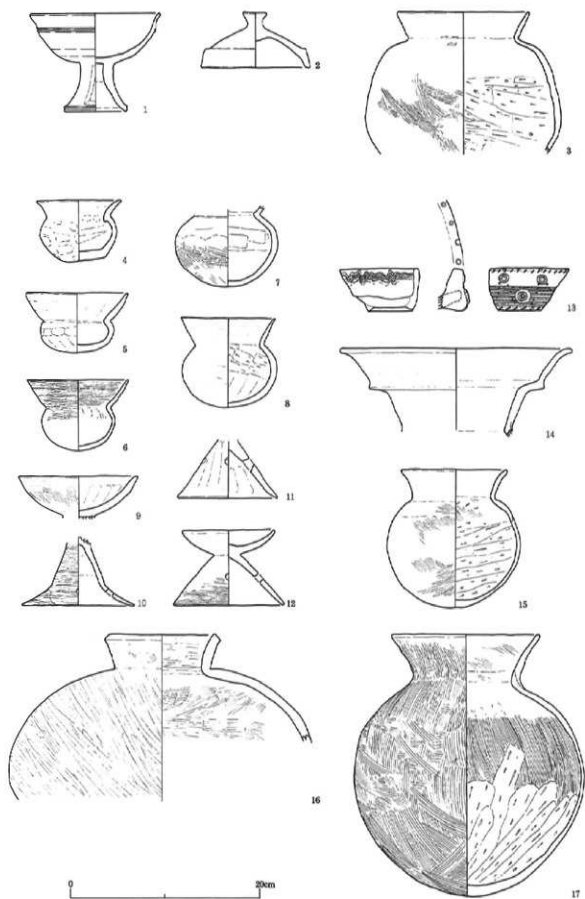


圖 6.03 3層出土土器 (1)(S=1/4)

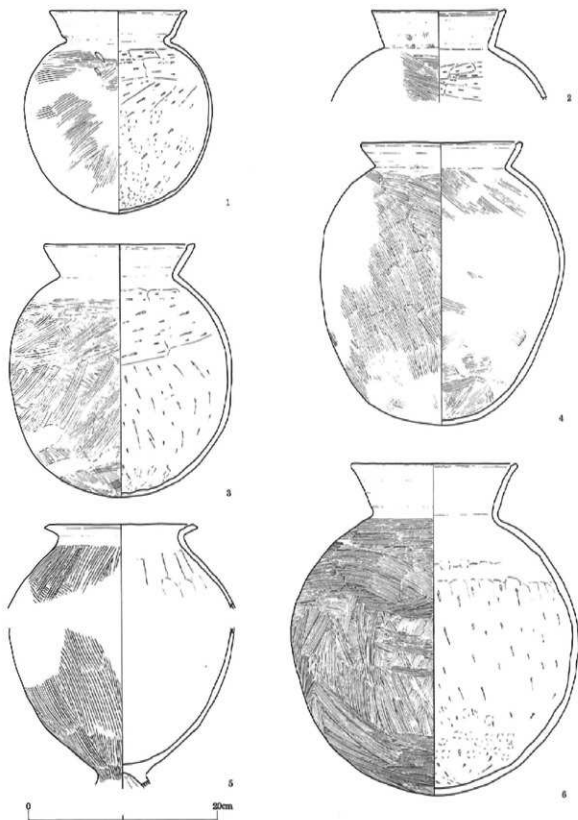


図6.04 3層出土土器(2)(S=1/4)

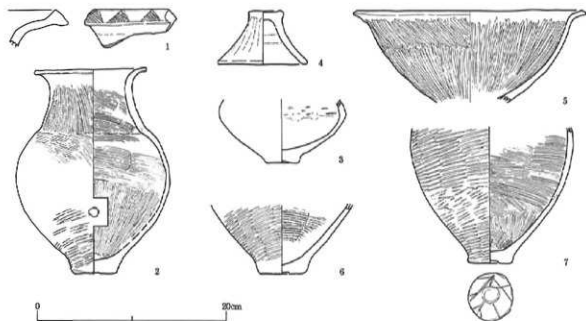


図6.05 3層出土土器(3)(S=1/4)

向からの穿孔がみられる。

図6.03-13・14は、複合口縁部の口縁部である。図6.03-13は口縁部外面に6条の沈線を施した後、円形浮文が貼付けられる。また円形浮文を結ぶ形で、円形突起が連続的に施文される。口縁部の上下端には、ヘラ状工具による刻みがみられる。さらに口唇部には竹管文が、口縁部内面には櫛描波状文がみられる。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。14は無文の複合口縁壺である。胴部から底部を欠損する。頸部は外傾ぎみに立ち上がり、屈曲して直立気味に外反する。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。

図6.03-15は広口壺ないしは甕である。胴部外面はハケののちナデが、内面にはヘラケズリが施される。16は甕である。胴部下半から底部を欠損する。口縁部は短く直立気味に立ち上がる。胴部外面には全体にミガキが施される。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。

図6.03-17は直口壺である。口縁部は外反気味に立ち上がり、底部は丸底を呈する。外面にはハケが、内面にはハケののちヘラケズリが施される。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土と思われる。

図6.04に示したのは、図6.03と同様に、3層中～下部出土の土器で古墳時代に属するものである。図6.04-1～5は甕である。図6.04-2は胴部から底部を、図6.04-5は脚部を欠損する。図6.04-4・5をのぞいては、胴部外面にハケ、内面にヘラケズリが施される。また内面底部付近には、押捺痕がみられる。図6.04-4・5は胴部内面にナデが施され、4の内面には、一部ハケが残存する。図6.04-1は口縁部がやや内湾しながら立ち上がる。また頸部には屈曲部を有する。肩部にはヨコ方向のハケが施され、一部に2個の列点文もみられる。図6.04-2は胴部から底部を欠くが、口縁部は直線的に立ち上がる。外面のハケは斜位に施され、布留型甕の規範を逸脱している。図6.04-3は口縁部が直線的に外傾し、胴部はやや長胴化する。胴部胴部には、ヨコ方向のハケがみられる。図6.04-4は胴部の長胴化が顕著である。また内面にヘラケズリ・押捺痕もみられず、外面のハケも斜位に施される。図6.04-1・3などに比べ、時期的に後続すると思われる。図6.04-5は脚付甕である。口縁部にS字甕の特徴を痕跡的にとどめており、東海系の甕と思われる。また外面のハ

ケは粗く、内面にはナデが施される。

図6.04-6は直口壺である。口縁部はやや外反気味に立ち上がり、底部は丸底を呈する。外面にはハケが、内面にはヘラケズリが施される。

図6.05に示したのは3層中～下部出土の土器のうち、弥生後期土器群との共通性の高い一群である。短期的には図6.03・04と同様に、古墳時代前期に位置付けられる可能性も想定されるが、明確な共存関係は不明である。弥生時代後期から古墳時代前期の時間幅の中でとらえておきたい。

図6.05-1は器台もしくは広口壺の口縁部である。口唇部に鋸歯文がみられる。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。

図6.05-2は広口壺である。頸部は内傾気味に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。底部は平底を呈する。胴部外面は下半に右上がりのタタキメが、上半にハケがみられる。内面にはハケが施される。また胴部下位には、焼成後に外面からの穿孔がみられる。図6.05-3は壺の胴部である。頸部から口縁部を欠損する。胴部中位に最大径を有し、底部は平底を呈する。外面はナデ、内面は上半にヘラケズリ、下半にナデがみられる。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土と思われる。

図6.05-4は無頸壺の蓋と思われる。外面・内面ともにナデが施される。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。

図6.05-5は鉢である。浅鉢状を呈し、口縁外反する。底部を欠損するが、平底の可能性が高い。外面・内面ともヘラミガキが施される。また外面の口縁部に近い部位には、一部原体圧痕がみられる。

図6.05-6・7は甕の底部である。やや上げ底を呈する。いわゆる第V様式系の甕である。外面には右上がりのタタキメが、内面にはハケがうかがわれる。また7はタタキメ部は大きくの一部をナデ消しており、底面には木葉痕がみられる。

以上のように、3層上部出土土器は確実に古墳時代中期に帰属し、3層中～下部出土土器は若干新相のものが混在するものの弥生時代後期末～古墳時代前期を中心としている。また、図6.03-17・05-7が151-河道、図6.05-5が153-堰から出土しているが、いずれも弥生時代末～古墳時代初頭の特徴を持つ土器である。また、図6.03-16、図6.04-3・6は、第3遺構面直上の3層が10cm程度しか堆積していない位置で完形に近い状態で出土している。これらも、弥生時代末～古墳時代初頭の特徴を持つ土器である。このことから考えると、先述のように、第3遺構面で検出された足跡・河道は弥生時代末～古墳時代初頭に形成された可能性が極めて高い。そして3層は古墳時代前期～中期にかけてさらに河川内堆積物として当該調査区に形成されたものと考えられる。

## 2.第4遺構面（弥生時代後期）

### 【水田面の検出】（図6.06）

4層は4-1～5層に細分できるが、そのうち4-5層上面（第4遺構面）で水田畦畔が検出された。4-5層は、下層の方形周溝墓の直上層に相当する。そのため、第4遺構面検出段階で、すでに下層の方形周溝墓の隆起が、調査区南東部に一ヶ所、南西部にもう一ヶ所そのような隆起が検出された。水田畦畔と考えられる遺構は、前者の隆起から北方方向へと直線的に伸びる形状で確認された。畦畔の最大幅は約4mと大規模であった。南東部の隆起と畦畔の結節点には細い溝状の凹みが検出され、水口として機能していたと考えられる。この隆起部と畦畔で囲まれた範囲はT.P.0.3～0.4mの平坦地となっており、一つの水田単位として耕作されていた可能性が高い。畦畔の西側にある南西隆起部との間は凹地となっているが、南

側にもけて大きく傾斜していることから、水田単位と機能していた可能性は低い。先述の水口は庫の凹地内のさらに一段下がった地点に向けて、東側の水田から排水するためのものと考えられる。

【4層出土土器】(図6.07)

全体に、4層からは土器の出土が僅少で、図化や時期判定が可能な個体は僅かである。図6.07には4-5層から出土した土器を掲載した。

図6.07-1は鉢である。胴部から口縁部を欠損する。底部が脚台状の形態となる。外面にはナデが、内面はハケのちナデが施される。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。弥

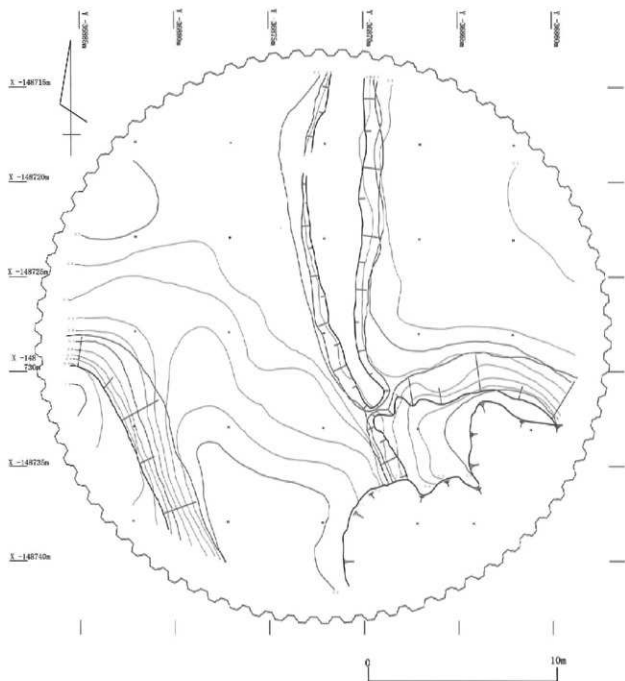


図6.06 第4遺構面平面図 (S=1/200)

生時代後期前葉～中葉の所産と考えられる。図6.07-2は短頸蓋で、畦畔盛土中から出土した。頸部から口縁部を欠損する。外面は胴部下半にケズリを施したのち、全面にハゲが施される。また内面にはヘラケズリが施される。胴部と頸部の境には、木製工具による列点文がみられる。弥生時代後期前葉の所産と考えられる。

このように4～5層出土土器のうち時期判別可能な個体は、弥生時代後期のものであり、第4遺構面の水田は弥生時代後期の前半期に機能していた可能性が高い。

### 3. 第5a・5b遺構面（弥生時代中期後半）

第4章に述べたとおり、第5a遺構面は5a層上面、第5b遺構面は5a層下面である。5a層自体は、流水堆積によって形成された5層全体の上面が暗色化・土壌化して形成された土器包含層である。後述するように、弥生時代中期後葉の土器群が含まれていて、当該期に人的活動が行われたと考えられる。5a層は凹凸が著しく、隆起部については5b層直上に盛土をして形成された方形周溝墓とその関連遺構の上面と考えられる。すなわち、5a層は、方形周溝墓が形成・機能していた時期の表土層と考えられ、第5a遺構面は弥生時代中期後葉の機能面かつ埋没直前の最終景観面と認識できる。一方、第5b遺構面は、当該期の人的活動による表土面からの掘削遺構の形状を反映する面と想定される。

第5a遺構面においては、堤状遺構と2つの方形周溝墓が検出された（図6.08）。調査区南西部では、幅約420cm、深さ約30～70cmの規模の154-溝が逆L字状に検出され、内側の部分に墳丘が確認されて方形周溝墓2と認識された。また、調査区南東部では、幅約220cm、深さ約40cm規模の155-溝と、幅約530cm、深さ約50cm規模の156-溝に囲まれた墳丘が検出された。これが方形周溝墓1である。155-溝は、約20cm程度の浅い形状でそのまま北方向へと展開し、その東側には堤状の隆起が検出されている。これが堤状遺構1である。堤状遺構1と方形周溝墓1墳丘は連続して、つながりの盛土によって形成されている。これらが、弥生時代中期後半に形成された5a層の最終景観面の形状である。

さらに5a層を除去した第5b遺構面では、墳丘上に形成された諸遺構が検出された。特に方形周溝墓1上面には多数の小溝群が検出され、さらに墳丘を除去していくとその主体部と考えられる遺構が検出された（図6.11）。これらについては、後に詳述する。

#### 【堤状遺構1】（図6.10・6.11）

堤状遺構1は、155-溝の東側に接して展開する遺構である。基底部の最大幅が約400cmで高さが約100cmの規模である。図6.10に示すように、5b1層上に盛土して形成されている。盛土の母材となる土壌には、155-溝もしくは156-溝の掘削土が用いられたと想定される。土層断面図（図6.10）をみると、155-溝は最終埋没形状と違って本来は更に深く幅広く掘削されていたが、その掘削土を堤状遺構1の形成のために盛土する際に、溝の東側斜面部に掘削土を盛り上げている、結果的に堤状遺構1完成時の溝が狭く浅いものとなったことがわかる。また、156-溝と接する部分に関してのみ、堤状遺構1の東側斜面が段上の平坦面を有する断面形状となっている。この部分に関しては、5a層が流出していることから、盛土東側斜面の崩落により平坦面が形成されたと考えられる。

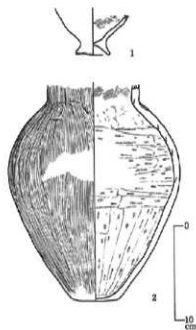


図6.07 4層出土土器



堤状遺構1の盛土もしくはその上面に形成された5a層から出土した土器は僅少であるが、図6.35に掲載してある。後に詳述するが、弥生時代中期後半の土器群が確認できる。後述する方形周溝墓群の供献土器に比べてやや古相を示す土器だが、盛土中には先行する時期の遺物が含まれる可能性がある。また、出土した水差型土器は弥生中期後葉の範疇で捉えうることから、下限時期は周囲の方形周溝墓機能時期と重なりをもつことになる。このことから、堤状遺構機能時期は弥生時代中期後葉を中心に考えるべきであろう。

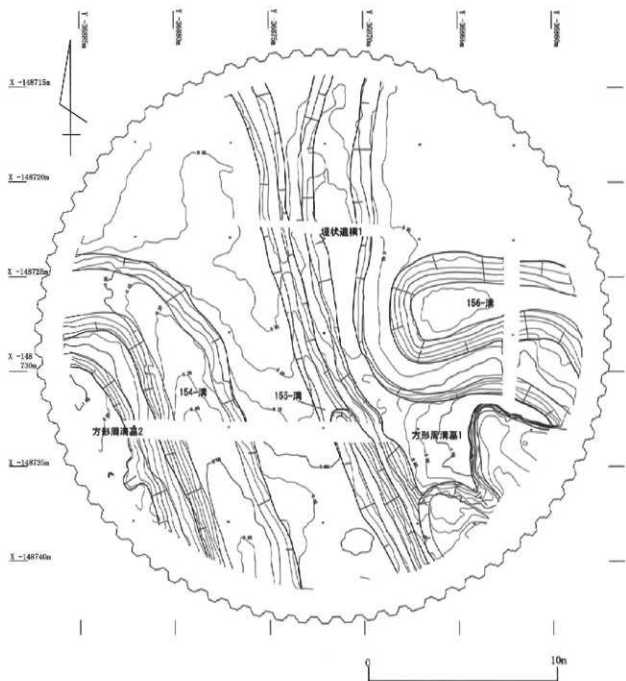


図 6.08 第 5a 遺構面平面図 (S = 1 / 200)



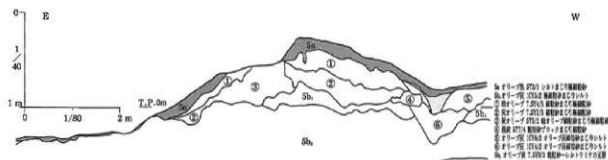


図 6.10 堤状遺構 1 土層断面図

【158-土坑】(図6.11)

堤状遺構 1 の中央部の西側斜面において、5a層を除去した第5b遺構面で径40cm深さ約20cmの小穴が検出された。158-土坑と名づけたこの遺構は黒色(5Y2/1)極細粒砂まじり粘土が充填されていて、土器片は全く出土しなかった。土坑というより柱穴と呼ぶにふさわしいこの遺構は、堤状遺構 1 に付随する施設の痕跡であった可能性が高い。堤状遺構の西側に柱状のものが立てられていた痕跡と考えられるが機能は不明である。

【方形周溝墓 1】(図6.10・6.11・6.12)

155-溝と156-溝に区画された内側に、高さ120cm程度の盛土を行って形成された方形周溝墓。東西方向幅が約13mで南北方向の平溝規模は中央から、古墳時代前期の151-河道の流水作用によって墳丘南半が破壊されているため不明である。最低南北11mはあったと考えられる。墳丘の北辺部については、その斜面に平坦面が形成される形態で検出されているが、この部分については5a層が消失していることがわかる。このことから、墳丘面が156-溝側に向けて流出したために平坦面が形成されたことを示している。

図6.09上段をみると、当方形周溝墓の墳丘盛土は5b<sub>2</sub>層上に形成されている。北周溝(156-溝)・西周溝(155-溝)いずれにおいても、大きく5b<sub>2</sub>層を掘りこんだ後にその土を用いて墳丘盛土を行いながら、掘削した溝内もその土を用いて整地し、墳丘面からなだらかな曲線を描いて断面半円形の周溝が形成されるように仕上げていることがわかる。墳丘機能時の土壌化層である5a層は、この墳丘機能面に形成されている。このような手法による盛土は、先述のように堤状遺構 1 の西側斜面でも行われている。

ただ、東西方向の土層断面図をみると、墳丘西半部については、5a層だけでなく、墳丘盛土内に暗色化・土壌化層(図中の②'層)が形成されていることがわかる。このことから、墳丘の西半部については、一度盛土により墳丘形成した後に再度盛土を行って墳丘を拡張した可能性がある。それを示すように、155-溝と当方形周溝墓西側斜面の接する部分には、5a層より下部の層(図中の⑦層)から完形の供献土器が出土している。これは第1次墳丘形成時の供献土器と考えられる。

このような堆積構造は、墳丘北半部で観察した南北方向土層断面では確認できない。墳丘北東部では再盛土による墳丘拡張は行われなかったと考えるのが妥当だろう。それと対応するように、156-溝からは5a層よりも下位の土層つまり墳丘面形成土からは一切土器は出土していない。

なお、北周溝(156-溝)や西周溝(155-溝)下層からは、完形土器あるいはそれに近い状態の土器が多数出土した。図6.19~21にはそれらの遺物を掲載している。これらは、葬送儀礼に関連する供献土器と

考えるのが妥当であろう。特に、156溝からはその最下層において土器と共に棒状木製品（図6.19-3・4）が出土している。これらの遺物も葬送儀礼に伴って廃棄されたものと考えられる。ただし、それらの出土位置は完全に廃棄の状況を保っていたとは考えにくい。図6.12に示すように、これら供献土器の中にはやや離れた地点から出土した土器片が接合するものがある。つまり完形に近い状態で置かれていたものが壊れてその土器片が周溝下部へと落ち込んだ可能性がある。このように考えると、すべての供献土器が廃棄の原位置を完全にとどめているわけではなく、墳丘上・裾・溝斜面に置かれていた土器群が周溝内へと転げ落ちて検出された状況になったと考えるのが妥当だろう。

これらの土器群は、後述するようにすべて弥生時代中期後葉の特徴を備えており、当方形周溝墓にお

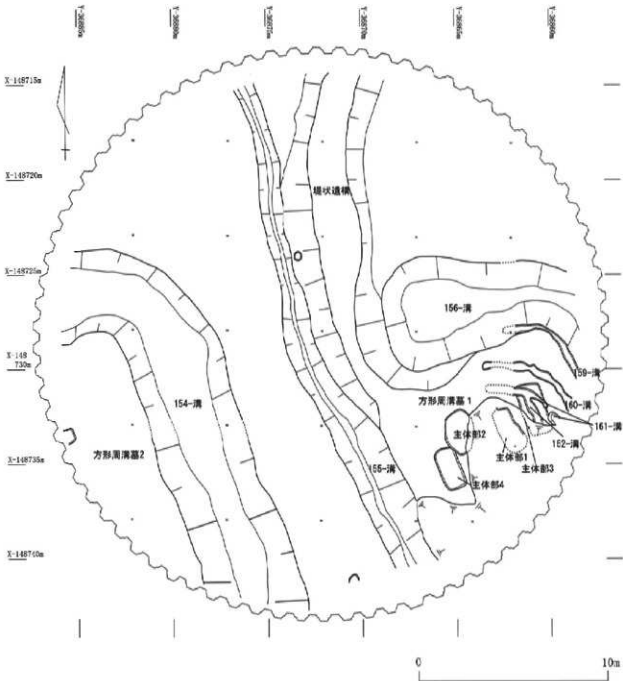


図6.11 第5b遺構面および墳丘盛土内遺構平面図（S=1/200）

ける葬送儀礼は当該期に行われたと考えるのが自然であろう。

【159・160・161・162-溝】(図6.11・6.12)

方形周溝墓1の北東隅部において、5a層を除去した面で検出された四条の小溝群である。いずれも幅約20cm、深さ約10cmで断面形態が半円形を呈している。墳丘の外側から順に159-溝・160-溝・161-溝・162-溝と並んでいて、161-溝と162-溝が合流しているほかは、すべて120cm程度間隔で平行して墳丘を取り巻くように検出された。溝として機能していたというよりも、墳丘面の機能時に設けられた施設痕跡である可能性が高い。墳丘北東隅に三〜四重に囲いのような施設が形成されていたことも想定されるが、正確な機能は不明である。

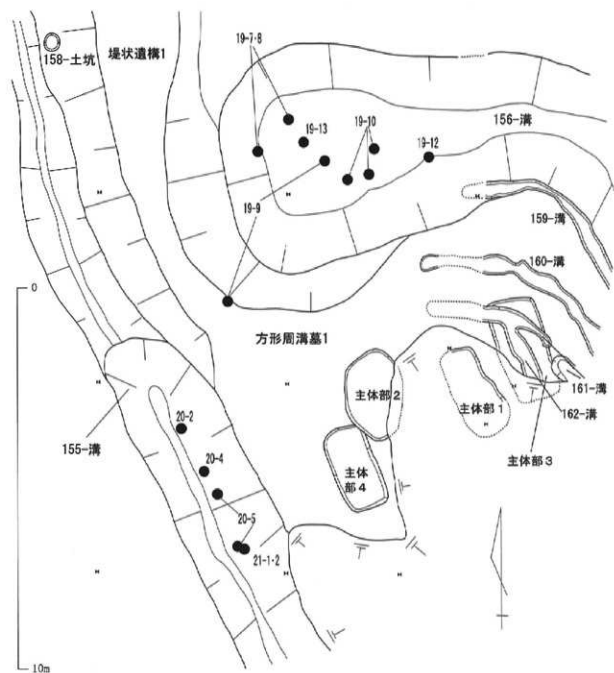


図6.12 方形周溝墓1と関連遺構平面図(S=1/100)  
 (○-○は掲載土器の図版番号の下2桁と図版内番号を示す)

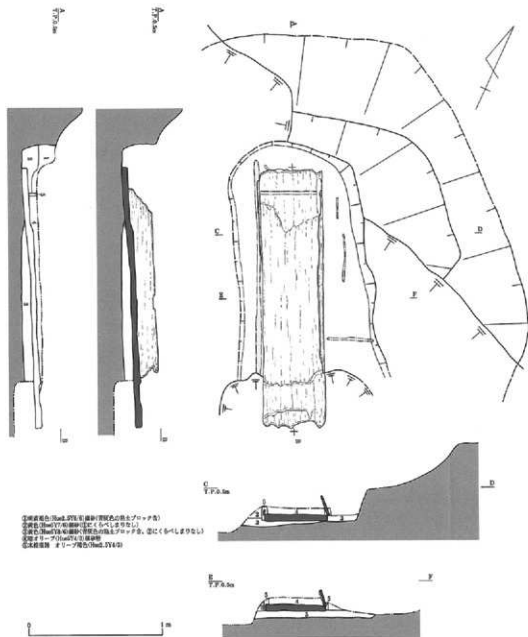


図0.13 方形舟(舟)の主体部1平・断面図

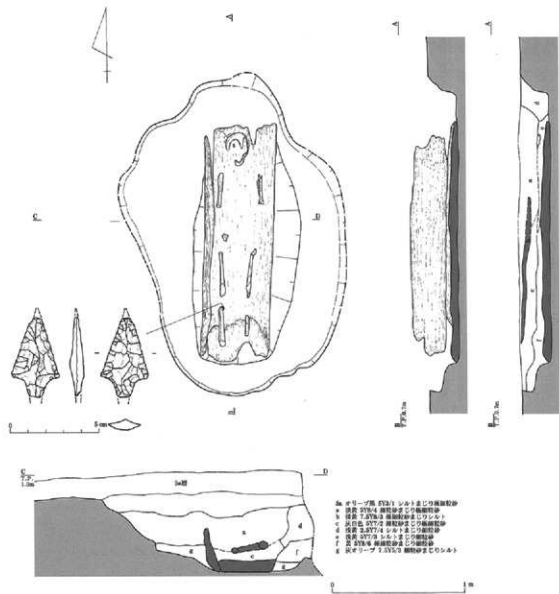


図6.14 方形両溝蓋1主体部2平・断面図・出土石版

## 【方形周溝墓1主体部1】(図6.12)

当遺構は、墳丘の検出範囲のうちほぼ中央付近で検出された、組合わせ式木棺を使用した埋葬主体部である。人骨などの遺体痕跡は残存していなかった。長軸は北北西-南南東方向であった。検出された時点では、すでに151-河道により、主体部南半部は侵食されていた。侵食のために墓坑の全体規模は判然としませんが、木棺の周囲20cm前後の範囲が平面不整形に掘り下げられ、その周囲には上に行くほどスロープ状に大きく墓坑側面が広がる形状であった。図6.09上段の土層断面図でも確認できるが、この墓坑上部の落ち込みラインは、墳丘上面にまで達している。この状況を見ると、本主体部が墳丘状面から大きく掘り込まれて形成されたように見えるが、上部の落込み土層は、蓋板腐蝕に伴って棺内に埋土が流れ込み、結果としてその上部の盛土が褶曲して形成された可能性も否定できない。墓坑の掘りこみ面については、調査時の観察では確定できなかった。

木棺は底板と東側板の一部が残存し、北側の小口板・西側板については棺材痕跡のみが土層平・断面で確認できた。底板は幅約50cm・長さ約195cm・厚さ約6cmの大きさであった。東側板は欠損品であるが長さ140cm程度残存していた。西側板は土層断面では、底板の外側に配されているように見えるが、東側板の一部が底板の上ののった状態にあった。このことから、木棺埋置時には側板は底板の長側縁に載せられていたが、棺材腐蝕にともなう棺崩壊に伴い、底板の外側へと側板の位置がずれた可能性が高い。また、検出時には蓋板は欠失し、151-河道の侵食のために棺内埋土の上半は流出していた。

墓坑内埋土の堆積状況を見ると、墓坑底面が水平でなく、木棺底板との間に粗粒砂を充填して棺の水平を保っていることがわかる。また、平面図に示したように墓坑内の東側掘方埋土中に木片の痕跡が確認された。蓋板・側板腐蝕に伴う棺崩壊時に側板の木片が散った痕跡とも考えられるが、主体部南半部については側板と直口する方向に細長い木片痕跡が確認されたことから、墓坑内に側板を支える補助的木材が設置されていた可能性を考慮する必要がある。

なお、当主体部棺内埋土を水洗したところから、人歯破片が検出された。水洗した棺内埋土は主体部北半部のものであったため、遺体は頭部を北北西方向にむけて埋葬されていたと考えられる。棺内・墓坑からはそれ以外の遺物は検出されていない。木棺材は、いずれもコウヤマキ製である。

## 【方形周溝墓1主体部2】(図6.14)

当遺構は、墳丘の検出範囲のうち中央やや西よりの地点で検出された、組合わせ式木棺を使用した埋葬主体部である。底板上に頭骨・下顎・両腕・両肢の骨の遺存物が検出された。長軸はほぼ南北方向で、頭位は北にむけられて埋葬されていた。蓋板・東側板は腐蝕して残存せず、底板・西側板の一部が残存していた。東端部が、151-河道による侵食で破壊されているものの、墓坑は検出面では平面不整形で長軸長約240cm・短軸約160cm程度と推定される。ただし、図6.14の東西方向土層断面にみるように、墓坑の西側面はなだらかなスロープを描きながら5a層下面にまで到達している。このことから、当墓坑は墳丘上面から掘込まれたと考えることができる。しかし、上部の墓坑の広がった部分は、蓋板腐蝕に伴って棺内に埋土が流れ込み、結果としてその上部の盛土が褶曲して形成された可能性も否定できない。墓坑の掘りこみ面については、調査時の観察では確定できなかったが、墳丘面から墓坑が掘込まれた可能性を重視したい。

木棺は底板と西側板の一部が残存している。底板は、幅約46cm・長さ約182cm・厚さ約8cmの大きさである。西側板は長さ約168cm・幅約33cm・厚さ約6cm程度の部分が残存している。いずれもコウヤマキ製である。土層断面では、棒状木質遺物と木質腐蝕層と思われる土層を確認しており、これが東側板もし



くは蓋板の崩落部相当すると考えられる。西側板は底板の外側に突出されたが、本来は底板外縁部の上  
 へのせられていたものが、棺崩壊に伴って、その位置がずれたものと考えられる。

墓坑・棺内からの出土物として唯一のものは、サヌカイト製の打製有茎石鏃1点である。この石鏃は、  
 遺体の右脛骨上端部の裏側、つまり脛骨と底板の間に形成されていた僅か厚さ1.5cm程度の土壌から検出

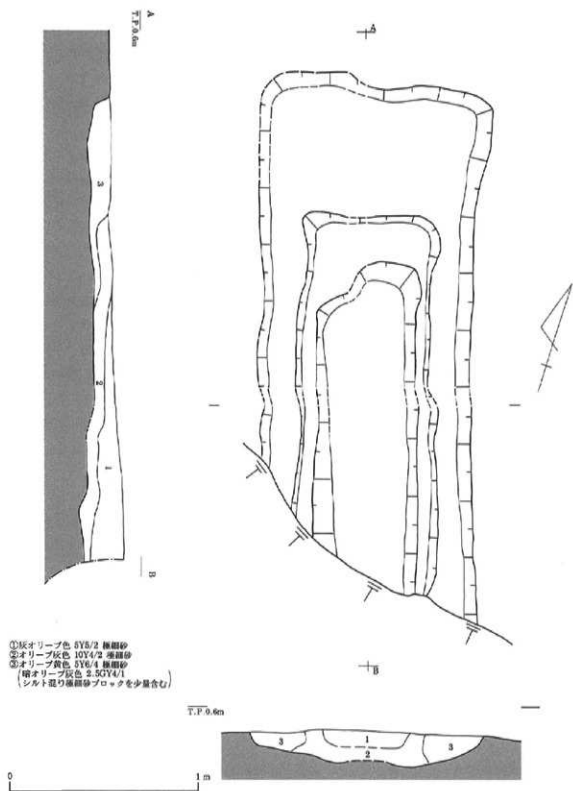


図 6.15 方形周溝墓 1 主体部 3 平・断面図 (S=1/20)

された。このため、遺体の安置後投入された副葬品とは考えにくく、右脛部に石鐮が刺さっていた状態の遺体が埋葬された可能性が高い出土状況を示している。なお、石鐮は基部と先端が欠損している。近接した脛骨には石鐮が刺さっていた痕跡は確認できなかった。

【方形周溝墓1主体部3】(図6.15)

当遺構は、墳丘の検出範囲のうち中央やや東よりの地点で検出された埋葬主体である。棺材自体は全く残存していないが、平面形態・土層断面の観察から、木棺による遺体埋葬が行われたと考えられる。人骨などの遺体も残存していない。南部が151-河道の侵食によって欠失していて全体規模はわからないが、北北西-南南東方向を長軸とする方形の墓坑形態をとる。墳丘上面の5a層を除去し、さらに20cm程度

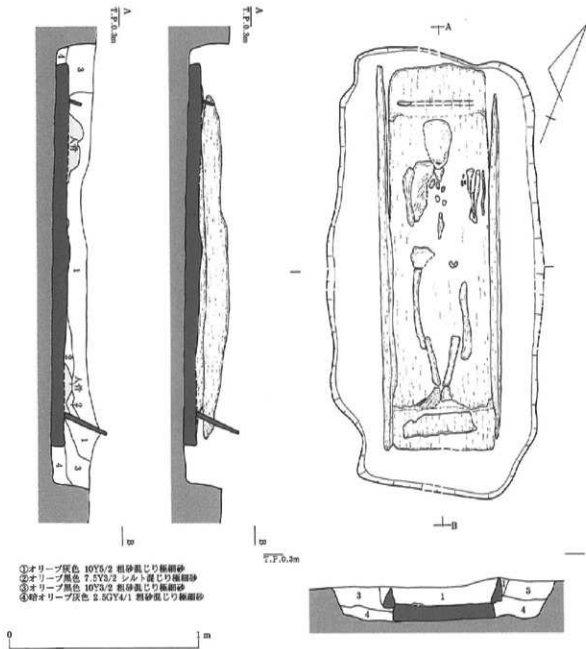


図5.16 方形周溝墓1主体部4平・断面図(S=1/20)

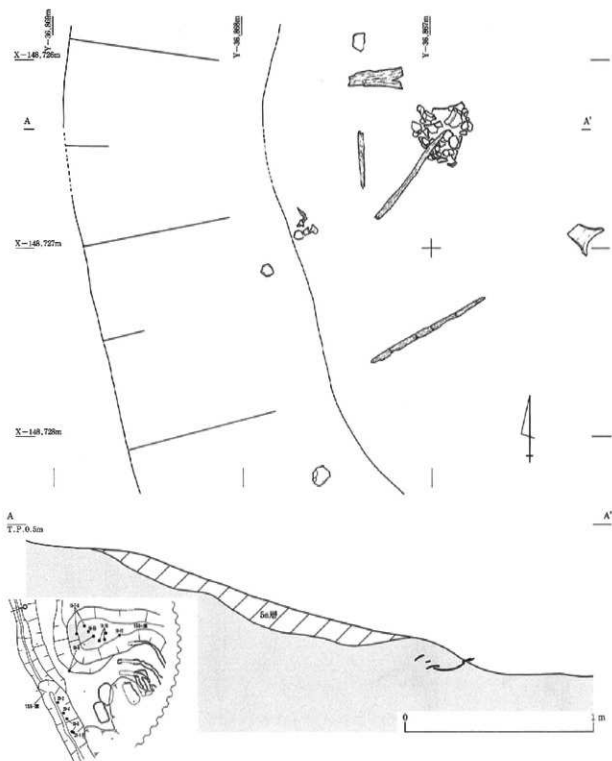


図6.17 方形周溝墓1北周溝(156-溝)遺物出土状況(1)(S=1/20)

墳丘を掘り下げた面で検出された。墓坑の掘り込み面は明確に確認できなかったが、墳丘機能面に近い位置で墓坑を検出していることから、墓坑は墳丘上面から掘りこまれた可能性が高い。

墓坑の平面規模は、幅約110cm・長さ300cm以上の方形である。短軸方向の土層断面をみると(図6.15参照)、図中の凹状に形態に形成された2層が、周囲の埋土と異なって暗色系統であり木棺痕跡であった可能性が高い。断面形態からみると底板側縁の上に柩板を置いた組合せ式木棺が埋置されていたとも頷推できる。墓坑内からは土器・石器などをはじめ遺物類が全く出土せず、歯破片なども検出できなかったこと

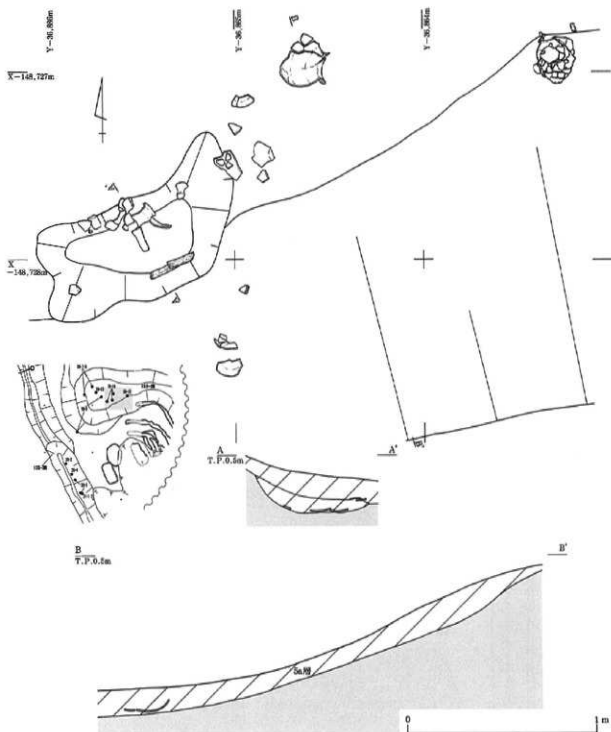


図6.18 方形周溝墓1北周溝(156)遺物出土状況(2)(S=1/20)

から頭位方向も明確ではない。ただ、長軸方向や棺の規模などは主体部1に類似しており、その先後関係はともかく、それぞれが相関して隣接して埋葬されたと考えるべきであろう。

【方形周溝墓1主体部4】(図6.16)

残存墳丘面の西寄りで検出された、組合せ式木棺による埋葬主体である。墓坑は長軸が北北西-南南東方向となる不整形形で、墓坑内には木棺底板と南端部小口板がほぼ完存し、両側板と北端小口板の一部が残存していた。埋葬遺体は、劣化が著しいものの頭骸骨・両腕骨・両肢骨・骨盤などが検出できた。

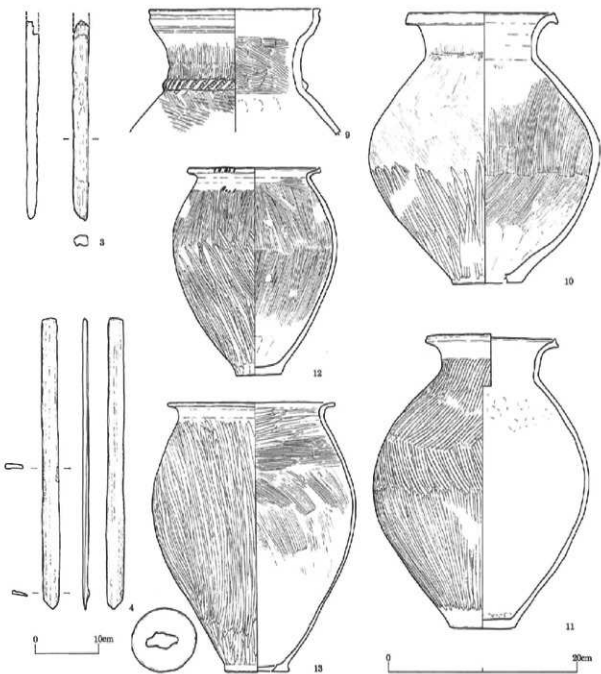
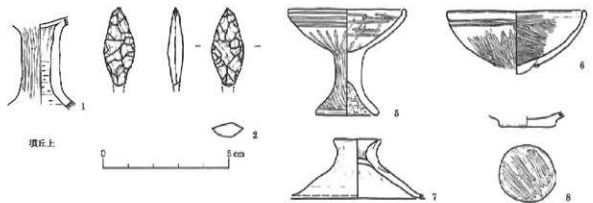


图 6.19 方形周湾墓 1 填丘上·北周湾 (156-湾) 出土土器·石器·木器

頭位方向は主体部1同様北北西である。墳丘面を50～60cm程度掘削した面で検出しており、明確な墓坑掘り込み面は確認できなかった。

墓坑の平面規模は長軸約240cm・短軸110cm程度であった。木棺底板は幅約56cm・長さ約210cm・厚さ約8cmの規模であった。両側板は上半部が崩壊・腐蝕しているものの残存長は約210cm厚さ約6cmである。棺材は、いずれもコウヤマキ製である。検出時には、両側板は底板の外側に位置していたが、その底面は底板上面と同じ高さにある。このことから、本来は底板外縁部に側板がのっていた組合せ形態が、側板の崩壊時にずれて検出時の位置になったものと考えられる。墓坑・棺内埴土いずれにおいても全く遺物は出土せず、副葬品は確認できなかった。

#### 【方形周溝墓1関連遺物】

図6.19は方形周溝墓1北周溝（156溝）出土の遺物である。このうち図6.19-1・2は、方形周溝墓1墳丘上の北側斜面（溝156付近）より検出された。ただし北周溝（156溝）出土の土器（図6.19-3～13）にも、墳丘上北側斜面より崩落したものが含まれると考えられるため、ここでは一括して扱った。各遺物の出土位置を図6.12に、出土状況を図6.17・18に示した。

図6.19-1は高杯の脚柱部である。外面にはヘラミガキが施される。内面は上半にしほり痕、下半にヘラケズリがみられる。また外・内面にススが附着する。図6.19-2はサスカイト製の石鏡である。莖部を折損する。また先端部も、折損後に再加工された可能性が想定される。莖部残存部は、着装によるためか稜線が磨滅する。

図6.19-3～13は、方形周溝墓1北周溝（156溝）出土の遺物である。図6.19-3・4は棒状木製品である。図6.19-3は上半が欠損する。断面はほぼ長方形を呈し、人為的な加工が想定される。図6.19-4は断面が偏平形を呈し、上端は直線的に加工される。図6.17に示すように供獻土器の上に重なるように出土しており、葬送儀礼に伴って周溝あるいは陸橋部斜面上に廃棄された可能性が高い。

図6.19-5・6は高杯である。図6.19-6は脚部を欠損する。杯部外面には凹線がみられ、外面はヘラケズリのちヘラミガキが施される。また杯部内面にはヘラミガキ、脚部内面にはヘラケズリがみられる。図6.19-6の胎土には角閃石が多量に含まれ、いわゆる生駒西麓産の胎土である。

図6.19-7は壺蓋である。端部を欠損する。つまみ部は、円筒状に成形したのち円盤充填されている。内面にはススの附着が顕著である。

図6.19-8は壺または鉢の底部である。底部にはヘラミガキが施される。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。

図6.19-9は受口口縁壺の口縁部である。頸部と胴部との境には、断面三角形の刻目凸帯がみられる。図6.19-10・11は無文広口壺である。図6.19-10は口縁部がやや垂下する形態である。外面は胴上半にハケ、胴下半はヘラケズリのちヘラミガキがみられる。また内面にはハケが施される。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。図6.19-11は口縁端部をややつまみあげる。外面は胴上半にハケ、胴下半はヘラケズリのちヘラミガキがみられる。また内面にはナデが施される。

図6.19-12・13は壺である。図6.19-12はやや小型で、口縁端部をつまみあげる。外面は、胴上半にタタキのちハケが、下半にはヘラケズリのちヘラミガキがみられる。内面にはハケが施される。また口縁端部の一部には、5つの刻目がみられる。図6.19-13は口縁端部を丸くおさめる形態である。外面全面にヘラミガキがみられ、底部付近にはヨコナデが施される。また内面も、ハケのち上部にヘラミガキが施される。図6.19-12・13の胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。

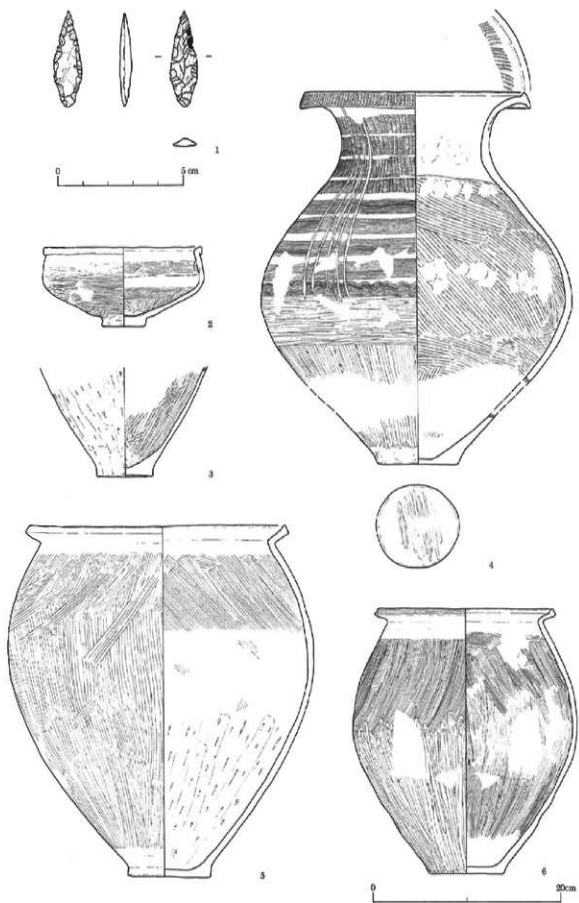


图 6.20 方形鬲滴釜 1 西周滴 (155-滴) · 西周滴下層 (155-滴) 出土土器 · 石器

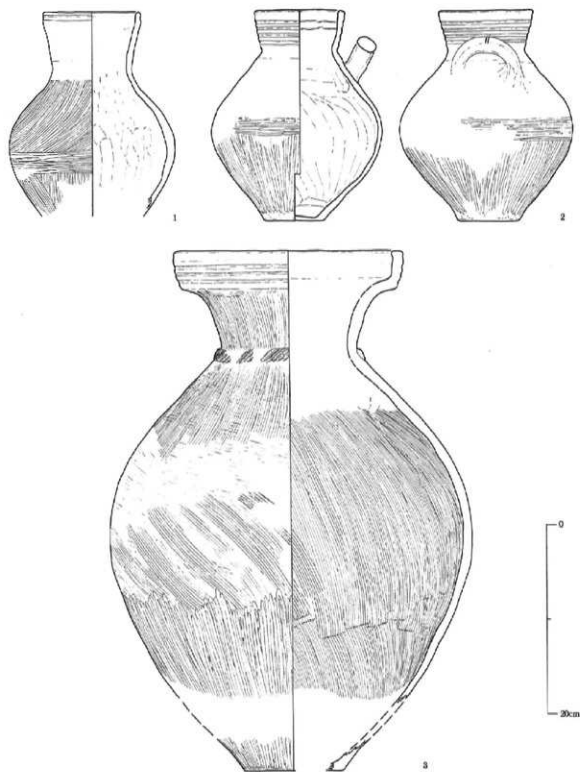


図6.21 方形周溝墓1西周溝（155-溝）下層出土土器

図6.20・21は、方形周溝墓1西周溝（155-溝）・西周溝下層（155-溝下層）出土の遺物である。図6.20-3が5a層から出土したほかは、いずれも下層（5b層）より検出された。各遺物の出土位置は、図6.12に示した。出土した土器は、弥生時代中期後葉に位置付けられる。

図6.20-1はサヌカイト製の石甌である。腹面は丁寧な交互剥離によって調整される。また左面の二次加工は浅く素材面が残存する。



図6.20-2は鉢である。口縁部は折曲げにより肥厚する。外面にはヘラミガキが施されるが、底部から底部付近にはその前に施されたヘラケズリの痕跡が残存する。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。図6.20-3は甕の底部である。外面はヘラケズリの痕跡が残存するが、底部付近にはナデが施される。また内面はハケがみられる。図6.20-4は広口壺である。口縁部は垂下し、口縁部から頸部に5条の櫛描簾状文を、胴部上半に4条の櫛描直線文を、胴部中位に1条の櫛描波状文を施す。また胴部下半や底部にはヘラミガキが施され、胴部中位の横方向のヘラミガキは、櫛描波状文を切っている。底部付近にはナデがみられるが、ナデに切られる形で一部にハケが残存する。櫛描文本体は幅21mmを測り、簾状文の間隔は3~4mmが多い。また頸部から胴部上半には、縦方向に5条のヘラミガキが、暗文状に施される。胴径の2分の1を欠損するため詳細は不明であるが、4~5方向の暗文が想定される。また口縁部内面には列点文がみられる。上町台地から大阪湾南岸部に類例がみられる。

図6.20-5・6は甕である。5は大型品である。外面は全面にハケを残し、底部付近にヨコナデが施される。また内面は、下半部にヘラケズリがみられる。こうした製作手法は北近畿地方のものに類似するが、形態は大阪湾沿岸部のものと何ら変わらない。搬入品ではなく模倣品の可能性は考慮するべきであろう。図6.20-6は中型品である。口縁端部をつまみあげ、外面には1条の凹線文が施される。また胴部外面は上半にハケが、下半にヘラケズリののちヘラミガキがみられる。また内面にはハケが施される。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。

図6.21-1は直口壺である。口縁上部に1条の凹線文が施される。また胴部外面は上半にハケが、下半にはヘラケズリののちヘラミガキがみられる。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土と思われる。

図6.21-2は水差し形土器である。口縁部に4条の凹線文が施され、また口縁部上端には凹線文を意識した強いヨコナデがみられる。なお口縁端部に刃込みはみられない。把手は断面が扁円形を呈し、貫通して取り付けている。また把手の中央上端には2個の刻目がみられる。胴部外面は上半に縦方向のナデが、下半にはヘラケズリののちヘラミガキが施される。

図6.21-3は受口口縁壺である。口縁部には3条の凹線文が施される。頸部と胴部の境には、断面三角形を呈する刻目凸帯がみられる。胴部外面は上半にタタキののちハケが、下半にはヘラケズリののちヘラミガキが施される。ただし中位にはハケがみられずタタキが残存する。内面にはハケが施される。

これらの出土土器をみても、155-溝下層出土品と156-溝出土品の中にも型式学上の時期差を積極的にみとめることはできない。方形周溝墓1出土土器は、いずれも弥生時代中期後葉に位置付けられ、葬送儀礼もその時期に行われた可能性が高い。

## 【方形周溝墓2】

調査区南西部で検出された154-溝に区画され、その内側に盛土を行って形成された方形周溝墓。その西半部は調査区外のため全体規模は不明であるが長軸長は17m以上あったと考えられる。墳丘高は約1.5m程度であった。図6.09下段に示すように、当方形周溝墓の盛土層は5a<sub>2</sub>層とした暗色・土壌化層の上に形成されている。方形周溝墓1の盛土下層にはこのような土壌化層は確認されていないことから、方形周溝墓2は方形周溝墓1に後出して形成された可能性が高い。

また、当方形周溝墓の周溝である、154-溝は先述の5a<sub>2</sub>層の上面から掘り込まれている。図6.09下段に見えるように、周溝で区画された内部だけでなく墳丘~周溝斜面・周溝下層にかけて掘削土により整地を行い、墳丘裾~周溝の断面形状が半円形になるよう墳丘形態を整えている事がわかる。この整地層か

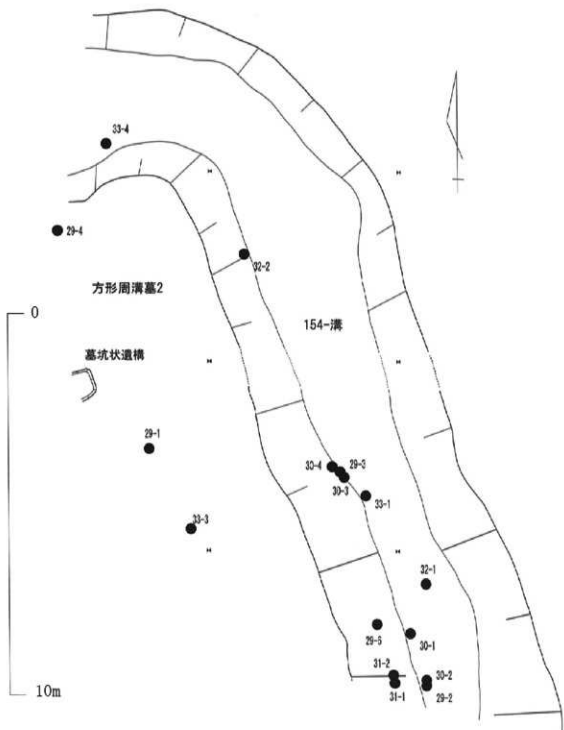


図6.22 方形周溝墓2 関連遺構と供献土器出土地点  
 (○-○は掲載土器の図版番号の下2桁と図版内番号を示す)

らは一切土器片が出土せず、墳丘裾面に形成された5a1層からのみ完形に近い土器群が出土している。このことも、5a1層が墳丘～周溝機能面として機能していたことを示している。このように、一度垂直方向に周溝を掘削したのちに墳丘裾を整地する手法は方形周溝墓1でも確認されており、今回検出した方形周溝墓群に共通する増募手法であったと考えられる。

また、方形周溝墓1同様に、第5a遺構面での墳丘形状が墳丘上面外縁部に平坦面を有する状態となっ

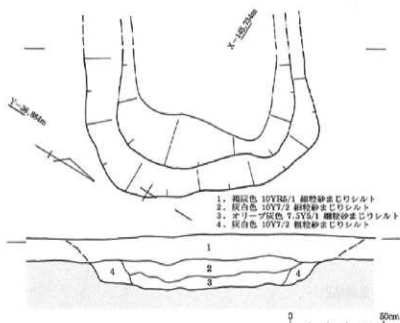


図6.23 墓坑状遺構平・断面図

ていた。土層断面を観察すると、この段状の部分だけ5a層が流出していることがわかる。このため、墳丘状外縁が崩落して土壌が流出して、段状の形態となったと推定される。この状況は、方形周溝墓1の北側斜面と全く同様である。

墳丘の上面では、北寄りの地点に不整形を呈すると推定される墓坑状の遺構が検出されている。その大半が調査区外のため全体規模は明らかではないが、幅約130cm・深さ約30cm程度である(図6.23)。その形状から埋葬主体の可能性も考えられるが、木棺や遺体は検出されていない。検出時の所見からは、墓坑の可能性のある遺構であることを指摘するに留めたい。

#### 【方形周溝墓2関連遺物】

図6.29-33は方形周溝墓2墳丘上・周溝(154-溝)出土の土器である。図6.29-1・30-5・33-3が墳丘上より出土したほかは、いずれも周溝(154-溝)から検出された。また図6.30-2は、墳丘上から周溝(154-溝)にいたる斜面から出土している。ただし周溝(154-溝)出土の土器にも、墳丘上より崩落したものが含まれると考えられるため、ここでは一括して扱った。土器の出土位置を図6.22に、出土状況を図6.24-28に示した。

図6.29-1~6は無文広口壺である。1・2は口縁部に凹線文が施される。胴部外面は上半にハケ、下半はヘラケズリののちヘラミガキがみられる。また内面にはハケが施される。このうち1の胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。3は口縁部に凹線文をみないほかは、製作手法において1・2に類似する。ただし外面のヘラミガキは胴部の3分の2におよんでいる。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。4は胴部の破片である。外面・内面ともにハケがみられる。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。5・6も口縁部に凹線文がみられない。製作手法は1・2に類似するが、胴部上半にタタキが残存する。また6の内面は全面にナデが施される。なお5・6の口縁部には、2対1組の穿孔が4方向にみられる。いずれも焼成前の穿孔である。

図6.30-1・2は広口壺である。1は胴部下位に最大径をもち、口縁部は垂下する。外面はヘラケズリの

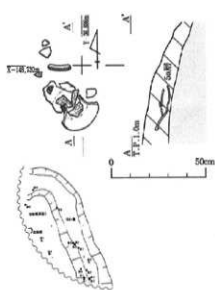


図6.24 方形周溝墓2墳丘上・周溝(154-溝)遺物出土状況(1)

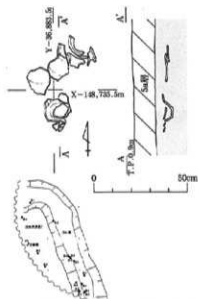


図6.25 方形周溝墓2墳丘上・周溝(154-溝)遺物出土状況(2)

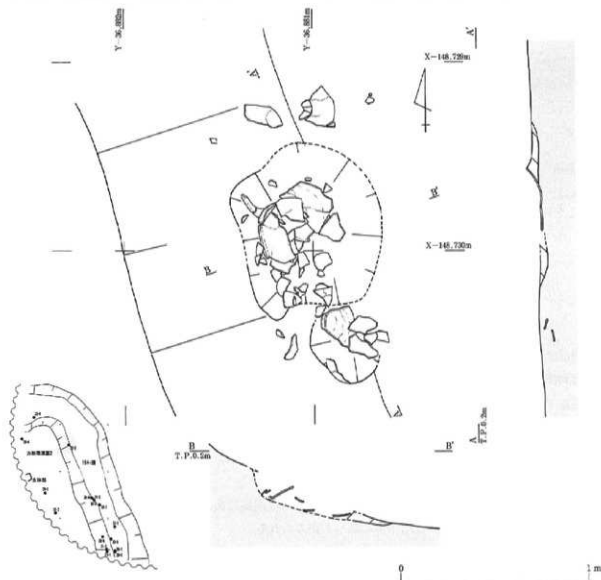


図6.26 方形周溝墓2墳丘上・周溝(154-溝)遺物出土状況(3)

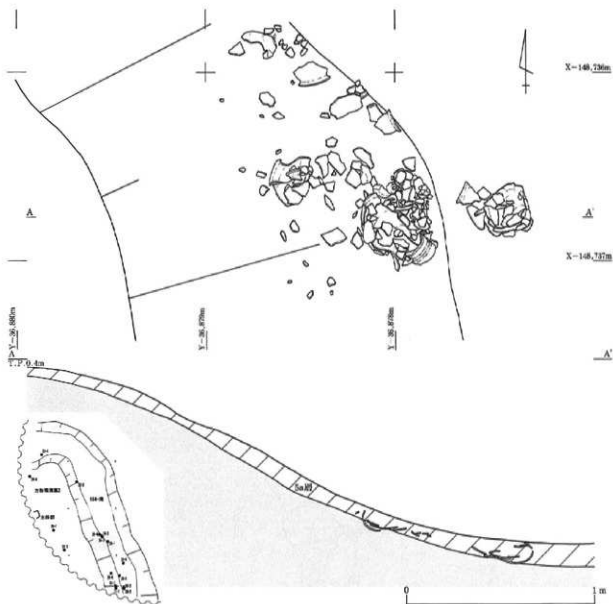


図6.27 方形周溝墓2墳丘上・周溝（154-溝）遺物出土状況（4）

のち胴部全面にヘラミガキが施される。また内面の底部に近い部位にも、粗いヘラミガキがみられる。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。2は胴部下半から底部を欠損する。口縁部は垂下する。口縁部から胴部上半に8条の櫛描簾状文が施される。原体幅は23.5mmを測る。また口縁部には刺突文もみられる。胴部下半にはナデののちヘラミガキが施される。なお胴部上端には、櫛描簾状文に切られる形で、ハケの工具痕がみられる。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。

図6.30-3は壺の底部である。風化が著しく器面の観察は困難であるが、外面はヘラケズリののちナデまたはヘラミガキが施される。また内面にはハケがみられる。

図6.30-4は短頸壺である。口縁部に3条の凹線文が施される。また頸部と胴部の境には、断面が台形を呈する刻目凸帯がみられる。外面は胴部上半にハケが、下半にヘラケズリがみられる。また底部付近には、ヨコナデが施され、一部にナデののちハケもみられる。内面にはハケが施される。

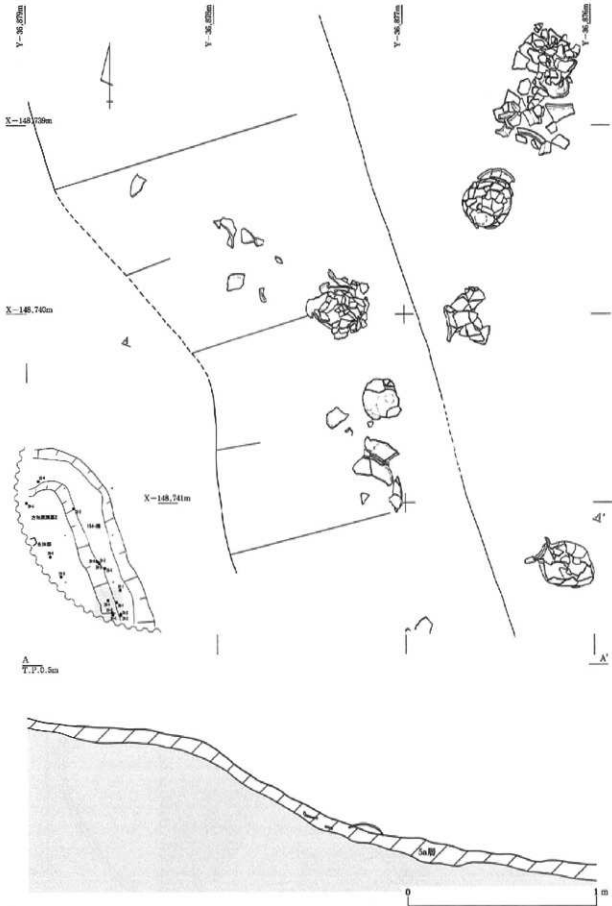


図 6.28 方形周溝墓 2 墳丘上・周溝 (154-溝) 遺物出土状況 (5)

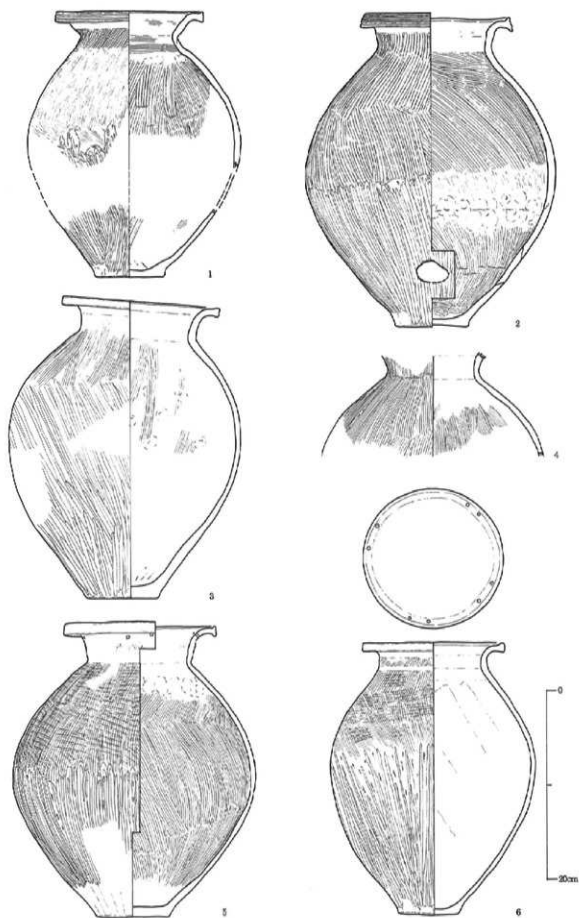


图 6.29 方形周溝墓 2 墳丘上・周溝（154-溝）出土土器（1）

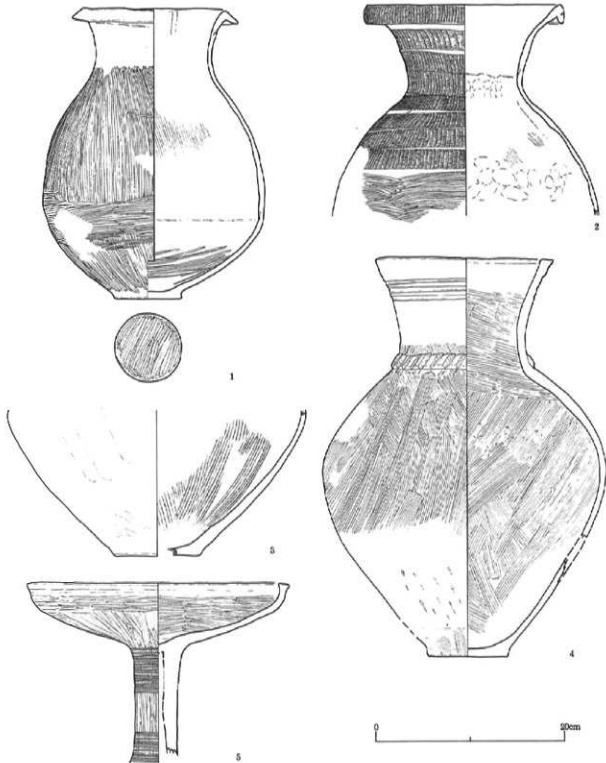


図6.30 方形周溝墓2墳丘上・周溝（154～溝）出土土器（2）

図6.30-5は高杯である。脚部を欠損する。杯部は鉢状を呈し、口縁部はやや肥厚する。外面・内面ともヘラミガキが施され、脚柱部外面には沈線がみられる。なお脚柱は中空を呈し、内面にはヘラケズリが施される。

図6.31-1・2は受口口縁壺である。1は口縁部と胴部下半から底部を欠損する。口縁部は屈曲して立ち上がり、屈曲部には凹線文がみられる。また頸部と胴部の境には、断面が扁平な刻目凸帯がみられる。外



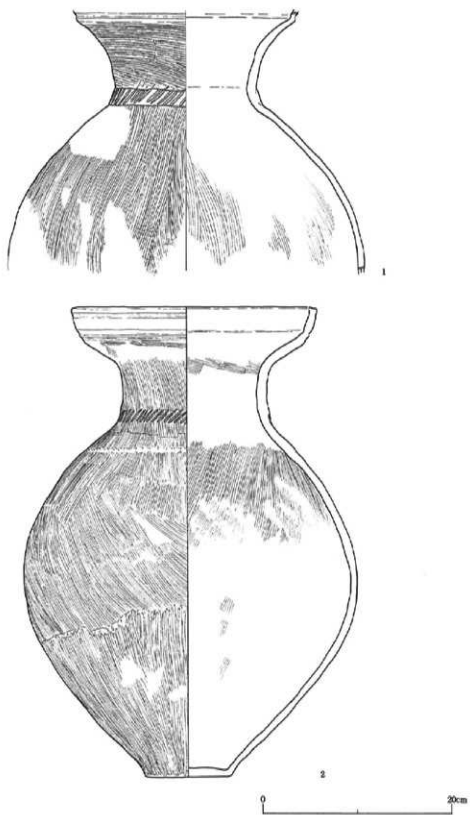


圖 6.31 方形周溝墓 2 墳丘上・周溝（154-溝）出土土器（3）

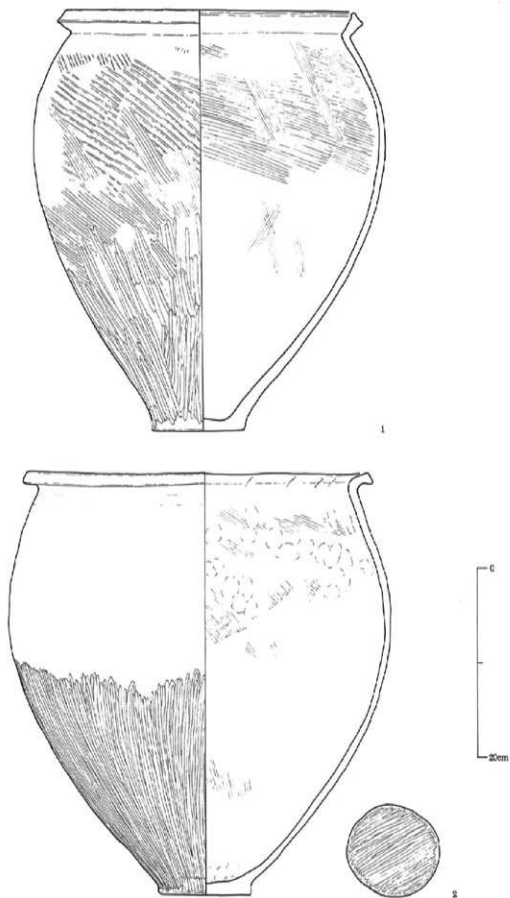


図 6.32 方形周溝墓 2 墳丘上・周溝 (154-溝) 出土土器 (4)

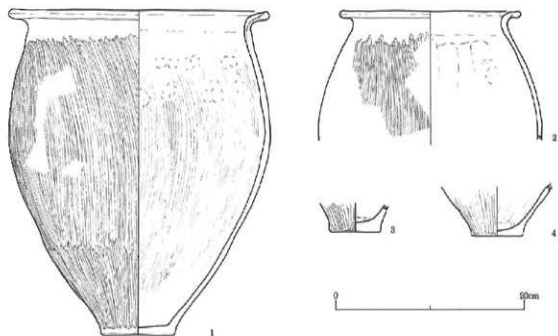


図6.33 方形周溝墓2墳丘上・周溝(154-溝)出土土器(5)

面は頸部にハケ、胴部にタタキのちハケが施されるが、頸部と胴部ではハケの原体が異なっている。また内面にもハケがみられる。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。2は口縁部が屈曲し、内湾気味に立ち上がる。屈曲部に2条の、口縁部に1条の凹線文がみられる。また頸部と胴部の境には刻目が施される。外面はハケのち胴部下半にケズリを施し、さらにヘラミガキが施される。また肩部には、ほぼ一直線に指押えが並ぶ。内面はハケのち下半にナデが施される。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。

図6.32-1・2は甕である。いずれも大型品である。1は口縁部が直線的に立ち上がり、端部に面をなす。胴部上半は粗いタタキのちハケが、下半には、ヘラケズリのちヘラミガキが施される。また内面は上半にハケ、下半にナデがみられる。2は口縁部が大きく外反し、やや丸みを帯びた面をなす。外面は上半にハケのちナデを、下半にはヘラケズリのちヘラミガキが施される。また内面は、一部にハケを残しナデが施される。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。

図6.33-1・2は甕である。2は胴部下半から底部を欠損するが、いずれも口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめる。また1・2とも、胴部外面にはヘラミガキが施される。いずれも胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。

図6.33-3・4は甕の底部である。3・4とも外面にヘラミガキ、内面にナデが施されるが、3の内面には押圧時についた爪跡が顕著に残る。いずれも胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓産の胎土である。

これら、方形周溝墓2の墳丘上・周溝内で検出された土器群は、いずれも弥生時代中期後葉に位置付けられる特徴をもつ。先述のように、方形周溝墓2は方形周溝墓1に後出して形成されたことが、層位

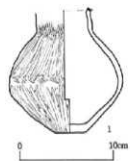


図6.34 方形周溝墓2甕土下層出土土器

的には確認されているが、土器型式上では時期分離を行うことが難しい状況にある。このことから、2つの方形周溝墓は短期間の内に形成された可能性が高い。

#### 【その他の出土遺物】

図6.34は方形周溝墓2盛土直下層(5a<sub>2</sub>層)より出土した土器である。弥生時代中期後半に位置付けられる。広口壺で、口縁部を欠損する。外面はハケののち、胴部下半にヘラケズリを施し、さらに胴部全面にミガキを施している。また内面にはナデがみられる。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓型の胎土である。

図6.35は堤状遺構とその周辺より出土した土器である。1が堤状遺構上面、2が115-溝、3が堤状遺構盛土からそれぞれ検出された。いずれも5a<sub>1</sub>層に伴うものと考えられ、弥生時代中期後葉に位置付けられる。

図6.35-1は水差し形土器である。胴部下半から底部を欠損する。頸部には6状の列点文が、肩部には2条の櫛描篋状文がみられる。櫛描篋状文の原体幅28mmを測る。把手を欠損するが、貫通して取り付けられている。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓型の胎土である。

図6.35-2は高杯の脚部である。脚端部は面をなし、1条の凹線文が施される。脚柱は中空状を呈し、円盤充填法がみられる。外面は杯部にヘラケズリの痕跡を残すが、上半にミガキ、下半にナデが施される。また内面にはヘラケズリがみられる。

図6.35-3は甕である。胴部下半から底部を欠損する。口縁部はゆるやかに外反する。外面にはハケが、内面にはハケののちヨコ方向の粗いミガキが施される。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓型の胎土である。

図6.36は方形周溝墓関連の遺物である。1・2は河道151、3は河道152に落ち込んだ5a層中より検出された。両遺構は第3遺構面で検出されたが、出土した土器は弥生時代中期に位置付けられる。おそらく、

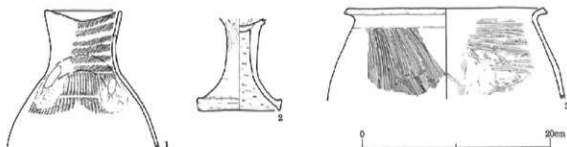


図 6.35 堤状遺構 1 とその周辺出土土器

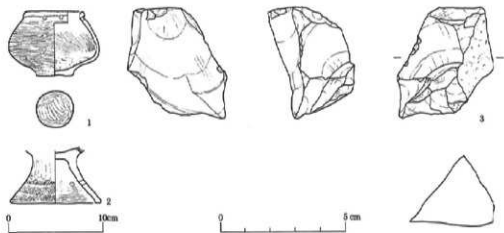


図 6.36 方形周溝墓関連遺物

両河道により弥生中期後葉の土器包含層である5a層が侵食されたときに河道内埋土中に混入したものと思われる。特に、図6.36-1は、方形周溝墓1主体部1直上の5a層崩落土中から出土した。主体部1付近の墳丘上に置かれていた土器の可能性が高い

図6.36-1は無頸壺である。口縁部は折り返しにより肥厚し、底部はやや上げ底状を呈する。外面にはミガキが、内面にはハケが施される。また口縁部の下位には、2対1組の穿孔が2方向にみられる。いずれも焼成前の穿孔である。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓型の胎土である。図6.36-2は台付鉢または水差形土器の脚部である。脚裾部には櫛状工具による梳状列点文がみられ、原体幅は15mmを測る。また4方向からの穿孔がみられる。胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西麓型の胎土と思われる。図6.36-3はサヌカイト製の石核である。一部に自然面を残す。背面は剥離時に欠損し、段状を呈している。

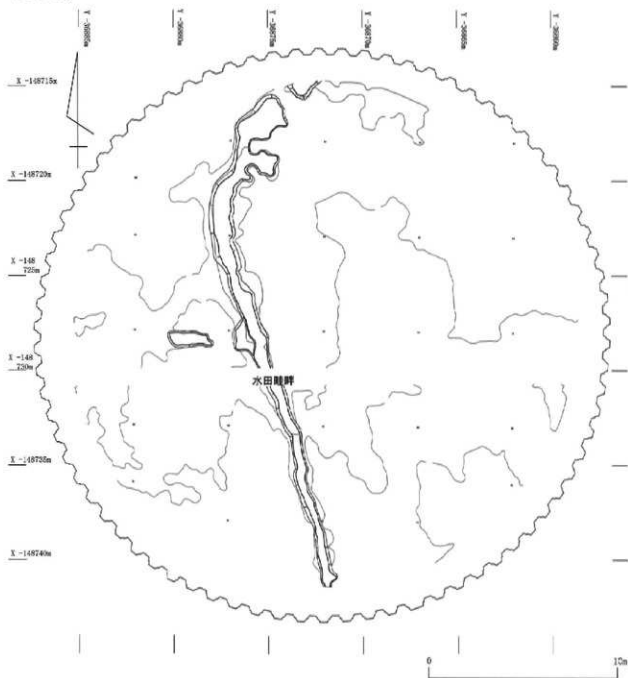


図 6.37 第6遺構面平面図

## 4. 第6遺構面（弥生時代前期～中期前半）

## 【水田畦畔の検出】（図6.37）

第4章に述べたように、6-3層上面で南北方向を基軸とする水田畦畔を検出した。6-3層自体は暗褐色で有機物を多量に含んだ粘土層である。直上に堆積した6-2層は暗灰色粘土層で植物ラミナなどを多く含み、弱い流水作用によって堆積したものと思われる。両層の層理面は土層断面・遺構検出平面いずれにおいても明確であった。検出された主要畦畔は高さ約15～20cm・幅約120cm程度の規模である。北北西-南南東方向が基軸方向であるが、調査区北端部で北北東-南南西方向に緩やかに屈曲している。また、畦畔北端部は途切れる部分があり、水口として機能していた可能性がある。

この基軸畦畔からは僅かに2つの支畦畔が派生している。一つは調査区北部の主要畦畔屈曲部付近であり、長さ約200cmにわたり東方向に小さく派生している。また、もう一つの支畦畔は、調査区中央付近から西方向に100cm程度と150cm程度の間隔をおいて220cm程度の長さにわたり西方向へと派生している。支畦畔の途切れた部分は水口とも考えられる。後述するように、6-3層は弥生時代前期に形成された可能性が高いため、検出された水田は弥生時代前期～中期前半に機能した可能性が高い。

## 【6-2層・6-3層出土遺物】（図6.38）

図6.38は6-2層、6-3層出土の遺物である。1は6-2層から、2・3は6-3層からそれぞれ検出された。

図6.38-1は木製扉板である。上端を欠損するが、下端片鏝には断面が半楕円形を呈する軸部がみられる。上端の軸部が欠失していることや、軸部が半楕円形を呈することから、断面木製扉板を転用したものと思われる。スギを素材としている。6-2層については共伴土器が皆無なため、所属時期が判然としない。後述するように6-3層が弥生時代前期の可能性が高いため、6-2層はその直後、弥生時代中期前半に形成されたと考えるのが妥当であろう。弥生時代中期以前の扉材については頻例が少なく、貴重な出土例である。

図6.38-2・3は壺の底部である。外面にはミガキ、内面にはナデが施される。このうち3の外面は、ハケのちミガキが施されたことが観察できる。なお2の底部にはミガキが、3の底部にはナデがみられる。2・3の胎土には角閃石を多量に含み、いわゆる生駒西龍産の胎土である。

これら出土した土器は、いずれも弥生時代前期に位置付けられる。このため6-3層は弥生時代前期に形成されたと考えられ、先述の第6遺構面で検出された水田は弥生時代前期～中期前半に機能した可能性が高い。

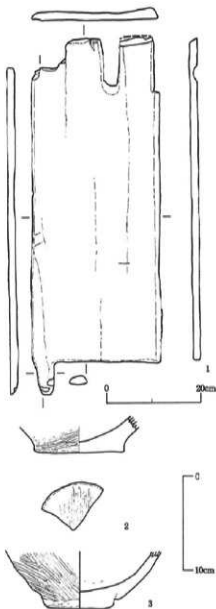


図6.38 6-2層出土木製扉・6-3層出土土器

## 第7章 基礎分析・考察

## 第1節 方形周溝墓埋葬人骨の分析

安部 みき子

東大阪市若江に位置する瓜生堂遺跡の弥生時代中期後葉の方形周溝墓1から出土した4基の木棺のうち2基から人骨が出土した。人骨の保存は非常に悪く、木棺の底板に頭骨と長骨の一部がわずかな骨質と輪郭を留めている状態である。

## 主体部2人骨

出土状況：頭骨は頭蓋冠と下顎骨が遺存し、顔面頭蓋は破損している。頭蓋冠は出土状況が大変悪いため、復元できなかった。下顎骨の保存は悪かったが下顎体の形態は留めており、左右切歯、犬歯、右小臼歯、左第1大臼歯と第3大臼歯が釘植している（表7.1）。左第3大臼歯の歯根は完成しているが、萌出の方向が前方に水平で歯槽内に埋没しているため、生体では萌出していなかったと思われる（写真7.2）。

表7.1 下顎歯の出土表

左								右							
M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
●	-	●	-	-	-	●	●	●	●	●	●	●	-	-	-

● は釘植している歯 - は遺失している歯

表7.2 下顎歯の計測値

	左		右	
	頬舌径	近遠心径	頬舌径	近遠心径
I1	不可	不可	不可	不可
I2	5.55	6.69	5.38	7.49
C	6.17	7.35	6.19	7.33
P1	-	-	7.02	6.80
P2	-	-	7.65	7.79
M1	10.20	11.05	-	-
M2	-	-	-	-
M3	不可	不可	-	-

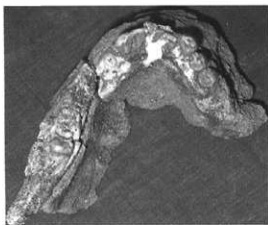


写真7.1 主体部2人骨下顎

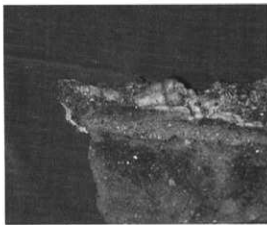


写真7.2 主体部2人骨左第3大臼歯

体幹の骨格は骨盤の位置に骨片が認められた以外はすべて遺失している。四肢骨は長骨の骨端がすべて破損しており、骨幹のみ遺存している。上肢は右上腕骨の骨幹に平行して前腕骨の骨幹が遺存している。このことより、上肢は肘関節を強屈させていたと思われる。上肢骨は保存状態が悪く、取り上げ時にバラロイドで固められているため、前胸骨の同定は困難であった。下肢骨は股関節も膝関節も伸展した状態で長骨の骨幹が遺存している。手と足の骨格は遺存していなかった。骨の保存状態が悪く計測は出来なかったが、歯の計測はできた(表2)。

性の判定出来る骨の部位が出土していない。年齢は、第1大臼歯の磨耗の程度と第3大臼歯の歯根が完成していることより25歳前後と推定される。

#### 主体部4人骨

出土状況：頭骨は頭蓋冠と下顎骨の輪郭が認められる程度の遺存状態である。体幹の骨格は胸骨の位置に骨片が認められたが骨の同定は出来なかった。四肢骨は長骨の骨端がすべて破損しており、骨幹のみ遺存している。上肢は左上胸骨がある位置に平行して前腕骨がみられ、肘関節を屈曲していたと思われる。下肢では股関節と膝関節は伸展した状態で長骨が遺存している。足はわずかに骨の輪郭を留めており、足根部を揃えた状態で出土している。この人骨も保存状態が悪く、骨計測は出来なかった。また、性と年齢を判定する部位が遺存していないが、骨の大きさから成人である。

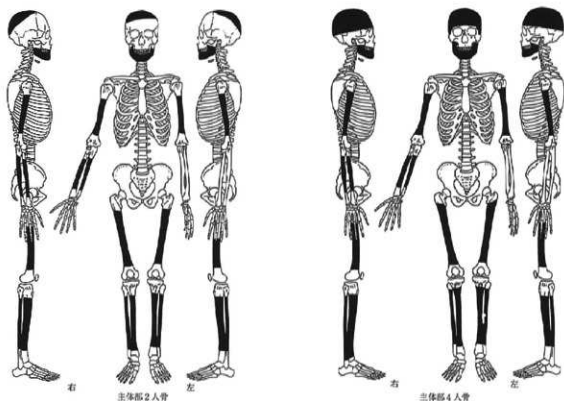


図7.1 主体部2・4人骨残存部位



## 第2節 瓜生堂遺跡（02-1調査区）の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

本調査区の発掘調査では、上位より中～近世の高畠、古代の独立柱建物群、古墳時代前期の流路、弥生時代後期の水田畦畔、弥生時代中期後葉の方形周溝墓群、弥生時代前期～中期前半の水田畦畔が検出された。ここでは、弥生時代における当該調査地点の自然環境について花粉分析と珪藻分析から、さらに検出された水田耕作層とその前後層におけるイネのプラント・オパール含有量について植物珪酸体（プラント・オパール）分析からそれぞれ検討を行った。

### 2. 試料

調査地点は、N15E5グリッドの北壁である。分析試料は、上位より灰色粘土混じりシルト（4-1層）の上下、灰色細粒砂混じり粘土（4-5層）、黒色シルト混じり極細粒砂（5a層）、オリブ灰色極細粒砂混じりシルト（5b1層）、オリブ灰色シルト～粘土ラミナ互層（6-2層）、オリブ黒色粘土混じりシルト（6-3層）、暗オリブ灰色粘土（7層）より採取された計8点である。

### 3. 花粉分析

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存していない場合もある。

#### (1) 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で糠などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び水酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈澱に石灰酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間的水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（—）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とする。

## (2) 結果

### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉24、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉23、シダ植物胞子3形態の計52である。これらの学名と和名および粒数を表1に示す。花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数および樹木花粉数を基数とする花粉ダイアグラムを作成した(図1)。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示した。主要な分類群の写真を図版に示した。また、同時に寄生虫卵についても同定した結果、2分類群が検出されたので写真に示した。以下に出現した分類群を記す。

#### [樹木花粉]

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属、椎管束東亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシダ属—アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、モチノキ属、トチノキ、ハイノキ属、ニワトコ属—ガマズミ属

#### [樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科—イラクサ科、マメ科

#### [草本花粉]

ガマ属—ミクリ属、サジオモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属サナエタ節、ギシギシ属、アカザ科—ヒユ科、ナデシコ科、キンボウケ属、アブラナ科、ツリフネソウ属、ノブドウ、アリノトウグサ属—フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

#### [シダ植物胞子]

単条溝胞子、ミズワラビ、三条溝胞子

#### [寄生虫卵]

回虫卵、鞭虫卵

### 2) 花粉群集の特徴

花粉構成と花粉組成の変化から、下位より4つの花粉分帯を設定した。

#### ・I帯 (6-2層、6-3層、7層)

樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が優占し、シイ属がやや高率に出現する。これにスギ、コナラ属コナラ亜属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科が伴われる。草本花粉はガマ属—ミクリ属、イネ科、カヤツリグサ科の出現率がやや高い。

#### ・II帯 (5a層、5b層)

花粉の総数は少ないが、樹木花粉ではシイ属、コナラ属アカガシ亜属の出現率がやや高く、コナラ属コナラ節が伴われる。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属の出現率が高い。

#### ・III帯 (4-1層下部、4-5層)

樹木花粉はコナラ属アカガシ亜属が高率に出現し、スギ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科が伴われる。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科の出現率が高く、ヨモギ属、オモダカ属、ミズアオイ属が伴われる。4-5層ではミズワラビが検出された。

表7.3 瓜生堂遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	和名	時期									
			4-1上層	4-1下層	4-5	5a	5b1	6-2	6-3	7		
<i>Arboreal pollen</i>		樹木花粉										
<i>Polecarpas</i>		マキ属			1				1			
<i>Alnus</i>		ヤシ属	2	3	2				2	5	6	
<i>Tsuga</i>		ツガ属	3	1	1				1	4	1	
<i>Pinus subgen. Diphylloides</i>		マツ属短葉種系属	4	4	5			1	2	5	4	
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	47	28	39		6	1	38	32	36	
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ	1	1	2							1
<i>Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae</i>		イタドリ-イヌゲヤク-ヒノキ科	11	22	7			2	10	8	18	
<i>Juglans</i>		クルミ属										1
<i>Platanus raliifolia</i>		ヤブダモ		2	1					1	2	
<i>Alnus</i>		ハンノキ属			2	1	1				4	
<i>Betula</i>		カバノキ属	2	1	1				1	2	2	
<i>Corylus</i>		ハシバミ属			1							
<i>Corylus-Ostrya japonica</i>		クマシロアザミ	1		1			1	2	4	6	
<i>Castanea crenata</i>		クリ	3	6	5			6	7	5	2	
<i>Castanopsis</i>		シイ属	29	21	19	10	21	81	12	44		
<i>Fagus</i>		ブナ属	1	2	2					1	2	
<i>Quercus subgen. Litoralafalans</i>		コナラ属コナラ亜属	12	18	9	8	7	10	16	22		
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	85	79	76	8	15	115	74	158		
<i>Ulmus-Zelkova sericea</i>		エビノキ属	4	1	1			1	2	2		
<i>Celtis-Alphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ	1	4	4				1	4	8	
<i>Bux</i>		ヤブツバキ属			1							
<i>Ancistrus turbinata</i>		トナリノキ	2	4	1				10		1	
<i>Symplocos</i>		ハイノキ属		1								
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ウツロミ属-ガマズミ属	1					1				
<i>Arboreal-Nonarboreal pollen</i>		樹木・草本花粉										
<i>Moraceae-Urticaceae</i>		クワ科-ウツクサ科		2	1			8	5	1		
<i>Leguminosae</i>		マメ科	1							1		
<i>Nonarboreal pollen</i>		草本花粉										
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属-ミクリ属	2	13	1	2				7	72	
<i>Alisma</i>		サゴシモダカ属	1									
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属	7	1	2					1		
<i>Gramineae</i>		イネ科	132	89	74	41	49	38	75	79		
<i>Oxys tyte</i>		イネ属型	24	3	5			3	2	13		
<i>Cyperaceae</i>		カキツバダ科	75	49	62	20	36	22	63	10		
<i>Ancistrus Arisab</i>		イボクサ	1					1				
<i>Muscovicia</i>		ミスズオシ属	7	3	6				1	2		
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>		タデ属ササユタゲ節	3	3	1	2			1	1		
<i>Rumex</i>		ギンギン属										1
<i>Chenopodiaceae-Amaranthaceae</i>		アカザ科-ヒコ科										1
<i>Caryophyllaceae</i>		ナツシロ科		1						1		
<i>Ranunculaceae</i>		キンボク属										1
<i>Cruceferae</i>		アブラナ科			1	3			1			
<i>Jupatiaceae</i>		ツリフネソウ属		1								
<i>Aspladietes Irenopsiscolata</i>		ノブドウ			1							
<i>Halagru-Merophyllum</i>		アリノトウグサ属-ツチマ属		2								
<i>Hydrocotylaceae</i>		サトメダナ科					1					
<i>Agroidae</i>		セリ草科	1	1	1			2		1		
<i>Actinostemma tubulosum</i>		ゴキウソ								1		
<i>Lactucoidae</i>		タンポポ科				2						
<i>Asteroidae</i>		キク草科	2		2				1	1		
<i>Asteraceae</i>		ヒヨドリ属	4	9	35	28	18	5	9	7		
<i>Fern spore</i>		シダ類孢子										
<i>Mosslike type spore</i>		蘚虫類孢子	11	7	13	19	5	11	5	2		
<i>Colapogonia</i>		ミズウラボシ			1							
<i>Tritate type spore</i>		三葉蘚孢子	4	6	6	1			6	1	1	
<i>Arboreal pollen</i>		樹木花粉	299	197	189	31	57	259	173	336		
<i>Arboreal-Nonarboreal pollen</i>		樹木・草本花粉	1	2	1			8	4	1		
<i>Nonarboreal pollen</i>		草本花粉	220	167	192	169	196	73	165	166		
<i>Total pollen</i>		花粉総量	430	366	372	140	171	327	323	499		
		試料1cm <sup>2</sup> 中の花粉総量	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$		
<i>Unknown pollen</i>		不明花粉										
<i>Fern spore</i>		シダ類類孢子	15	10	20	20	2	17	3	3		
<i>Helianth eggs</i>		菊虫類卵								1		
<i>Ancistris</i>		トナリノキ								2		
<i>Trichuris</i>		棘虫類卵								2		
<i>Total</i>		計										
		試料1cm <sup>2</sup> 中の菊虫類卵総量								30		
<i>Stomte cell</i>		右欄数								(+)		
		明らに交渉七段階	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	



## ・Ⅳ帯（4-1層上部）

樹木花粉はコナラ属アカガシ亜属が高率に出現し、スギ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科が伴われる。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科が優占し、カヤツリグサ科もやや高率である。

## (3) 花粉分析から推定される植生と環境

## 1) I帯期（弥生時代前期）

周辺には、コナラ属アカガシ亜属を主とするカシ林とシイ林の照葉樹林が分布していた。やや遠方にはスギ、コナラ属コナラ亜属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科なども分布していたとみられる。堆積地および周囲は、ガマ属—ミクリ属、イネ科、カヤツリグサ科などの水生植物が生育する浅い水域の環境であったと推定される。

## 2) II帯（弥生時代中期後葉）

シイ林がやや拡大する一方、湿潤を好むスギ林が減少することから、周辺の乾燥化が示唆される。堆積地および周囲は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属の生育するやや乾燥した草原であったと推定される。

## 3) III帯（弥生時代後期）

周辺では、コナラ属アカガシ亜属を主とするカシ林が拡大し、スギ林も拡大する。イネ科、カヤツリグサ科の草本が多く生育し、水田雑草の性格をもつオモダカ属、ミズアオイ属、ミズワラビの抽水植物が伴われる。こうしたことから近傍では水田の拡大が推定される。

## 4) IV帯

イネ属型を含むイネ科が優占することから、本地点ないし近隣で水田が営まれていたと推定される。森林植生については前時期と大きな変化はない。

## 4. 珪藻分析

珪藻は主に水域に生息する珪酸の被殻を有する単細胞植物であり、海水域から淡水域のほぼすべての水域に生活し、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息する。塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じてそれぞれの種類が固有にまたは許容範囲をもって多重な環境要因に生育する。珪酸の被殻は死後、堆積粒子として堆積物中に残存する。堆積物より検出した珪藻遺骸の種類構成や組成は当時の堆積環境を反映し水域の環境を主とする古環境の復元に用いられる。

## (1) 方法

試料に以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から1cm<sup>2</sup>を秤量する。
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温し反応させながら一晩放置する。
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5時間静置後上澄みを捨てる。この操作を5、6回繰り返す。
- 4) 残渣をマイクロビレットでカバーガラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。

プレパラートは生物顕微鏡で600～1500倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。同定・計数は珪

藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレバート全面について精査を行った。

## (2) 結果

試料から出現した珪藻は、真-中塩性種（海-汽水生種）12分類群、貧塩性種（淡水生種）104分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表2に示す。また珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図2に示す。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記す。

### [真-中塩性種]

*Diploneis smithii*, *Navicula peregrina*

### [貧塩性種]

*Amphora copulata*, *Cocconeis placentula*, *Cymbella silesiaca*, *Cymbella turgidula*, *Epithemia adnata*, *Eunotia praeurupta*, *Fragilaria construens*, *Fragilaria pinnata*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema parvulum*, *Gyrosigma* sp., *Hantzschia amphioxys*, *Navicula cuspidata*, *Navicula elginensis*, *Navicula mutica*, *Navicula pupula*, *Navicula viridula* v. *rostellata*, *Nitzschia brevissima*, *Pinnularia Schroederii*, *Rhopalodia gibberula*

珪藻群集の構成と組成の変遷から、下位よりⅠ帯、Ⅱ帯、Ⅲ帯、Ⅳ帯、Ⅴ帯の珪藻分帯を設定した。

#### 1) Ⅰ帯（7層）

珪藻数は少ないが、真-中塩性（海-汽水生種）種で海水泥質干潟指標種群の *Diploneis smithii* が優占して出現する。

#### 2) Ⅱ帯（6-3層）

貧塩性（淡水生）種がほとんどを占め、*Fragilaria construens*, *Fragilaria pinnata* などの止水性種が優占し、流水不定性種の *Amphora copulata*、流水性種の *Navicula elginensis*, *Navicula viridula* v. *rostellata* などが伴われる。

#### 3) Ⅲ帯（6-2層）

貧塩性（淡水生）種で流水不定性種の *Gyrosigma* sp.、中塩性（汽水生）種の *Navicula peregrina* がやや高率で出現し、*Cymbella turgidula*, *Navicula viridula* v. *rostellata* が伴われる。

#### 4) Ⅳ帯（5a層、5b層）

珪藻の数は少なく、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys* がほとんどの割合を占めている。

#### 5) Ⅴ帯（4-1層上部、4-1層下部、4-5層）

貧塩性種の出現率が極めて高く、陸生の *Navicula mutica* の出現率がやや高い。また、*Cymbella turgidula*, *Navicula viridula* v. *rostellata* 等の中～下流性河川指標種群の流水性種も比較的多く出現する。

### (3) 珪藻分析から推定される堆積環境

#### 1) Ⅰ帯（弥生時代前期）

珪藻数は少ないが、真-中塩性（海-汽水生種）種の海水泥質干潟指標種群が優占する。こうしたことから、海水から汽水の泥質干潟の環境が示唆される。

#### 2) Ⅱ帯

止水性種が優占し、流水不定性種、流水性種が伴われるため、止水性の水域の環境が強かったと推定

表 7.3 瓜生堂遺跡における珪藻分析結果

分類群	試料							
	4-1層上部	4-1層下部	4-5層	5a層	5b1層	6-2層	6-3層	7層
黄塩性種 (淡水生種)								
<i>Achnanthes crenulata</i>	4	1						
<i>Achnanthes exigua</i>		2						
<i>Achnanthes inflata</i>	1	1		1				
<i>Achnanthes lanceolata</i>		4	1			1	1	
<i>Actinella brasiliensis</i>		1						
<i>Amphora copulata</i>	4	5	7	2		3	19	1
<i>Amphora normanii</i>						2		
<i>Amphora</i> sp.	1							
<i>Anomoeoneis sphaerophora</i>	2		1	1			1	
<i>Aulacoseira ambigua</i>		1		1				
<i>Aulacoseira granulata</i>			1					
<i>Aulacoseira</i> sp.	1	2				1		
<i>Caloneis bacillum</i>							1	
<i>Caloneis hyalina</i>		2				1	2	1
<i>Caloneis sillicula</i>		1					1	
<i>Caloneis</i> sp.			1					
<i>Cocconeis piscentula</i>	3	9	2	1		8	3	
<i>Cyclotella</i> sp.	1							
<i>Cymatopleura solea</i>		2				1		
<i>Cymbella cuspidata</i>		1	1					
<i>Cymbella minuta</i>			1					
<i>Cymbella naviculiformis</i>	2						1	
<i>Cymbella silesiaca</i>	2	4				3	2	1
<i>Cymbella sinuata</i>		4	1			3		
<i>Cymbella tumida</i>	1	1	2			6		
<i>Cymbella turgidula</i>	7	5	4			6		
<i>Diploneis finnica</i>								1
<i>Diploneis</i> sp.	1						1	
<i>Diploneis subovalis</i>		2					1	1
<i>Diploneis yatukaensis</i>							1	
<i>Epithemia adnata</i>	1	5	10			1	2	
<i>Eunotia bilunaris</i>							1	
<i>Eunotia didon</i>			5					
<i>Eunotia minor</i>		2	1			1	2	
<i>Eunotia paludosa</i>		1						
<i>Eunotia pectinalis</i>			1					
<i>Eunotia praeurupta</i>	12	5	3				2	1
<i>Eunotia scleirolii</i>							1	
<i>Fragilaria capucina</i>						4	1	
<i>Fragilaria coarctans</i>		1				2	79	1
<i>Fragilaria coarctans</i> v. <i>vent</i>	2		3					1
<i>Fragilaria pinnata</i>						1	20	
<i>Frustulia vulgaris</i>		1				1	1	
<i>Gomphonema acuminatum</i>		4						
<i>Gomphonema angustatum</i>	1							
<i>Gomphonema angustum</i>		4	1					
<i>Gomphonema clavatum</i>						2		
<i>Gomphonema clevei</i>				3				
<i>Gomphonema gracile</i>		9	3					1
<i>Gomphonema olivaceum</i>			2					
<i>Gomphonema parvulum</i>	6	3	6			4	4	
<i>Gomphonema</i> sp.			3					
<i>Gomphonema truncatum</i>		1				1		
<i>Gyrosigma</i> sp.	4	28	13	2		36	7	
<i>Hantzschia amphioxys</i>	4	2	2	20		1	1	
<i>Hantzschia rhaetica</i>		1						
<i>Navicula americana</i>			1				7	
<i>Navicula bacillum</i>						1		
<i>Navicula concentrica</i>		1				1		
<i>Navicula confervacea</i>		1				1	5	
<i>Navicula contenta</i>	1	1	1	1		1	3	
<i>Navicula cryptotenella</i>							2	

<i>Navicula cuspidata</i>	5	2				2	2	
<i>Navicula decussis</i>		1						
<i>Navicula elginensis</i>	1	5	4	2		3	7	
<i>Navicula goeppertiana</i>		1					2	
<i>Navicula kotschyi</i>		1					8	
<i>Navicula laevissima</i>		1	2				5	
<i>Navicula mitigata</i>	1							
<i>Navicula mutica</i>	23	5	8	7		2	3	1
<i>Navicula oppugata</i>			1					
<i>Navicula pseudokotschyi</i>			1					
<i>Navicula papula</i>		6		1		6	9	
<i>Navicula pusilla</i>							1	1
<i>Navicula radiosa</i>		1				3	5	
<i>Navicula sp.</i>	1			3				
<i>Navicula viridula v. rostellata</i>		8	2			11	8	
<i>Neidium affine</i>			1	1		1		
<i>Neidium ampliatum</i>	1	3				1		
<i>Nitzschia brevissima</i>	5	2	2			1	1	
<i>Nitzschia frustulum</i>						2	2	
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>		4				1	2	
<i>Pinnularia borealis</i>			1	9				
<i>Pinnularia brevicostata</i>			1					
<i>Pinnularia gibba</i>	1	2	3			1		
<i>Pinnularia interrupta</i>							1	
<i>Pinnularia major</i>	1							
<i>Pinnularia microstauron</i>		3				2		
<i>Pinnularia schroederii</i>		1	4	2			4	
<i>Pinnularia subcapitata</i>							1	
<i>Pinnularia viridis</i>		1	1				4	
<i>Rhicosphenia abbreviata</i>		1						
<i>Rhopalodia gibba</i>	1		2			2	4	
<i>Rhopalodia gibberula</i>		3				2	3	4
<i>Stauroneis lauenburgiana</i>						1	1	
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	1	5					4	
<i>Stauroneis smithii</i>	1		1					
<i>Stauroneis sp.</i>				1				
<i>Surirella angusta</i>						2		
<i>Surirella ovata</i>		1					1	
<i>Surirella splendida</i>						1		
<i>Synedra ulna</i>	1					1	1	
<i>Tabellaria fenestrata-flocculosa</i>						1		
<i>Thalassiosira bramptonae</i>								5
真・中塩性種 (海・汽水性種)								
<i>Bacillaria paradoxa</i>						1	1	
<i>Caloneis parvula</i>								3
<i>Diploneis pseudovalis</i>								2
<i>Diploneis smithii</i>		2						25
<i>Navicula brasiliiana</i>	1							
<i>Navicula crucicula</i>		1				1		
<i>Navicula digitoraddata</i>		2						
<i>Navicula mentaculus</i>						1		
<i>Navicula peregrina</i>		1	1			23		
<i>Nitzschia levidensis v. victoriae</i>		2	1			2	2	
<i>Nitzschia plana</i>						1		
<i>Opheora sp.</i>								1
合計	105	183	116	55	0	173	255	50
未同定	8	26	13	4	0	25	51	6
破片	84	94	107	85	5	93	132	202
試料 1 cm <sup>2</sup> 中の個体密度	7.9	1.3	1.9	4.7	(-)	2.5	3.9	2.2
	$\times 10^4$	$\times 10^6$	$\times 10^5$	$\times 10^4$	(-)	$\times 10^5$	$\times 10^6$	$\times 10^4$
完形個体存率 (%)	57.4	69.0	54.7	41.0	(-)	68.0	69.9	21.7





される。他に流水の影響もあったと考えられ、河川の影響を受ける沼沢地の環境が示唆される。

### 3) III帯

貧塩性（淡水生）の流水不定性種が優占し、中塩性（汽水生）種がやや高率で出現する。こうしたことから、汽水の影響のある不安定な沼沢地の環境が示唆される。

### 4) IV帯（弥生時代中期後葉）

珪藻の数は少なく、陸生珪藻がほとんどであることから、やや乾燥した陸地の環境が示唆される。

### 5) V帯（弥生時代後期）

陸生珪藻の出現率がやや高く、中～下流性河川指標種群の流水性種も比較的多く出現することから、河川の影響のある湿った環境が示唆される。

## 5. 植物珪酸体（プラント・オパール）分析

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（ $\text{SiO}_2$ ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体（プラント・オパール）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。また、イネの消長を検討することで稲作跡（水田・畠）の検証や探査も可能である（藤原・杉山、1984）。

### (1) 方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）する。
- 2) 試料約1gに直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加する（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）。
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理を行う。
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散を行う。
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子を除去する。
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラートを作成する。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10<sup>-5</sup>g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネの換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節型は0.48である。

### (2) 分析結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、タケ節科（ネザサ節型、その他）および未分類等である。これらの分類群について定量を行い、その結果

を表3および図3に示した。以下、各分類群の検出状況を記す。

イネは4-1層、4-5層、5a層、5b<sub>1</sub>層、6-2層および6-3層で検出されているが、いずれも3,000個/g未満とやや低い密度である。ヨシ属は4-1層上部、4-5層、5a層、6-2層、6-3層および7層で検出されている。4-5層と7層では比較的高い密度である。ススキ属型は4-5層、5a層、5b<sub>1</sub>層、6-2層および6-3層で検出されているがいずれもやや低い密度である。ネザサ節型は7層を除く各層で検出されている。このうち、4-1層上部では比較的高い密度である。

### (3) 瓜生堂遺跡における稲作の可能性

イネのプラント・オパールは7層以外の各層で検出されている。このうち、水田耕作土とされる4-5層と6-3層では、プラント・オパール密度がそれぞれ1,500個/g、2,400個/gであり、水田跡の可能性を判断する際の基準値である3,000個/gを下回っている。ただし、両層ともいずれも直上層よりも高い密度であることから、上層から後代のプラント・オパールが混入した危険性は考えにくい。したがって、4-5層と6-3層では調査地点もしくはその近傍において稲作が営まれていた可能性が考えられる。これら以外では、4-1層上部と5a層で2,400~2,500個/gと比較的高い密度である。なお、5a層では隆起部より方形周溝溝が検出されていることから、水田跡である可能性は考えにくい。よって、ここで検出されたプラント・オパールは上層水田から混入したものか、あるいは方形周溝溝築造の際に下位もしくは周辺の水田土壌が混入した可能性が考えられる。4-1層については堆積状況が不明瞭であるが、プラント・オパール密度からみて稲作跡である可能性も否定できない。その他については他所からの混入である可能性が高いと判断される。

イネ以外では、4-5層と7層でヨシ属が高密度で検出されており優勢となっている。このことから、両層の堆積時は調査地付近は湿地の環境であったと推定される。

## 6.まとめ

瓜生堂遺跡において、花粉分析、珪藻分析さらに植物珪酸体（プラント・オパール）分析をあわせて行い、弥生時代における自然環境と農耕について検討を行った。その結果、以下のことが推察された。

下位より、7層、6-3層、6-2層の時期（Ⅰ帯期、弥生時代前期）は、コナラ属アカガシ亜属を中心とするカシ林を主とする照葉樹林が分布し、堆積地および周囲はガマ属-ミクリ属、イネ科、カヤツリグサ科の水生植物が生育する浅い水域の環境が推定された。6-3層と6-2層では調査地あるいは周辺で稲作が営まれていたことが示唆された。なお、7層の時期は海水から汽水の泥質干潟の環境であり、6-3層の時期になると河川の影響を受ける沼沢地の環境になり、6-2層の時期では汽水の影響がみられることから、7層の時期から6-3層の時期にかけて海水準が低下し、6-2層の時期には再び上昇した可能性が示唆された。

5a層、5b<sub>1</sub>層の時期（Ⅱ帯期、弥生時代中期後葉）は、堆積地および周囲は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属の生育するやや乾燥した陸域の環境に変わり、周辺では乾燥を好むシイ林の拡大が認められた。

4-5層、4-1層下部の時期（Ⅲ帯期、弥生時代後期）では、コナラ属アカガシ亜属を主とするカシ林が拡大し、イネ科やカヤツリグサ科に加え、水田雑草の性格をもつオモダカ属、ミズアオイ属さらにミズワラビなどの抽水植物の生育が盛んになる。調査地は河川の影響をうける湿った環境が示唆された。

4-1層上部の時期（Ⅳ帯）になると、本地点ないし近接地で水田が営まれていたと推定された。ここでも河川の影響のある湿った環境が示唆された。

#### 参考文献

- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p.73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p. 23-45.
- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29-44.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p.1-20.
- 島倉巳三郎 (1973) 本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志 (1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—. 考古学と自然科学, 20, p.81-92.
- 中村純 (1973) 花粉分析. 古今書院, p.82-110.
- 中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.
- 中村純 (1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.
- 中村純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) —数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) —プラント・オパール分析による水田址の探査—. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.
- Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. *Arch. Hydrobiol., Suppl.*15, p.131-506.
- Patrick, Reimer, C.W. (1966) The diatom of the United States, vol.1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 644p.
- Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p, National Environmental Reserch.Center.
- Patrick, Reimer, C.W. (1975) The diatom of the United States, vol.2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 213p.
- Asai, K.&, Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saxoprenous taxa. *Diatom*, 10, p.35-47.

## 第8章 調査成果のまとめ

## 【近世】

第1a・1b遺構面で高島を検出した。機能時期の詳細は不明。堆積土の観察からは継続的に耕作されていた可能性が高く、当調査区域は世～近代に至るまで耕作地として機能していたと考えられる。

## 【中世】

第2遺構面で、12世紀に機能していたと考えられる井戸が2基検出された。周囲に当該期の建物痕跡は確認できず、集落域だった可能性は低い。農業用井戸が耕作地域に設置されていたものと想定される。

## 【古代】

同じく第2遺構面で、多数の柱穴群と井戸・土坑などが検出された。柱穴群の配置から最低3棟の掘立柱建物の復元が可能であった。建物・柱穴群の形成・機能時期は奈良時代後半から平安時代前半を主体とすることが判明した。遺構群中には、奈良時代末～平安時代初頭の板組井戸が検出され、最下層からは多量の完形土器とともに鉄製動先・ガラス玉・斎串などが出土し、祭祀に関連遺物の廃棄状況が確認された。また、銅銭5枚を埋納した平安時代前半期（9世紀）の土師器甕が出土した。銅銭のうち2枚は「隆平永寶」（延暦十五〔796〕年発行）と「貞観永寶」（貞観十二〔870〕年発行）であることが判明した。土師器甕には2枚の皿・杯で入念に蓋がされており、胎衣壺などの性格をもった祭祀的埋納品だった可能性が高い。

このように、当調査区は、奈良時代後半から平安時代前半の集落域として機能したことが判明した。また、一部の土坑からは飛鳥・藤原京期の土器が出土していることから7世紀にも少数ながら遺構形成された可能性があるが、実態は不明である。

## 【古墳時代】

当該期の堆積層である3層は粗粒砂～中粒砂が主体で構成されており、交斜状トラフを形成しながら堆積していることから、流路内堆積物と考えられる。3層はその上部に若干の古墳時代中期土器を含むものの、出土土器の大半は古墳時代初頭～前期のもので占められていることから、後者の時期に当調査区で流路形成があったと考えられる。このことから、古墳時代初頭～中期は、当調査区は河川流路内に相当していたと考えられる。この流路の初期の主要流水部が第3遺構面で検出された151・152―河道であるが、前者には杭列を打設して形成した堰がもうけられていた。近隣領域への引水のための施設と考えられ、周囲に水田が形成されていた可能性がある。

## 【弥生時代】

弥生時代後期：弥生時代後期に相当する第4遺構面では、下層にある弥生時代中期後半の方形周溝墓・堤状遺構の隆起を利用して水田畦畔が形成されている状況が検出された。第4遺構面およびその前後に堆積した4-1～4-5層からは、比較的多数のイネのプラントオパールが検出されている。弥生時代後期には、継続的に水田として当調査区域が利用されていたと考えられる。

弥生時代中期後葉：弥生時代中期後葉に相当する第5a～5b遺構面においては、方形周溝墓2基が検出された。いずれも平面規模が一辺15mを超える規模で、高さ1m程度の盛土によって墳丘が形成されていた。そのうち方形周溝墓1については、周溝の途切れた隆橋から北方にむかって墳丘盛土から連続した堤状遺構が形成されていた。この周溝墓外部から周溝墓にいたる道状の施設は墳丘の形成と同時に作ら

れたと想定され、墳丘への墓道として機能した可能性が極めて高い。ただし、墓としての機能だけでなく、墳丘築造時の作業用通路としても利用された可能性も考慮する必要がある。実際、方形周溝墓1の墳丘西側斜面には、初期の埋葬にともなう供献土器の上に再盛土による墳丘拡張を行った痕跡が土層断面で確認できた。また、方形周溝墓2は、方形周溝墓1の初期墳丘の地表面に形成された土壌化層の直上に盛土をして形成されたことが土層断面で確認され、方形周溝墓1→方形周溝墓2の順に、墳丘形成が行われたことが明確となった。現状遺構の機能および墳丘形成過程について、本調査で検出された方形周溝墓は貴重なデータを提供している。

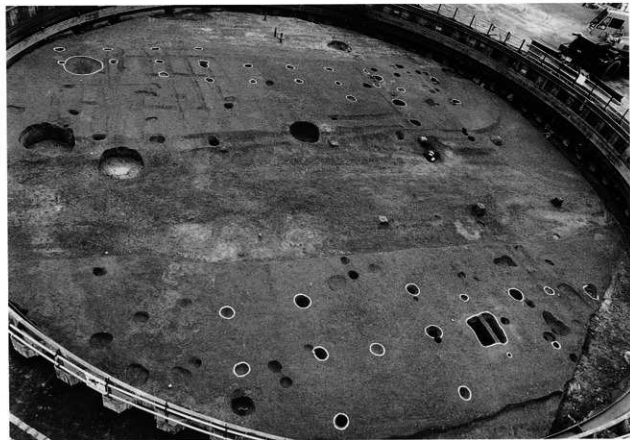
また、方形周溝墓1および2の墳丘上面もしくは厩溝から出土した多くの供献土器はすべて弥生中期後葉の所産と考えられる。先述のように、墳丘形成の先後は確認できるものの、埋葬行為などを含めた造墓時期は弥生中期後葉の短期間に限定することが可能である。

弥生時代前期～中期中葉：先述の方形周溝墓の直下には流水作用によって堆積した中粒砂～シルトが堆積していたが、その直下に形成されていた粘土層（6層）下部に相当する第6遺構面で南北方向の水田畦畔が検出された。この畦畔の耕土層の下部から弥生時代前期～中期初頭と考えられる土器片が少量出土した。第6遺構面の形成時期は弥生時代前期～中期初頭あるいはその直後と推定される。弥生時代の前半期の一時期には、当調査区域が水田域として耕作されていたと推定される。

圖 版







第2遺構面の古代遺構群



堀立柱建物2とその周辺

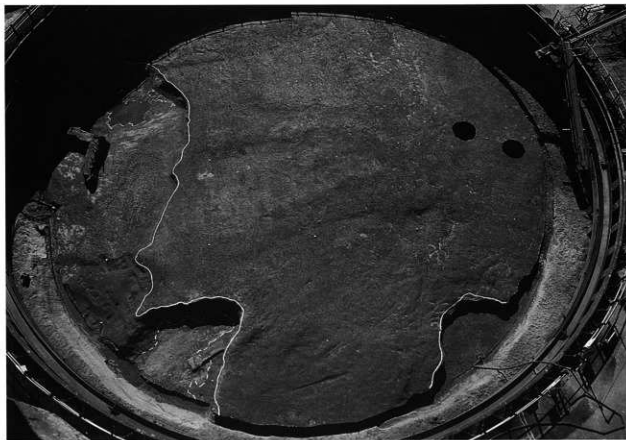
写真図版 2



52-井戸断面



52-井戸最下層遺物出土状況

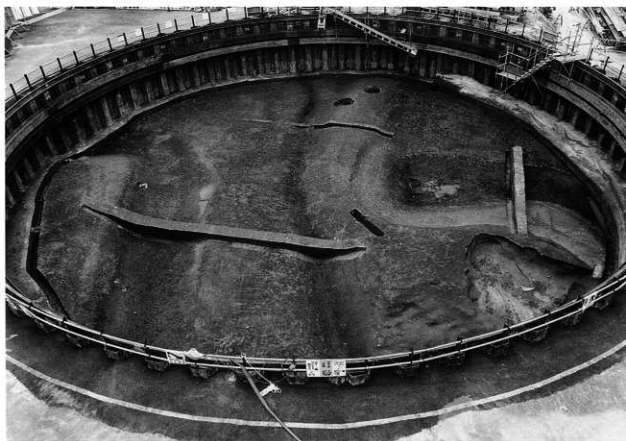


第3遺構面 151・152-河道



153-環検出状況

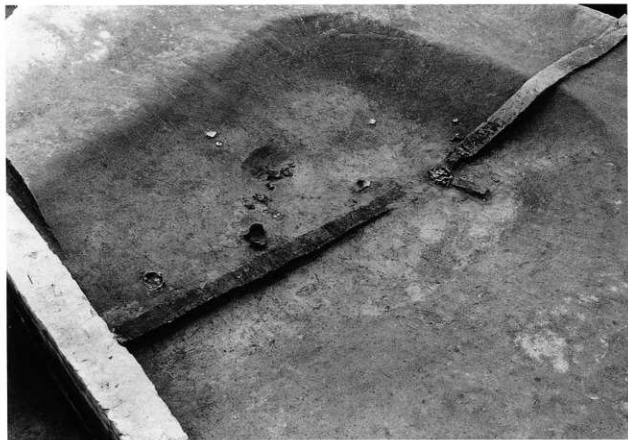
写真図版 4



第5 a 遺構面 方形周溝墓検出状況



第5 a 遺構面 方形周溝墓検出状況



方形周溝墓1北周溝遺物出土状況



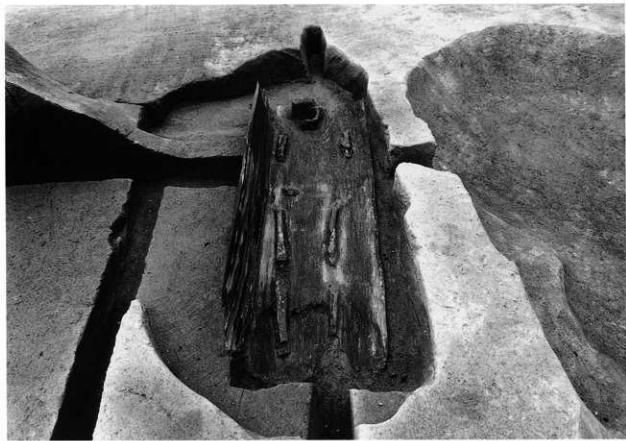
方形周溝墓1 159～161-溝



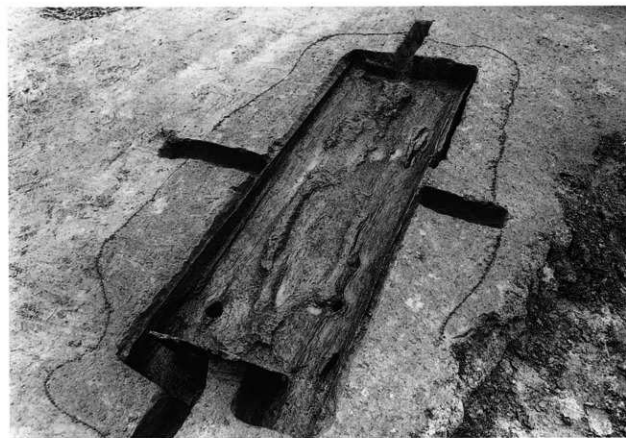
方形周溝墓 1 主体部 1～3



方形周溝墓 1 主体部 1



方形周溝墓 1 主体部 2



方形周溝墓 1 主体部 4



方形周溝墓 1 墳丘南北方向断面



方形周溝墓 1 西周溝東西方向断面





方形周溝墓 2



方形周溝墓 2 周溝供獻土器出土狀況



方形周溝墓 2 周溝供獻土器出土狀況



方形周溝墓 2 周溝供獻土器出土狀況



6-2層 木製扉出土状況



第6遺構面の水田畦畔



5. 25-16  
(2層)



5. 07-2  
(64-柱穴)



5. 25-17  
(2層)



5. 21-3  
(63-埋納遺構)



5. 07-1  
(105-柱穴)



5. 25-12  
(2層)



5. 21-1  
(63-埋納遺構)



5. 12-10  
(52-井戸)



5. 12-21  
(52-井戸)



5. 12-9  
(52-井戸)



5. 12-17  
(52-井戸)



5. 12-12  
(52-井戸)



5. 13-4  
(52-井戸)



5. 12-15  
(52-井戸)



5. 12-2  
(52-井戸)



5. 12-15  
(52-井戸)



5. 13-1  
(52-井戸)



6. 03-7  
(3層)



6. 03-14  
(3層)



6. 03-8  
(3層)



6. 03-6  
(3層)



6. 03-6  
(3層)



6. 03-12  
(3層)



6. 03-17  
(3層)



6. 03-15  
(3層)



6. 05-2  
(3層)



6. 04-3  
(3層)



6. 05-7  
(3層)



6. 34-1  
(5a2層)



6. 34-2  
(151-河道)



6. 19-10  
(方形周溝墓1北周溝)



6. 19-5  
(方形周溝墓1北周溝)



6. 19-12  
(方形周溝墓1北周溝)



6. 19-11  
(方形周溝墓1北周溝)



6. 19-13  
(方形周溝墓1北周溝)





6. 20-2  
(方形周溝墓1西周溝)



6. 21-2  
(方形周溝墓1西周溝)



6. 30-1  
(方形周溝墓2周溝)



6. 21-3  
(方形周溝墓1西周溝)



6. 31-2  
(方形周溝墓2周溝)



6. 29-6  
(方形周溝墓2周溝)



6. 29-5  
(方形周溝墓2周溝)



6. 29-3  
(方形周溝墓2周溝)



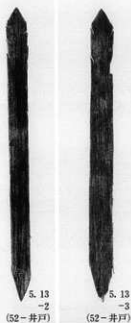
6. 29-2  
(方形周溝墓2周溝)



6. 32-1  
(方形周溝墓2周溝)



6. 32-2  
(方形周溝墓2周溝)



S. 14-1  
(52-井戸)



S. 14-2  
(52-井戸)



5. 15-1  
(52-井戸)



5. 15-2  
(52-井戸)



5. 15  
-3  
(52-井戸)



5. 16-1 (52-井戸)



5. 16-2 (52-井戸)



5. 16-3 (52-井戸)



5. 17-1 (52-井戸)



5. 17-2 (52-井戸)



5. 17-3 (52-井戸)



5. 18-2 (52-井戸)



5. 18-1 (52-井戸)



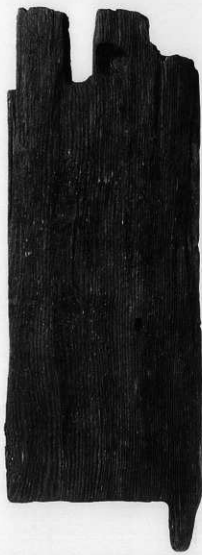
6. 20-1  
(方形周溝墓1  
西周溝下層)



6. 19-2  
(方形周溝墓1  
西周溝下層)



6. 14-1  
(方形周溝墓1  
主体部2)



6. 38-1 (6-1層)



6. 19-4  
(方形周溝墓1  
西周溝)

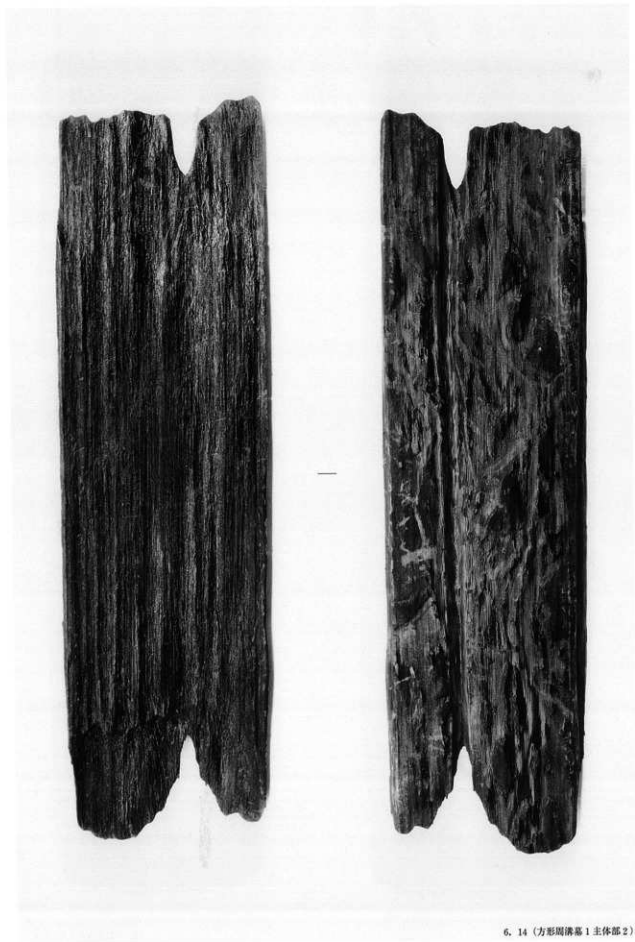


6. 19-3  
(方形周溝墓1  
西周溝)

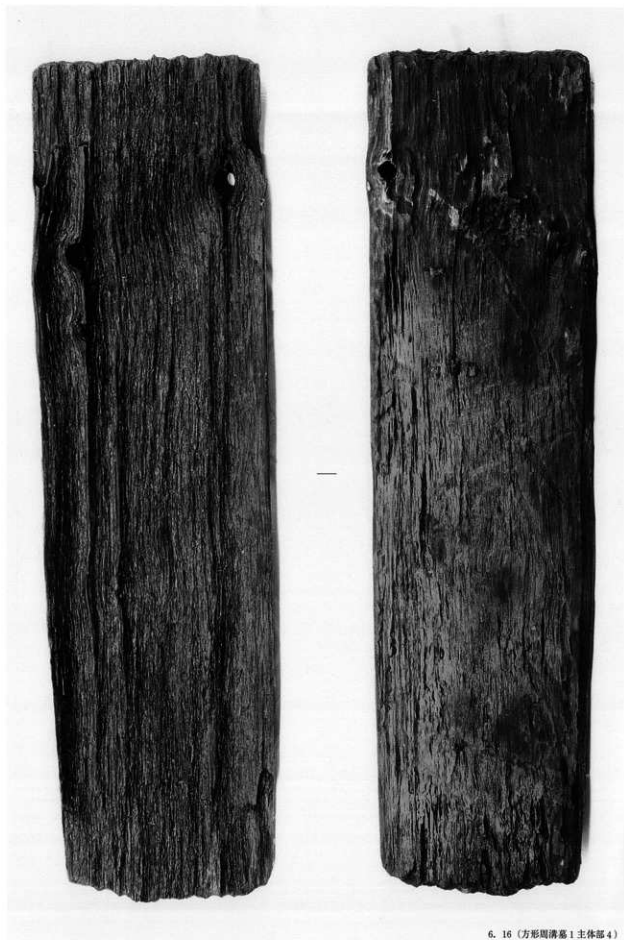


6. 13 (方形周溝墓1主体部1)





6. 14 (方形周溝墓1主体部2)



6. 16 (方形周溝墓1主体部4)

報告書抄録

ふりがな	うりゅうどういせき 2						
書名	瓜生堂遺跡 2						
副書名	寝屋川南部地下河川若江立坑建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第107集						
編著者名	河森一浩・杉山拓巳・辻本武・宮田佳代・若林邦彦						
編集機関	(財)大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 TEL072-299-8791						
発行年月日	西暦2004年2月27日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号				
うりゅうどういせき 瓜生堂遺跡	おほきふく、ひがしおほきふく 大阪府東大阪市	27227	95	北緯	2002. 4. 1～ 2003. 2. 28	774㎡	寝屋川南部地下河川 若江立坑建設
	東経			135 36' 01"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
瓜生堂遺跡	耕作地	中～近世	鳥居・井戸	土師器・瓦器			
	集落	奈良～平安時代	竪立柱建物・井戸	土師器・黒色土器 磨面土器・須恵器			
	水田	弥生時代後期	水田畦畔	弥生土器			
	方形周溝墓	弥生時代中環後半	方形周溝墓	弥生土器・石鏃・木椀			
	水田	弥生時代前期～ 中環前半	水田畦畔	弥生土器			

(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第107集

## 瓜生堂遺跡 2

寝屋川南部地下河川若江立坑建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

発行年月日 / 2004年 2月27日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 中島弘文堂印刷所  
大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号